
観賞者で干渉者

鷹村柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

観賞者で干渉者

【Nコード】

N0420R

【作者名】

鷹村柚希

【あらすじ】

トリップ体質のせいで性格が歪みまくった女子高生、瑠璃は、気が付いたら真っ白な空間にいた。

「またかよ」と思っていると、現れた自称神に世界を救ってもらうため、死んでもらったことを告げられる。

今までトリップ経験は多々あれど、まさかそんな理由で殺されるとは思っていなかった瑠璃は、

ブチキレて神をタコ殴りにし、救世主になる依頼を蹴っ飛ばし、こ
う叫んだ。

「私を最強の脇役にしろ!!」
◇◇◇基本コメディですが、ところどころシリ阿斯気味です。
主人公最強物のご都合主義物ですので、そういった物を好まない方はご注意ください。
不定期更新。一話一話の長さもまちまち。内容もかなり試行錯誤しながら書いています。
◇◇◇

第一話 遠足はたまにしかないから楽しいもんだ

目の前にあるのは、唯々白い空間だった。

私は目の前の光景に態度悪く舌打ちする。

私はさっきまで自転車で最寄の本屋に向かっていたはずだ。
こんな真っ白な空間にはいなかったし、来た覚えもない。

「……チッ。またかよ」

こんな空間、知らないと言えは知らないのだが、心当たりはと言うと、ぶっちゃけありまくりである。

「ごらごら、女の子が舌打ちなどするものではないぞ」

声をかけられて振り向くと、何やら神々しそうなオーラを纏ったこれまた真っ白なにーさまが浮いていた。

確認するまでもない。

どうやら心当たりは正解だったようだ。

私はにーさんに数歩歩み寄ると、某ノートのセリフで迎え出た。

「あなたが神か」

にーさんは、私の言葉に満足そうに微笑む。

「いかにも。私はまさしく神と呼ばれる存在だ」

神々しげなオーラを二割り増しにするにーさんは、まさに名乗った通り神そのもの。

普通の人なら、その姿に圧倒されるか、もしかしたら跪くかもしれない。

しかし、私の返答はいたって淡白だった。

「さっさと用件を言って。それから、どれぐらいで帰って来れるのかも」

私のような存在のことを、一般的にトリッパーと呼ぶのだろう。

どうやら私はトリップ体質らしく、幼少期より異世界に飛ばされた数はゆうに二桁を越える。

行き先はお約束の中世ヨーロッパ風だったり、戦国時代な感じだったり、SFチックだったりと様々だ。

動物オンリーの世界や、宇宙人みたいな住民の世界に飛ばされた時は、流石に途方に暮れかけたが。

飛ばされる理由も様々だ。

勇者として召喚されたり、次期魔王として召喚されたり。

他にも、巫女だとか生贄だとか精霊様だとか王族や魔王の嫁候補だとか女神様だとか、粗方の召喚理由は出尽くした。

召喚の他にも、事故だとか何かしらの儀式の余波や副作用だとか、故意ではなく飛ばされたりもしている。

飛ばされてから帰って来るまでの期間はまちまち。

しかも飛ばされた先と元の世界の時間の流れが同じとは限らない。向こうで数年もの時間過ごして帰ってきてみれば、一週間も経っていないかったり、逆もまた然^{しか}り。

お陰で学校にもまともに通えない。

両親は私の体質を理解してくれているが、世間はそうもいかないわけ。

中学三年生の時、異世界トリップによる不登校によって卒業できなくなる可能性や、両親への負担も考え、私は自分で定時制の高校に通うことを選んだ。

一日の授業数少ないし、高卒認定試験で単位補えるし。

さて、異世界トリップと言えば、一般人にはある種の憧れの対象かもしれない。

しかし、今まで述べたことから察してくれてるかもしれないが、決して望んだ通りのものばかりではない。

よく考えてみる、そこが平和な世界だったらいい。

だが、そうではなかったら？

一歩外に出れば獣に食い殺されるような世界だったら？
腐りきった政治家が支配しているような世界だったら？

異世界人を生贄として召喚する世界だったら？

黒髪黒目が邪悪なものだとされている世界だったら？

（神聖視されていたらされていたで、面倒なことこの上ない）

そんなところに無力な一般人が放り出されてみる。

死の一途を辿るしかない。

とにかく、私は様々な世界に飛ばされた。

それはもう、うんざりする程に。

今言った通り、いいことばかりではない。

勇者として召喚され、散々利用されたあげく、殺されかけた。

魔王として召喚され、人間に理不尽な敵意を向けられた。

側室として召喚され、人権を完全に無視した扱いを受けた。

生贄として召喚され、殺されかけた。

巫女として召喚され、記憶を消されかけた。

見知らぬ場所に放り出され、魔物に殺されかけた。

同上、野垂れ死にかけた。

これだけではまだ上げきれない。

もちろん、確かにいいこともあったのだ。

現地の住民達によくしてもらったことは、今でも忘れない。

親切にしてくれた人も、友達も、仲間も、たくさんできた。

だがそういった人達とは、必ず別れなければならなかった。

私にとって、異世界トリップはデメリットの方が圧倒的に多かったのだ。

メリットと言えば、一度トリップ先で手に入れた能力が、元の世界に戻っても失われなかったこと。

お陰で二度目以降のトリップは、段々と心強いものになっていった。

そして、トリップ先で得た人生的経験値。

しかしこれは経験値を得た先が先なため、こちらの世界で得るものとは大分かけ離れていたりする。

例えば、道德観念なんかはこちらの世界では異質に映るかもしれない。

害のある者なら殺すことも躊躇わないし。

しかも、トリップ先での凄惨な体験や、己の命のため少ない経験値で無理矢理レベルアップせざるを得なかった実情、そして利用され

ないよう繰り返し必死に行^{おこな}った演技による擬似多重人格状態。

これらの経験のお陰で、私の性格は性格破綻者寸前レベルまで歪みに歪みまくった。

両親や友達は何も言わないでいてくれるけど、他の人の目には私は異質に映るだろう。

さて、長々と説明してしまったが本題に戻ろう。

問題は目の前ににーさんである。

にーさんは私の態度に少しだけ眉を寄せた。

「随分つつけんどんな態度をするものだ」

「当たり前でしょ。こちらとしては異世界トリップなんて御免被^{しょうむ}りたい代物なの。さっさと行って帰ってくるに限るわ。無駄話はいから、要件を言いなさい」

そう言って三白眼をにーさんに向ける。

おそらく第一印象は最悪だろう。

にーさんは溜息をついた。

「数多の世界を救った英雄だと聞いたのだが……いや、数多くの世

界を渡り歩いたからこそこうなってしまったのか……。ならば早々に用件を言ってしまうおう。どうか、私の世界を救ってほしい」

「はいはい、テンプレ乙」

私は不機嫌な様子を隠さず、あくまで突き放した態度を取る。

トリップ初期の頃は、神やら王族やらに世界を救ってくれとか言われれば、内心わくわくしながらも使命感に燃えたものだった。だが今はそんなわくわく感も使命感もない。

いかにも使命感に燃えているように演技して、ご機嫌を取るつもりもない。

「……真面目に話をしているのだが？」

「さっきも言ったでしょ。私はこんなことうんざりする程やってるの。それに私は英雄なんかじゃないわ。本当に英雄なら、喜んで引き請けてるでしょうよ。さっさと説明して、さっさと家^{うち}に帰して」

そう言って、ジロリとにーさんを睨む。

「神に頭下げられたって、態度を改めるつもりはないわよ」

しばらくにーさんの睨みあいが続く。

先に口を開いたのは、にーさんの方だった。

「……そなたは随分と元の世界に執着があるようだが、残念ながら、そなたは元の世界に帰ることはできない」

「……………はあ？」

帰れない。

その言葉に、私はにーさんを射殺す勢いで睨みつけた。

「理由を訊くわ」

「こちらの世界に来てもらうには、生身のままでは駄目なのだ。故に、そなたには魂のみの状態になってもらった」

「つまり？」

「申し訳ないが、そなたは元の世界では死んだことになっている」

重たい沈黙が降りた。

申し訳ないとか言いながら、にーさんの表情には申し訳なさは欠片もない。

まあ、こんだけ態度悪く振舞っていれば、謝罪をする気もなくなるのかもしれないが。

私はここで初めて笑みを浮かべ、右手の親指を立てて首の前で左から右へと横切らせた。

そして右肩あたりに来た右手を、くいつと後ろに引く。

この後に言う言葉は決まっていた。

「表出ろや!!この駄目神が!!」

第一話 遠足はたまにしかないから楽しいもんだ（後書き）

最初は少しシリアスです。

頑張ってコメディにしますので、そつと部屋の片隅で見守っていてください。

2／20 移動した世界の桁数を変更させていただきました。

第二話 己の欲せざる事人に施す奴は十倍にしてのしてやる

突然雰囲気豹変した私に、にーさんは目に見えて気圧されていた。

「なっ……か、神に向かってなんたる口を利くのだ!」

おうおう、虚勢を張るのは構わんが、やるならもちっと上手くやんな。

一応神だつてのに、三流の小悪党にしか見えんぞ。

「ああ? 神だからなんだ。てめえは私に崇められるようなことをしたのか? うん? してねえだろ? やったことと言えば、私を殺したことぐらいじゃねえか。なあ?」

度重なる異世界トリップで培った魔力やらオーラやらを最大放出しながら、にーさんに歩み寄る。

ぶっちゃけ、実力なら低級の神くらいなら殺^やれるらしいんだよね、私。

現れた時に感じたオーラや態度でわかる。こいつ、低級だ。

……しかし、私を殺しただと?

私は幾度となく異世界トリップを経験してきたが、死亡トリップは今まで一度もない（当たり前か）。

丁度いいトリップ人材の私を使い続けるために、殺しはしないでおくだろうと思っていたけど、読みが外れたか……いや、相手は低級神。独断の可能性もある。

長年異世界トリップなんて物騒な目に遭ってきたものの、まさかこんな理由で死ぬ破目になるとは。

こいつ、どう料理してくれよう。

「なあ神さんよ、あんたらにとって私ら人間は都合のいい捨て駒でしかないのか？使いたい時に適当に奪^とってきて、使って終わったら放置。そいつの人生台無しにしようが知ったこっちゃねえ。何故なら一人の人間が人生捻じ曲げられたところで、知ったこっちゃないから。違うか？」

「そ、そのようなことは断じてない！人間は、大切な世界の一部だ！」

「へえ。じゃあ私はあんたの世界の人間じゃないからどうでもいいのか。そうかそうか」

「そっそれは……」

「そっちは頼み事してる立場なんだろう？だったら礼儀ってもんがあ

るだろうが。神だろうが悪魔だろうが、地べたに頭擦り付けてお願いしろよ。『どうか私の世界を救ってください』ってな！ところがどうだお前は。あまつさえ、頼み事してる相手を殺すとか。うん。そーかそーか、それが神サマの礼儀ってやつなんだねー」

「貴様！侮辱するのか！！」

「侮辱してんのはそっちでしょ？人の命と人生軽んじて。弄んで。私は礼儀に対して礼儀で返す主義なんだ。だから……あんたには、あんたの礼儀で返さなきゃな？」

ざっ、と、にーさんに向けて一步踏み出す。

「ひっ……！！」

悲鳴を上げてにーさんが後ずさる。

神としてのプライドとか貫禄とかどこへ捨てて来たのよ、にーさん。

まあ、仕方あるまい。今の私の力、低級神より遥かに上回るッ！！

私はゆっくりとにーさんに歩み寄る。

「……いただきます（ニヤリ）」

「ぎゃあああああああああああ！！！！」

「…………うう…………ひつく……………ごめんなさい……………私じゃ力不足だったんです…………グスツ……………」

数分後、私の足下では哀れボロボロになり、幼子のごとく泣きじゃくっているにーさんがいた。

先程の神っぽさはどこへやら。

しかし、私はまだこいつを許さない。

「力不足？　だったらなおさらやるべきことがあるってもんだろーが。……あーもーなんか萎えたわ。意地でも救世主なんかやったらない」

「そ、そんな！　どうかお願いします！」

そう言って私の足に縋り付いてくるにーさん。

もうここまできると滑稽で笑えてくるわ。

だが……まだだ、まだ笑うな。

「やなもんはやだ。つーかさあ、この依頼蹴ったところで私が死んだことには変わらないんだよね？　そのへんはどーやって落とし前つけてくれんのさ？」

「うう……それは……」

「まー無理だよな。私に負けるような低級神が、どう落とし前つけられるんだっつーの」

「本当にごめんなさい！　何でもしますから！　！」

この言葉を待っていた！

だが私はあえてにーさんを睨みつける。

「はぁ？ あんたに何ができんの？」

「本当に何でもします！ できる限り！ いや、できないことでも必ず
！」

「へえ……それじゃあ」

言質は取った。もうこの男は逃れられない。

私はビシッ！ とにーさんを指差し、叫んだ。

「私を最強の脇役にしろ！！」

そう叫んだ時の私は、
今までとは打って変わって、
最高にいい笑顔
だったという。

第二話 己の欲せざる事人に施す奴は十倍にしてのしてやる（後書き）

ようやくシリアスパート終わりです。

シリアスというか主人公が非道です。申し訳ありません。

次回からコメディパートとなります。

元ネタの説明

・まだだ、まだ笑うな
某ノートより。主人公のセリフ。
のほす。

第三話 怪物と戦う者は自分が怪物となってしまうように注意しなければならない

「……………え？」

私の指の先で、にーさんはポカーンとしていた。

だがそんなことはお構いなしだ。

今こそ私のトリップ生活脱却の時！

「いーい？一回しか言わないわけでもないけど、よく聞きなさい」

にーさんがぎこちなく頷くのを確認すると、私はにーさんに向けていた人差し指をピンと上に向ける。

「まず、救世主とやらは別の人に頼みなさい。殺しちゃ駄目よ。ちゃんと、家に帰れる状態で喚^よんで、頭下げてお願いするの」

「し、しかし…………生身の人間に来てもらうのは…………」

「そんなの、死なない程度の事故にでも遭わせて昏睡状態にして、幽体離脱させて連れてくればいいじゃない」

「な、なるほど…………！」

なるほどってあんた…………。

もしかしてこいつ馬鹿なのか？

そして私はこいつが馬鹿なせいで死ぬ破目になったのか？

馬鹿なの？死ぬの？（私が）

「……殺さずに連れて来れるんじゃないかよ」

「……………ごめんなさい」

思いっきり睨みつけると、にーさんは可哀相なほどしゅんとした。それにしても、落ち着いて見てみるとにーさんは中々イケメンだった。

イケメンがボロボロの姿で涙目になっている姿は、中々背徳心を刺激されてゾクゾクしたが、これ以上は流石にアブノーマルなため眼福とだけ言っておこう。

ああそうとも、私はドSさ！

こんな生活、ドSかドMでもなきゃやってらんないよ！

「まーいいや！よくないけど！それじゃ次ね」

私は立てている指を二本に増やす。

「今までトリップした時、その神様から事前に主人公補正とゆうか、能力をもらったりすることもあるんだよね。それを要求する」

ちなみに、私は現段階で主人公補正により、言語自動翻訳機能と勇

者レベル以上の身体能力と魔王レベル以上の魔力を所持している。

一般的な主人公なら、これだけの力を持っていれば充分過ぎる程充分なのだが、生憎数多の世界を駆け巡った私は、これでは満足しない。

私にーさんに要求したのは、以下のことだった。

- ・トリップ体質をなんとかして。
- ・知識内にある能力全て（主に二次元）を使用できるようにして。
- ・たまに伝説の賢者のなのに正体見抜かれるんだけど、見抜かれないようにして。むしろ逆に見抜けるようにして。
- ・年齢、性別、髪や目の色など、肉体を好きにいじれるようにしてくれ。
- ・不死とは言わんが、超回復能力をくれ。それこそ不死レベルの。
- ・やることやったら旅に出たいから、異世界を渡る力くれ。
- ・今日のあたりめ。

「こ、こんなにですか？」

目に見えてうろたえるにーさんに、私はにっこりと笑いかけた。

「ほほう。おぬし、できぬと申すか？」（野太い声で）

「その口調は一体……………やらせていただきます」

私の笑顔のプレッシャーに負けたのか、ツツコミかけたにーさんはしおらしく頷いた。

「ですが……もしよろしければ、何故このような能力を？」

本当に随分としおらしくなったね、にーさん。

最初は「あ、神だあ」って感じだったのに、今やすっかりただの可哀相なお兄さんだよ。

「神だあ」もどうかとは思うけどさ。

「……ま、いいけど。まず最初の要求は特に言う必要ないよね？もうこれ以上振り回されたくないもの。二つ目の能力だけど、私これだけ異世界飛び回って魔法とか使ってるのに、未だに二次元の魔法とか使えないんだよね」

そうなのだ。

異世界トリップでしかもチートレベルの能力を所持しているが、漫画やゲームの特殊能力を使えるようになることは、飽きるほどトリップをしまくった私にとっても、未だ憧れの境地でしかないのだ。

私もオタクの端くれである。

いつか二次元の能力を使えるようになることが、トリップ生活でのささやかな目標だったりする。

だって使いたいじゃん！カ●ハメ派とかザ・ワー●ドとか！！

「で、三つ目だけど、あれ本当にウザイんだよね。これだけトリップしてる身ともなればなおさら。なんかたまに人間性について説いてきたりもするんだけど、私の何がわかるんだっつーの。だから逆に見抜けるようになりたい」

「はあ……そういうものなのですか？」

「そうだよ。それから四つ目。さっきも言った通り、私は脇役でありたいの。もう主役はまっぴら。そうゆうのは似合う人がやればいいと思う。だから、目立たない格好とかに変装したいの。いくつもID持って、裏での暗躍とかやってみたいしね」

あと、にーさんには言わないが、年齢まで好きにできるということは、ある意味不老になったも同じこと。

でもただの不老じゃ面白くないから、変装(?)能力をプラス。

「五つ目。そう簡単に死にたくないし、死ぬ気もない。痛いのも嫌でも不死ってわけじゃない。あくまで不死レベル」

「そうですか……では、六項目目の『やることやったら』とはどういう意味ですか？」

「ああ、あのね？最初はにーさんの世界とやらに行ってあげる。救世主補佐？みたいな形でね」

私の言葉に、にーさんは今までのしゅんとした様子から一転。一気にテンションを上げ、キラキラした目で私を見つめてきた。

「で、では！新たに召喚される者と共に世界を救ってくださるのですね！」

「ちげーよヴォケ、誰がためーの世界なんぞ救うかヴォケ。勘違いすんなヴォケ。重ねてもいっちょヴォケ」

持ち直したにーさんを即効でこき下ろす。

再びにーさんはしゅんとなった。

「あのね、これでも私の代わりに召喚される破目になった人には悪いと思ってるし、かと言って私は何が何でも救世主^{主役}にはなりたくないの。だからその人が無事元の世界に帰れるように暗躍したりするつもり。別にあんたのためじゃないから。いや、ツンデレとかそうゆうのではなく」

「ツンデレとは何かわかりませんが……私の世界を救う助けとなってくださるのでしたら、有難いことです」

「素直でよろしい。で、その世界でやること終わったら、いろんな世界で最強の脇役になる旅に出るから、異世界を渡る力が欲しい」

「は、はあ……では、最後の『今日のあたりめ』というのは？」

「ああそれ？ノリ」

「海苔？」

「ちゃう。その場のノリ。丁度六項目だったもんで」

「はあ……？」

ちえっ。通じないか。使えん奴め。

まあ、テレビなんてないところだし、当たり前なんだけどね。

「さて、私の言いたいことはこれくらいかな。さっきも言った通り、新しく召喚されて来る人には、ちゃんといいいように取り計らってあげるんだよ？ちゃんと頭下げてお願いすること！」

「は、はい！」

うむ、これならおそらく大丈夫だろう。

私が満足気に頷いていると、にーさんが口を開いた。

「あの……あなたが要求した能力なんですが、私では力不足なので、他の神のところへ行ってもらって、そこで能力をつけてもらうことになります」

「ああいいよ、最初からそうだろうと思ってたから」

元より私なんぞにボコられるようににーさんに、これだけの力を与えることができるとは、はなっから思っていない。

にーさんはバツが悪そうに咳払いすると、私に向けて手をかざした。

「では、今からその神の元へ行ってもらいます」

それ以上何か言うよりも早く、私の視界は黒く染まった。

そしてそれが晴れた時、私は全く別の場所に立っていた。

「誰だお前は！」

声のした方向へ振り向くと、そこには一つの人影がいた。

私は、フツ、と不敵な笑みを浮かべると、素早く片手を地面に付く姿勢を取り、叫んだ。

「私は地獄からの使者！スパイ●ーマツ！！」

でっでーん

第三話 怪物と戦う者は自分が怪物となってしまうかもしれないよう注意しなければい

ああ……三話でまとめきれなかった……。

プロローグが長いことに定評がある作者です。

コメディパートとか言っておきながらコメディ薄くてすみません。
説明で手一杯だった……。

主人公の性格というか、口調がコロコロ変わるのにはちゃんと理由があります。

元ネタの紹介。

・カ●ハメ派

説明は不要かもしれないですね。

某有名漫画の技です。

・ザ・ワード

こちらも説明は不要かもしれません。

某有名漫画の時を止める技。

・今日のあたりめ

いい●ものあとにやってる番組のサイコロの目の一つ。

・スパイ●ーマッ

東映がマーベルとの契約で日本で作成した特撮番組。

(ニ●ニコ大百科より参照)

第四話 類は友を呼ぶけど、必ずしも類は友になれるとは限らないんだぞ

「大河内瑠璃^{おおこうち るり}。年齢、十七歳。性別、女。定時制高校生。死因、自転車でトラックに撥ねられ死亡。俗に言うトリップパーと呼ばれる存在。所持能力と要望能力は下記参照……」

私の目の前では、真っ黒い人影がなんか長ったらしい紙を読み上げていた。

ちなみに今私がいるところは、天井やら壁やら床やらで端が見えないくらい長い紙が滑走したり浮いていたりするところである。

そして目の前には人影。

いや、なんてゆうかこれが本当に人影としか言いようがないんだよね。

人型ではあるけど、人には見えない。

強いて言うなら、朝鮮海苔が人の形にふよふよ浮いてるみたいな感じ？

多分、とゆうかこの人影も神なんだろう。

でなきゃ、あのにーさんが私をここへ送る理由がない。

人影は私に関する情報を読み終えたのか、どこからともなく携帯電話

話を出現させた。

……何故に神が携帯電話？

「もしもし……ああ、やっぱり今回も駄目だったよ。あいつは人の話を聞かないからな」

えええええ何某ビニ傘天使みたいなこと言ってんのこの人（影）！？

てゆうかそれがやりたいがためだけに携帯出したろ！？

GJ!!

「……一体何やらかしたって？ほら、二桁レベルで世界渡りしてるトリッパ―の娘^こがいたじゃない。その娘を自分のところに喚^よび出すために、殺しちゃったらしくてね。………フッヘヘWWまあ、かなりお灸をすえられたようだよ」

その笑い声やメロ気持ち悪い（へpへ）

あと草生やすな。

そうこうしているうちに人影は話終えたのか、携帯電話を消滅させて私に向き直った。

「さて、瑠璃ちゃんとやら。事情は把握した。あのアホが悪いことをしたね。私は君が要求した能力をちゃんと全部あげられるから、安心して。君のことは全面的に協力するよ」

そう言って、人影はにっこりと笑った。

顔のパーツはないのだが、何故だか表情はわかった。

「ん。ありがとう」

素直にお礼を言う。

なんだかこの人影は先程のにーさんと違って非常に印象がいい。

さっきの電話といい、出会い頭の第一声といい、同類臭を感じる。

神なのに。

「いいってことよ。君はもう充分過ぎる程の数の世界を救ったからね。もういい加減自分の好きなことをやってもいい頃だ。誰も怒らないし、誰も咎めないよ」

こ……これが格の違いというやつか!?

やべえ、こんな有難いこと言われたの生まれて初めてだ。

今までとにかくき使われてきたからなあ。

なんか目から汗が……

「え、泣いてるの？大丈夫！？」

「ううん、なんでもない。ちょっと今までのことを思い出しただけ」

手の甲でやや乱暴に涙を拭う。

ああ、惚れそうだぜ人影さんよ。

「人影さんはさ……」

でも一々人影さんって言うのは面倒だ。

「ジョンはさ……」

「何故にジョン！？」

「昔氣に入ってたヒトカゲのニックネーム」

人影とポ●モンのヒトカゲをかけてみたんだ。
そこ、安直とか言わない。

「さんをつけろよデコすk（ry）……まあ、私に名前はあってな

きょうなもんだし、それでいいよ」

「うん、ありがとう……あのさ、ジョンはなんでそうゆうオタクネタ知ってるの？」

今だってそうやってしつかりネタで返してくるし、私が言ってることにも聞き返してきたりしない。（ヒトカゲとか）

今まで会ってきた神とは明らかに違う。

「ああ、私の管轄の世界に飛んでもらう時、主人公補正として二次元の能力を持たせる場合があるから、自然と知るよ」

……………ダニイイイ!?

この神は私が望んでいたことを可能にできるというのか!?(言っただじゃん)

私がどうにか使えないかと必死こいて試行錯誤している間に、ジョンの管轄の世界に飛んだ奴らはいとも簡単にその力を手にしていたと言うのか!?

二桁も世界飛ばされて手に入れられなかったのに!?

なんてこったーーーーー!!!!

「……どうしたの？大丈夫？」

私がリアルにorzのポーズになっていると、ジョンが心配そうに声をかけてきた。

「ジョン……あなたとは、別の形で会いたかったわ……」

「何、その好敵手みたいなセリフ」

そんなこんなあって、私は送り出されることとなった。

能力は案外あっさりもらえた。

ジョン曰く、あれだけの能力を一気に持たせたら、常人ならば内包した力に耐えられず、風船のように破裂するらしい。

何それ怖っ。

「ああ、そうだ。送る前に一つ」

「何？」

「実はさっきあげた能力の中に、三つ程私からのプレゼントを混ぜておいた」

端から見れば最後の能力は何がいいのかわからないだろうが、何を隠そう、私は中二っぽいものが大好きなのである。

別に私が中二病というわけではない。

中二的なものをかっこいいと思うわけでもない。

だが、私は『中二』には『中二』の良さがあると思っている。

私の中では、『中二』というのは名称ではなく一つのジャンルなのだ。

「喜んでもらえたようで何より。あ、二つ目のプレゼントだけど、一応最初の世界だけはその姿のままってことになってるから。もちろん、自分の意思で変えられるけどね」

私はジョンの両手を掴むと、ブンブンと激しく上下に振った。

「ありがとうジョン！！私ジョンのこと忘れない！三秒くらい！」

「ちょ、短えWWWまあいいや、そろそろ行くかい？」

「うん！！！」

「おっけー。そんじゃこのまま行ってらっしゃい」

こうして、私は最初の世界に旅立った。

第四話 類は友を呼ぶけど、必ずしも類は友になれるとは限らないんだぞ（後妻

ようやくプロローグが終了。

そして人影神皆勤賞。

話ごとに主人公の口調というか性格が変わっていますが、一番彼女の素に近いのは、今回の地の文だと思います。

元ネタの紹介

※作中で説明（？）があるものは省きます。

・草

W↑このこと。（笑）と同じ意味。

・さんをつけろよデコ助野郎

「AKIRA」という作品のセリフだとか指摘いただきました。
M郎さん、ありがとうございました。

・ダニィ!?

ベ●ータが「何い!？」と言ってるのがこう聞こえる。

第五話 笑う門には変質者を見るような目で見られたんだけど、どうしてくれる

2／20のユニーク数が351だと……!?!?

こんな素人の文章を読んでくださった皆様、ありがとうございます
た!

これから日々精進して行きたいと思います。

第五話 笑う門には変質者を見るような目で見られたんだけど、どうしてくれる

目の前が白く塗りつぶされた。

そして、短い浮遊感。

「うわっ!？」

「おっと」

ちょっとした高さから落とされたのか、気が付けば冷たい床に尻餅をついていた。

おー、着いたのかな？

辺りを見回してみると、どうやら結構広い部屋のようにだった。

この部屋にいる人間の結構な人数、この部屋の内装、そして尻に敷いている巨大な魔方陣からして、おそらく召喚の間といったところだろう。

そして、部屋の内装や周りでざわめいている人達の服装からして、舞台は異世界トリップにお約束な中世風の世界と見た。

私はその場に立ち上がる。

本来ならば、不愉快以外の何者でもないこの瞬間は、今はとても私の心を弾ませた。

そして、私はゆっくりと視線をすぐ横に移す。

私のすぐ横では、同い年くらいの少年が床に座ったまま呆然としている。

あ、目が合った。

おそらく、彼がにーさんが新しく喚よんだ救世主なのだろう。

そう、彼が救世主。

彼が、主役。

「……………フツ」

思わず、笑みが零れる。

彼が主役なら、私は？

「フ……フフフ……」

私は救世主じゃない。

私は主役じゃない！

「フフ、フ、ハハハ、ハハハハハハ」

やべえー、笑いが止まんねえ。

多分今の私、人生で一番輝いてる。
それはもう死兆星のごとく輝いてるね！

「ハハハ、ハハハハハハ、ハハハハハ、ハハハハハハハハハハ」

高い天井に、私の笑い声が反響する。

いきなり笑い出した私に周りの人達がぎょっと目を向けるが、知ったこっちゃねえ。

アイアムノット主役！！脱トリッパー人生！！ストリッパー人生じゃねえぞ！！

私は、今までで一番最高の気分で、空を抱くように宙に両手を広げた。

「自由だあ――！！！！！！」

私は脇役だ！！！！

「……で、では、あなた方が救世主様なのですね？」

おそらく召喚の中心人物と思われる女の子が、ビクつきながらそう
言ってきた。

まあ、怯えるのも無理はない。

あのと、私は周りの目など欠片も気にせず笑い続けた。

さらに言うと、それに驚いた騎士らしき人達に一斉に得物を向けられたが、それでも私は狂ったように笑い続けた。

いつになくテンションが上がった私は、痺れを切らした騎士の一人に肩を掴まれるも、笑ったままなんなく受け流して床に放り出した。それに驚いた他の騎士さん方が次々と掴みかかってきたけど、私はそれをちぎっては投げちぎっては投げ。

腕一本でブン投げてみたり、フェイントかけてみたり、音速の壁が発生する速度で反復横飛びしてみたりした。

特に急所を狙うでもなくノックダウンさせるでもなく、ひらすら受け流したり投げたりしていると、とうとう一人の騎士に剣を向けられた。

しかし私はそれに怯みもせず、軟体動物のような身のこなし（端から見るときっとキモイ）で斬撃を全て避けまくり、その騎士さんの剣をチョップで粉碎し、最終的にアッパーで沈めた。

この間、ずっと私はずっと笑い続けていたんだから、呆れた話である。

（「ハハハハ」だけじゃなく「うっひゃっひゃっひゃ」とか「だっはっはっはっは」とか言った覚えがある）

どう見てもキ●ガイです。本当にありがとうございました。

しかし、私の今までのトリップライフを知る者であれば、この時の私をどう責められようか。

とにかく、今まで望んでも得られなかった状況に、私はありえない程テンションが上がっていたのである。

そしてようやく私が落ち着いた頃、周りは静まり返っていた。

私が沈めた人以外の騎士達や、その他召喚に携わったであろう人達は、ギリギリまで壁際に寄り、化け物でも見るような目付きで私を見ていた。

さすがに破目を外し過ぎたと思い、一応敵意や害意などがないことを伝えたが、向こうさんが持ち直すのに少々時間がかかった。

そりゃ救世主を召喚したはずが、こんな突然タミフルじみた笑い声を上げながらこれだけの人数相手に無双するような奴が出てきたら、気味が悪い以外の何者でもない。

そこで、この世界の神さんに世界を救ってくれた的なことを言われた旨を伝えると、ようやくこの娘が喋ったってわけだ。

「いや、ちゃうよ。救世主はこの人だけ」

私はそう言って、少し離れたところで相も変わらずへたり込んでい

る少年を、親指で指し示す。

指された少年がビクツとなったけど、そんなん知らん。

「で……では、あなたは一体……？」

怖々と、女の子が上目遣いに訊いてくる。

怯えることはない。こいつは元から死んでい（ry）

しかし関係ないが、中々可愛いなこの娘。

ま、二桁もの異世界を飛び回って、美人や美形慣れした私は大した感銘は受けないけどね！

……嘘です。イケメンや可愛い娘は今でも好きです。

さて、訊かれたからには答えないとね。

よくぞ訊いてくれました！私の正体は……

「教えてあげないよ☆じゃん☆」

……………再び場が静まり返った。

皆（。D。）。ポカーンって顔してるけど、知ったことか。

異世界トリップで培われた私の強靱な精神には、そんな視線なんて下敷きを倒した時のそよ風程の効果もないのだ！

嘘だけど！めっちゃ視線痛いけど！

「貴様！王女殿下になんたる態度を！」

とか思っていると、比較的女の子の近くにいた騎士さんが私に剣を向けてきた。

いや、私さっき目の前で剣折って見せたよね？
学習能力ないの？

とゆうかその女の子は王女サマか。そーかそーか。

「……………つまさか……………！貴様が邪神か！？」

ハッとなったように騎士さんが叫んだ。

……いや、邪神って何よ。さっき神さんに頼まれて来たって言ったじゃん。

第五話 笑う門には変質者を見るような目で見られたんだけど、どうしてくれる

今回はこれといったオチがなかった……

そしてただへタレな姿を見せつけただけの哀れな救世主君。

※3／19 王女陛下↓王女殿下 に修正。

元ネタの紹介

・怯えることはない。こいつは元から死んでいる
某天空の城の大佐のセリフ

・教えてあげないよ。じゃん
ポ●ンキーというスナック菓子のCM。懐かしい。

第六話 嘔吐きは泥棒の始まり、そして泥棒は嘔吐きの終わり

「……つまり、邪神が復活する予兆があったから、俺達を喚よんだってことですか？」

救世主君の言葉に、王女サマは頷く。

王女サマの説明によると、

← 約千年前、なんか邪神が現れて殺戮の限りを尽くした。

← どうしよう……このままでは人間は滅んでしまう！

←

ところがどっこい！異世界から来た救世主が救けてくれたお！

← 救世主は邪神をなんやかんやで封印した！

← 世界に平和が訪れたひゃっほー！

← なんか千年経った。

← 何い！？邪神が復活しそうだと……！？

← そうだ、救世主喚^よぼう ↑今ここ

ということらしい。

うん、王道っちゃ王道かな。

え？もつとまともな説明しろ？

いいんだよ！こうゆうのはどこも大して変わらないんだから！

（※異世界トリップ物がどこも大して変わらないというのは、全くの事実無根であり、真実に基づかない意見でありますので、良い子の皆は他の小説の作者さんや異世界の皆さんにこんなこと言っちゃ駄目だゾ☆b v作者）

ちなみに、なんであの騎士さんが私を邪神だと思ったのかと言うと……うん、まあ説明不要かな。

あんなけたたましく笑いながら無双されちゃ、とても人間とは思いたくないわな。

私が着いて早々「自由だぁー!!」とか封印されてた系のラスボスみたいなセリフを吐いたのも、多分原因の一つだとは思うけど。

てゆうか救世主召喚しようとして邪神復活とか、笑えないから（笑）

「邪神が封印されている場所に出向いた偵察隊の魔術師が言うには、邪神の復活はほぼ確実だそうです。もしそうなれば、我々には打つ手がありません」

おまwwwそれ丸投げじゃねえかwww

「そうは言われても……俺は今まで平和な世界で暮らしてきましたし、いきなり戦うとか封印とか言われても……」

ですよねー。毎度毎度、異世界の方々は無責任にあれこれ喚び出し過ぎ。マジふざけんなし。

「我々も全力でサポートします。お願いします。どうか、この世界を救ってください!」

サポートしますとか言われても……そちの都合で喚び出したんだからそれぐらい当たり前だろうが。

お礼はしますぐらい言えや。まったく、なつとらんなあ。

「……わかりました。俺にはどこまでできるかはわからないけど、

「この世界の危機なんですよね？ できる限りのことは協力します」

そんな安請け合いするなよ。

しかし典型的な勇者タイプか……主役としてはいい目眩ましになり
そうだけど、弱そうだなあ、主に精神が。

いちいち心を痛めてうだうだしそうだ。

ちなみに、このやり取りの間、私は一切言葉を発していない。

いつもならいくらでも口をついて出る小言や罵詈雑言は、自分でも
驚く程そのなりを潜めていた。

んっふっふっふ。何を隠そう、今の私は最高に機嫌がいいのだ。

世界までが昨日と全く違って見えてくる。

いや、リアルに昨日と全く違う世界にはいるんだけど。

「……あの……大河内さんは」

目に見えて動揺しながら、救世主君が口を開く。

この救世主君——名前は確か、森本乃明^{のあ}とか言ったか。

……なんか初期時代のDQNネームみたいな名前だな。

今ほもっと酷いのが当たり前にあるから、こうゆうのはまともな名
前に見えちゃうんだよね。

てゆうかもうちよつと堂々としなさいよ。タミフった私が怖かったのはわかるけどさ。

「瑠璃でいいぞ」

「いやでも、初対面だし……」

まあ、相手が異世界の住人なら、ある種の勢いで呼び捨てとかできるかもしれないが、確かにこの年頃の男の子にはいきなり初対面の異性を呼び捨てとか、少々ハードルが高めかもしれない。

「確かに元の世界じゃ異性で初対面で呼び捨てとか有り得ないけど、私をまともな人間と思うなかれ。てゆうかむしろ異世界人の括りくくでいいと思うよ」

我ながら酷いセリフだとは思う。

流石に自分で言うことはないだろうと。

「自分で言うこともないと思うけど……」

向こうもそう思ったらしい。

「じゃあ私も君のことノアって呼ぶから。それでいいべー」

「……まあ……それなら」

若干渋々と言った体ていで頷かれた。

ちなみに片仮名表記なのはあれだ、少しでも日本語としての違和感

を減らすためだ。

頷いて言いかけた先を促そうとすると、意外にも王女サマが口を挟んだ。

「あ、あの……！わっ私もお名前でもいいですか？」

意外でもなんでもなかった。ただのフラグ建設だった。

「別にいいですよ？」

あっさりとしたノアの返答に、王女サマはホッとしたような顔をした。

あれかなー。王族だから今まで普通に接してくれる人がいなかったとかって王道パターンかなー。

となると、次にくる言葉を決まってるな。

「じゃあ、私のこともホワイトって呼んでください」

はい来ましたー、王道である『異世界の権力者呼び捨ての儀』（私命名）。

ちなみに、王女サマの名前はホワイト・ほにやら・むにやむにや・なんちゃら（多分国名）、とかなんとか言いました。

なんかもう、ファーストネームしか覚えてない。

だって王族とかの名前って、長くてめんどいんだもん。

てゆうかホワイトって……名前としてどーなのよ。

「王女殿下！いくら救世主と言えど、それは……」

脇で私に警戒心をビンビンに向けていた騎士さんが講義の声を上げるが、残念ながらこの場合、君の意見は通らないと相場は決まっているのさ！

「構いません。この方には世界を救っていただくのです」

「しかし……このような怪しい輩もいるのですよ!？」

騎士さんや、あんた人を指差したらあかんとぼっちゃに教わらなかつたのかね？

まあ、護衛ってのは警戒するのが仕事みたいなもんだからねー。

むしろこんな怪しんでくれと言わんばかりの奴に、あっさり心開かれちゃ困るわ。

いや、私は困らないけど。困るの王女サマだけど。

「いや、今『この方には』ゆうたし、私含まれてないのかと思ったんだけど」

私が言うと、王女サマがハッとしたように私を見てきた。

ああ、なんてゆうか、あれだ。この目は強いて言うのであれば……

A 「私A！よろしくー」

B 「私はBだよ」

C 「私はC。よろしく」

A 「ねえねえ、BさんのことBって呼び捨てにしている？」

B 「いいよ！じゃあ私もAって呼び捨てにいい？」

A 「もちろん！」

B 「うふふふ」

A 「うふふふ」

C 「じゃあさ、私も二人のこと呼び捨てにしている？」

A B 「だが断る」

C 「なんで！？」

……とゆう空気を作りたくないんだろう。

とは言え、向こうさんはまだ私に警戒心バリバリなわけで。

「別に私はどっちでもいいよ。そもそも私の初対面シーンが挙動不審過ぎたのがいけなかったわけだし、しかも私救世主じゃないし」

じゃあなんであんだここにいるんだよって話になるな。

あ、救世主の補佐やるんだった。

「あの、大こ……瑠璃はさ、救世主じゃないなら、なんでここにいるんだ？」

そーね、それを言わにゃあならなかったね。

てゆうか、さっき君はそれを言いかけたのね。
名前だなんだで有耶無耶になっちゃったけど。

「ああ、それね。説明しないとね」

……とは言ったものの、正直どこまで話そうか。

能力がチートだとか異世界を二桁渡ったとかまで話すつもりはない。

だが、ノアには救世主を押し付けてしまったという負い目もある。
あくまで彼は被害者なのだ。

ともすれば、全く事情を話さないというのも、アンフェアという話だ。

まあ、上手いこと話ながら考えるか。

「あれは今から……三十六万……いや、一万四千年前だったか……」

「「嘘だっ！！！」」

おお、三人そろってひ●らしネタとは……
息ピッタリ過ぎて若干ビビったじゃないか。

「ごめん、嘘」

「貴様！舐めているのか！」

「そんな鎧とか舐めたら腹壊すだろJK」

「そうゆう意味ではない！！」

つかかってきた騎士さんを適当にあしらう。

やれやれ、冗談のわからん奴だ。

「冗談よ。ちゃんと話すって」

さて、どこまで話そうか。

「あれは確か、私が自転車に乗って最寄の本屋に向かった時だったね」

第六話 嘔吐きは泥棒の始まり、そして泥棒は嘔吐きの終わり（後書き）

元ネタの紹介

※作中で説明（？）があるものは省きます。

・だが断る

某有名漫画のセリフ。

岸辺露伴のセリフだとか指摘いただきました。

田舎モンさん、どうもありがとうございます。

・あれは今から三十六万……いや、一万四千年前だったか
またもや某ビニ傘天使のセリフ。

第七話 夢は現実の投影であり、現実は夢の投影と見せかけてそいつはフエイン

え!?(;。D) 2/22のユニークが434!?

これは夢か!? 幻想か!? そげb皆様ありがとうございました!!

第七話 夢は現実の投影であり、現実が夢の投影と見せかけてそいつはフェイン

「あれは私が、自転車に乗って最寄の本屋に向かった時だった。どうやらぼんやりしていたらしい私は、哀れ迫り来るトラックに気が付かなかったのだ。私は思ったね、これがうさぎ跳びによる運命なんだと。伊勢海老とヤマビコの祭典なんだと。テトリスと特撮が織り成すランバダはまさにガスだね。薄れ行く意識の中で私がみたのは、崩れ落ちる付け睫毛まつげだったのだ。そんな流しそうめんに流されるホーニツヒに、ドリアンの種はなんて言ったと思う？ そう、『夕焼けは本来パンタグラフであるべきだ』！ちよっと考えればわかりそうなものだが、私は驚いたね。驚きすぎて目玉がタピオカと化したぐらいだ。だが、突然現れたゴンザレスは私から横隔膜を根こそぎ奪っていったんだ。三本目の足と腋の下の耳は奪とられずに済んだんだが、私はショックだった。私は泣いたね。私の涙はこたつ布団の上に落ち、やがて携帯電話の爪先まで届いた。涙の海に漂う詐欺師は、ホットケーキの汁を頼りにモバゲーをしていた。その姿はまさしく正露丸の顔したインデベン●ンスデイの申し子。その時私は気付いたんだ。真理とは、私がシャンプーをすることで明かされていたのだと。私の全身の産毛は、常に歌い続けていたのだと。そしてホーニツヒは七色の空で輪投げをするかのごとく——」

「「「「「もうやめて（くれ）え――――！！」
「「「「「」

その場にいる全員の絶叫に、私は演説をやめた。

辺りを見回してみると、部屋にいる人間全員が耳を塞いでいたり、
激しくヘッドバンをしていたり、泣き叫んで何かに許しを請うていた
りした。

……どうゆう事態さね、これは。

「いやああああ背中がぞわぞわする！何これええええ！」

「あああああ幻覚だ、これは全部幻なんだあああああ! !」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい」

ちなみに、上から順に王女サマ、騎士さん、ノアのセリフである。

つかノア、L5発症してるぞ。

むう……少々（この世界の）人類には早過ぎる動画だったか。

どうやって収集しよう。

「そもそもホーニツヒとは洗礼名だったんだ。米粒の洗礼は非常に
思い出深く――」

とりあえず続きを話してみた。

すると周りの人達はさらに激しく悶絶し、口々に悲鳴を上げた。

「ぎゃああああああああああああああああ！！！」

「ゴムの伸びきったパンティーはTENGA裂けようとも尖ること天が

部屋にいた全員がずっとけた。

うわー、こんなド●フみたいな光景をリアルに目にする日が来るとは。

「まあ冗談はこれくらいにして。私はあれだ、救世主補佐ってやつだ」

「最初からそう言え!!」

なんか思いつきり騎士さんに怒鳴られた。

「うん、疲れたからもうやんない」

いくら周りを欺くために、一瞬で虚言をでっちあげる術^{すべ}を見に付けたとはいえ、ここまでの長文は正直めんどい。

「貴様……いつか目に物見せてくれる……」

騎士さんが自分の歯を噛み砕かんばかりに歯ぎしりして睨み付けてきた。

おいおいそんなに力むなよ。歯あ折れるぞ。

八十まで二十本自分の歯でいたいだろーが。

「まあ、あれだ、ホーニツヒはどうでもいいんだよ。さっさと話進めたいんだ、一々いらん話すんな」

「「「「「お前が言うな！！！！！」」」」」

なんか一斉に突っ込まれたんだが、私は間違ったことと言ってないはずだぞ？

あれか、これが今時のキレやすい若者か！恐ろしいな！

「続けるぞー。ノアよ、君はここに来る前になんか真っ白い空間で真っ白い自称神のにーさんに会ったはずだが」

「えっ？ああ、うん……なんか妙にボロボロの男の人に会ったけど……」

ちよ、ボロボロのまま対応したのかよにーさん！

それぐらい治せよ！神だろ！

「まー私もそのにーさんに会ったんだけど、本当は私が救世主やるはずだったんだよね」

「え？」

ノアが驚きに目を見開く。

周りの人達も皆似たり寄ったりな顔で私を見ていた。

よせよ、照れるじゃないか。

「能力的に言えば、言っちゃあなんだが私はノアより確実に実力は上だよ。だが、まあ……救世主には向いてなかったわけよ」

「「「「「ああ……」」」」」

皆さん納得されたように呟かれやがりました。

わかってるよ、もう！

そりゃこんな性格破綻者が救世主とか言われたら、私なら信じないし。

もし本当だったら鼻からナポリタン食べるわ、私。

……あ。性格破綻者Ⅱ私って式が成り立つなら、私何度か世界救ってるじゃん。

あとで鼻からナポリタン食べなきゃ。

「だけどもあ、用なしってんならさっさと元の世界に返すってのが筋ってもんよね」

本当、なんで殺しやがったあの崇り神が。

触手だらけになってアカシシに乗った青年に「やめろー!」とか言われながら射殺されてしまえ。

ちなみに、救世主は自分から断ったってことは言わないでおく。

少しでも私よりノアに注目して欲しいのだ。私はあくまで脇役でいたい。

……あれ、私目立ち過ぎじゃね?

「でーすーがー。他の世界の住民を生身で連れてくるのは無理だからとかなんとか言われて、そのにーさん要は元の世界で私は既に死んでいるとか抜かしやりました。つまり、ここにいる私は一回死んだ身っスわ」

Ω Ω Ω 「「「「「な、なんだってー!?!?」「」「」「」

「それで、あんまりだったからそのにーさんボコッて泣きながら謝罪させた」

「「「「「これはひどい」「」「」「」

酷いとは失礼な。相応の制裁を与えてやっただけだろうに。

「というか神をボコツたのか……考えられんな……」

「え、でも俺の時は無事に帰れるって言われたぞ？」

「ああ、適当に昏睡状態にさせて幽体離脱させればいいじゃんって言ったらなんか納得してた。あいつは正真正銘のアホだ」

「そんな方がこの世界の神なのですか……」

王女サマが露骨に渋い顔をする。

にーさんの株大暴落中。ザマァ W W W W W W W

「そんなわけで、私の死は完全に無駄でした。私いない子。家無き子」

「「「「「うわぁ……」」」」」」

今までと打って変わって哀れみの視線が向けられる。

いや、哀れみってゆうか……やめろよ！その『残念な人を見る目』！私は悪くないじゃん！

「まあ、そんなわけで。そのままってわけにもいかないから、救世主補佐って形でこの世界に来ました」

そう締め括ると、私はふうと一息つく。

「……やれやれ、ようやく話せたよ。全く誰だよやこしくしたの

は」

「「「「「お前のせいだろ!!!」」」」」

なんかさっきから総ツッコミばっかされてる気がするなあ……。

皆さんの（多分心からの）突っ込みを右から左へ受け流していると、王女サマが渋い顔のまま咳払いをした。

「……そう言ったことでしたら、わかりました。先程の騎士団によるご無礼を、どうかお許してください」

「いいっていいって。さっきも言ったけど、場所もわきまえずにタミフった私が悪いんだからさ。気にしないでよ」

「寛大なお心、感謝します」

そのあと王女サマは、首を傾げながら小声で「たみふ……?」とか呟いていたが、その動作も中々可愛かった。うむ、眼福である。

「で、なんか呼び方の話してたっけ。結局どうなの? 私に関しては」
なんか話がそれにそれまくった気がするが、どの道さっさと話すべき話だったし、要は私が呼び捨てOKな人間か否かってことだったから、まあいいでしょう。

「ええ、救世主補佐ということでしたら、相応のお持て成しをさせていただきますので。私のことは遠慮なく名前で呼んでください」

「わかった。私も瑠璃でいいよ」

「はい。よろしくお願いします、ルリ」

「こちらこそよろしく。白い人」

「白い人!!?」

第七話 夢は現実の投影であり、現実が夢の投影と見せかけてそいつはフェイク

亀更新ならぬ亀進行。

でもこんな頻繁に更新できるのも今だけなんだろうなあ……。春休みだし。

元ネタの紹介

・まさにガスだね

田村●和が出演しているガス会社のCMのセリフ。

・ごめんなさいごめんなさいごめ (以下略)

・L5

ひ●らしネタ

・人類には早すぎる動画

あまりにも先進的すぎて、現代を生きる人類には理解できない動画である。

(ニ●ニコ動画参照)

・ウボアー

某最後の物語2の皇帝の断末魔。

・アカシシに乗った青年

も●のけ姫の主人公。

・な、なんだってー！

ニ●ニコ大百科で調べてみたけどよくワカンネW

とりあえずM●Rって漫画が元ネタ。

・これひどい

「大冒険〜セント●ルモスの奇跡〜」の冒頭で、破壊された主人公の父親の船を見て村人が発したセリフが全ての始まりっぽいです。

・右から左へ受け流す

某芸人のネタ。

あの人今見ないね。

第八話 長いものに巻かれたもの？私はロールケーキ派かバームクーヘン派か？

かかか感想が書かれている！！？Σ（。Д。；）

感想だよ！？初感想だよ！？初めてのty

おひやさん、田舎モンさん、ありがとうございました！！

とゆうか2／23のユニークが513！？

なんか最高記録更新する度に驚いてる気がする！

実際驚いてる！！

皆様、本当にありがとうございます！

まだまだ未熟な点は多々ありますが、これから「鑑賞者で干渉者」をよろしく願います！

第八話 長いものに巻かれたもの？私はロールケーキ派かバームクーヘン派か？

side out

煌^{きら}びやかな玉座の前には、二人の人間が佇^{たたず}んでいる。

一人は濃い茶髪に茶色の瞳の少年。

服装は紺生地の上着にグレーのズボン、清潔感のある白いワイシャツに、深緑色のネクタイ。なんら変わったところのない、一般的な高校のブレザーである。

表情は目に見えて緊張の色を湛^{たた}えており、身体^{からだ}の両脇にそえられた両手は、指が白くなる程強く握られていた。

もう一人は肩までの黒髪に黒い瞳の少女。

服装はデニムのジャケットに柄物のワンピース、そして茶色のロングブーツ。少年のフォーマルな雰囲気とは違い、随分カジュアルな服装である。

表情には全く緊張した様子は見られず、その落ち着きようは、まるで今から戦いにおもむく熟練の戦士のようにもあった。

全く共通点もなく、並べばどうにもちぐはぐに見える二人であったが、その服装や表情の違いからか、何故だかまるで対になるかのような雰囲気をもし出していた。

「そなた達が、救世主と救世主補佐か？」

重厚な、国王の声が響き渡る。

少年は緊張を湛えながらも、返答すべくしっかりと玉座に座る国王を見返した。

「はい。救世主として参上いたしました、ノア・モリモトと申します」

「救世主補佐、ルリ・オオコウチ。ここに」

王の前とも思えぬ少女の尊大な態度に、周囲がザワついた。

国王も若干眉を寄せたが、そもそもこの二人に跪かせず立たせたままなことも、異世界との礼節の違いを懸念しての取り計らいであり、本来なら必要な礼等を免除させた故のことである。

そのため国王は一先ず少女の態度には触れず、言葉が続けた。

「私はこの国の国王、クリムゾン・オルタード・デイズ・イリスティアである。ノアよ、そなたは救世主としてこの世界を救い、民に平和をもたらすことを誓うか？」

その言葉に、少年は国王を見据えたまましっかりと頷く。

「はい。俺はまだまだ未熟ですし、どこまでやれるかわかりませんが、救世主として喚ばれたからには、この世界のために取り組んで

いくことを誓います」

国王は少年の返答に満足気に頷くと、今度は少女に視線を向けた。

「ルリよ、そなたは救世主補佐として、ノアと共にこの世界を救うことを誓うか？」

周囲から、品定めするような視線が少女に注がれる。

少女はゆっくりと玉座の国王を見上げ、その口を開いた。

「断る」

少女達を取り巻く空間が一気にザワめく。

予想だにしなかった少女の返答に、何人もが不敬だと叫び立てるが、国王が無造作に片手を上げるとそれは一瞬で静まった。

「……それは、この世界を救うことを拒否するということであるか？」

横で青ざめてはらはらしている少年を尻目に、少女はクスリと不敵に笑ってみせた。

「私の考えを述べさせてもらっても？ 異界の王」

「許可する」

国王の言葉に、少女は微笑んだ。

「私は救世主補佐であり、救世主ではない。ならば、私に世界を救う道理はないとは思わないか？」

またもや周囲がザワめいた。

少女の発言内容と、国王を敬わない態度のせいだ。

「だが、そなたは救世主補佐であろう？補佐するべき救世主が世界を救うのであるなら、そなたも共に世界を救うべきではないのか？」

「そう、私は救世主補佐だ。だからこそ、私が守るべきものは世界ではない」

「ほう。ならばそなたは何を守ると言うのだ？」

国王の問いに、少女は今までの不敵な笑みを引っ込め、真面目な表情になる。

そして数歩前に出ると、片手でやや後ろに位置する少年を指し示した。

「私が守るものはただ一つ。世界ではなく、救世主ノア、その人だ」

先程とは別の理由で、ザワめきが広がった。

国王は、少女とその後ろで驚きの表情を浮かべている少年を交互に見、今度は何やら面白そうな笑みを浮かべた。

「ほう。そなたはこの世界を守る気はない、守るのは救世主自身である、と？」

「その通り。王の耳にも既に届いているのだろうか？本当は、私が救世主になるはずだった。この場に立っているのは、私だけになるはずだった。だが、私が不甲斐ないばかりに、ノアに救世主を押し付けた」

少女は何やら思考するように瞼を伏せ、次にその目を開いた時、そこにはなんの感情も浮かんでいなかった。

「救世主とも言えば大層名誉なことに聞こえるが、世界を救うともなれば、それなりの危険がともなう。私は、ノアをその危険にさらした。ならば私はノアを守ろう。世界など知ったことではないが、彼のために私は盾となり、剣となろう。例え彼以外の全てが滅んでも、私は彼を守り抜いてみせよう」

少女はそこまで一息に言うと、ふっと、これまでとは違う笑みを浮かべた。

「この場で誓うと即答できていれば、状況は変わったかもしれない……今の私にできることは、これぐらいだ。私がノアを守ることによって、結果的に彼に世界が救われるのなら、それでいいだろう？」

その場は、水を打ったかのように静かだった。

数秒の沈黙を破ったのは、国王だった。

「なるほど。そなたの心情は理解した」

国王は玉座から立ち上がると、その場に居る者全員に聞こえるよう、声を張り上げた。

「我がイリステア国は、ノア・モリモト、ルリ・オオコウチの両名を重要人物として待遇する！異論がある者は申してみよ！」

異論を唱える者はいなかった。

とはいえ、王の決断に異論を唱えようものなら、不敬罪で処刑ものなのだが。

s
i
d
e
..
大河内瑠璃

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

どうも皆さん。

おはようからおやすみまで、世界の果てからあなたの隣の家まで、あなたの暮らしを見守ります。

……そう、あなたのすぐ後ろでも……。

あなたの大河内瑠璃でございます。

そんなわけで、私は国王の謁見のあと、あてがわれた部屋で気持ち悪い笑い声を発しながらベッドの上でのたうち回る気持ち悪い生物と化していました。

「うっはっはっはっはっは W W W 言ったった W W W 言ったった W W W 言ったった W W W」

一体何が「言ったった」のかと言うと、先程の謁見での発言である。

名付けて、『誰があんたらの都合のために戦うか！俺は自分の守りたいもんのために戦うんだよ！発言　くスパイスに中二の香りを添えてく』である。

今まで数え切れない程「誰があんたらの都合のために戦うか！」と思ってきたが、自分が帰るためだけに戦うなんて言っても格好がつくはずもなく。

他に代わりになるような建前もなかったため、今まではひたすら向こうの神経を逆撫ですることばかり言ってきたが、今回は『救世主^{ノブ}』

を守る』という名目により、ただの我が儘ではないアピールをしつつ「誰があんたらの以下略」発言をできたように思う。

いや、ちゃんとノアは守るからね？

これでも巻き込んだことは悪いと思ってるからね？

……しかし、国王の名前、クリムゾンか。

これが本当の王・クリムゾン^{キング}ってヤツか。

よし、次から国王のことキンクリって呼ぼう。そう決めた。

てゆうか王女サマといい国王といい、この世界の人間は色の名前がついてるのかな？

そんなことを考えていると、コンコン、と部屋のドアが二回ノックされた。

およ？誰だろう。

「入ってます」

……間違えた。ここトイレじゃなかった。

「どうぞー」

ドアが開くと、そこにはノアが遠慮がちに立っていた。

「おう、どうかした？」

「あ、いや……」

ノアは部屋の外に佇んだまま、なんとも居心地の悪そうに言いよどんだ。

どうしたんだ、こいつは。

「どしたの？ 入りなよ」

私がそう言うと、ノアは躊躇いがちによく部屋に入った。

「とりあえずこっちおいで、座んなよ」

私が指し示した無駄に豪華なベッドに、ノアが腰かけるのを確認すると、私はブーツを脱いでベッドに上がり、ノアの横で行儀悪くあぐらを組んだ。

え？ パンツ見える？ 大丈夫、鉄壁使用だ。

「で、何用かね？」

ノアはチラッと横にいる私の方を見ると、視線を床に落として口を開いた。

「さっきの謁見で言ったこと……本気、なのか？」

ああ、そのことか。

「ああ、本気よ本気。本気と書いてマジと読む」

「……なんでなんだ？」

「うん？」

「なんでなんだよ。瑠璃とは今日会ったばかりで、お互いのことも知らないのに。それに、瑠璃は救世主じゃない上、元の世界じゃ死んでるんだろ？さっき俺に救世主を押し付けたって言ってたけど、どう考えたってそっちの方が被害者じゃないか。なのに、なんであんな簡単に俺を守るとか言えるんだよ」

うむ。

なんも考えてなかった！

なんかもう今までいろいろとあり過ぎて、そうゆう感覚が麻痺して

たわ。

自分とノアを守るくらいの実力は充分あるし、多少嘘はついたけど救世主押し付けたのは事実だし。

「あー……あれだよ。私はさ、救世主になれないような性格でしょ？知らん世界のためなんかに動きたくないの。でもそれだとこの世界にいる理由ないし。だからさ、これは我が儘なんだよ。ノアを守るって理由を勝手に作って、ここに理由をでっち上げたの」

「でも、だからって自分から危険なことに飛び込む必要は……」

「最初の方にも言ったけど、実力ならノアより確実に私の方が上だぞ。自分の身を守りつつノアも守るなんて造作もないことだし、疑わしいならあとで手合わせしたっていい。これも最初の方に言ったが、私をまともな人間と思うなかれ」

いつの間にか私と視線を合わせていたノアに、ビシッと人差し指を突きつける。

なんてゆうか、説明が面倒臭い。

心配されるとゆうむず痒さも手伝って、さっさと話を切り上げたくなる。

もうね！こんな純粋に心配されるとか滅多にないから！

純粋な気持ちは捻くれ者にはつらいのよ！やめて！浄化される！

「それに、何もしないですっと城にいるよか、救世主を後ろ盾にし

た肩書きがあつた方が安全だと思うけど？」

私がそう言うのと、ノアはかなり渋い表情で、ようやく頷いた。

「……わかった。俺を守るのがここにいる理由になるならそれでいいし、救世主補佐の肩書きがあつた方が安全ならそれでいい。ただし、」

「あ、ちなみに無茶はしまくるぞ？基本ノアの言うことなんぞ全く聞かんし、全力で好き勝手行動するぞ？おじさん頑張っちゃうぞ？ちなみにノアに拒否権はない」

「無茶するなとすら言わせてくれないのかよ！！少しは格好つけさせろよ！救世主の面目丸つぶれなんだけど！」

「最初は格好なんざつけようとしなさんな。んな余計なこと考えてっと、守れるもんも守れなくなるぞ」

「うう……なんだよその歴戦の戦士みたいな説得力……」

「ふっふっふ、まだまだだな。とにかく、今は守るもののことだけ考えてな。あんたのことは私が守ってやるから」

「……わかったよ。瑠璃が俺のこと守ることに關しては、言っても聞かなそうだから、もうそれでいい。ただ、俺が守るのはこの世界とこの世界の人達だけじゃない。瑠璃は俺がまm」

「いらん」

「せめて最後まで言わせろよ！！」

そんな応酬がしばらく続いたが、結果は常にノアが折れる形であった。

ふっ、私に勝とうなんざ一万年と二千年早い。

「……………瑠璃は、強いよな」

ポツリ、と、ノアが呟く。

いきなりなんぞ。

「瑠璃だって俺と同じ境遇なのに……いや、俺より悪い状態なのに、そうやって自分を見失わずに先に進もうとしてる」

いや、ちょ、だからそんな綺麗な目で私を見ないでください。

境遇も全然違うし、正直念願の脱主役ができて今非常にひゃっほーな状態です。

「や、だから私をまともな人間と思うなかれと」

「いや、それでも強いよ」

ノアはそう言って、初めてリラックスした笑顔を見せた。

……………まあ、打ち解けてくれたならそれでいいか。

「やれやれ、別に褒めても……」

私はゴソゴソと懐（と見せかけて亜空間）を漁る。

「あたりめぐらいしか出ないぞ？」

「何故あたりめ!？」

第八話 長いものに巻かれたもの？私はロールケーキ派かバームクーヘン派か？

はい、ようやく二人の服装と国名出ました。

そして今回はちょっと長くなってしまいました。

謁見の後で区切ろうかとも考えたけど、それじゃいまいち面白くなかった。

元ネタの紹介

・キング・クリムゾン

某有名漫画のラスボスのスタンド

・一万年と二千年

創世のアク●リオンから。

第九話 もしも僕が悪魔でも、友達でいてくれますか?……え?僕?そもそも

2/24のユニークが……875!?

皆様、本当にありがとうございます!もう喜び方がネタ切れになった!!

さすがにあんまり喜び過ぎてもウザイような気がするので、これからは切りのいい数字を超えた時だけ報告させていただきます。
1000とか。

そしてお気に入り件数が100件を超えました!

ありがとうございます!皆さん本当にありがとうございます!ありがとうございます!!

第九話　もしも僕が悪魔でも、友達でいてくれますか？……え？僕？そもそも！

「時にノアよ」

私はあたりめ（どうやらジョンが持たせてくれたらしい。どこまでも気の利いた奴だ）をかじりながら、ふと気になることがあったので尋ねてみることにした。

「なんだ？」

「ノアはあのにーさんになんか能力もらった？いわゆる主人公補正的な」

ちゃんというように取り計らうようには言ったから、何かしらの能力は持たせているだろうとは思うけど。

ただあいつ弱っちいからなー。

正直チートでももらわなきゃ、やってらんないような内容なんだけど、にーさん自身がどれ程のやり手なのかいまいちわからんし。

ちなみにノアにもあたりめを薦めたら、引きつった顔で遠慮されてしまった。

まあ、自分で全部食べるからいいけど。

「うーん、そうだな……恩恵は与える、とは言われたけど、具体的にはわからないな」

「ふむ……」

恩恵たあなんとも微妙な言い回しだなー。

どんな小さな追加効果でも、恩恵と言うのならしょうがないって感じニュアンスである。

むう……一度視といった方がよさそうだな。今後にも影響出るし。

「ちよいと失礼するよ」

私はあたりめを懐（と見せかけて亜空間）にしまうと、ベッドから下りてブーツを履き、移動してノアの前に立った。

「どうかしたのか？」

「いや、私はどうもしないんだがね」

「は？」

……さて、ジョンにもらった『見抜く能力』を使ってみるか？

いや、あれはどっちかと言うと能力よか正体を見抜けるもの、と言った意味合いを込めて頼んだからな。

まあいいや、せっかくだしゲームかなんかの能力使おう。

よっしゃきたぜえ〜ここにきてようやく二次元の力開放だぜえ〜。
〜。

……まあ、少々発言が痛いのはご愛嬌だ。

だって念願のTDP二次元力だよ？

これでテンション上がらないでか！

うっひゃっひゃっひゃさあ一体どう料理してやろうか。

といっても、能力を見抜くだけの技であるため、料理も何もないのだが。

……しかし、初のTDP（多分流行らない）だというのに、少々地味だなあ。

最初はやっぱり、こう、派手にいきたい。

あ、そうだ。

「ちょっと動かないでね」

私は腰をやや傾けると、右手を斜め下に、左手を開いて顔の前に構えた。

「ハイ・アナライズ」

その瞬間、カッ！と私の瞳が光った（多分）

私の気（^{オーラ}的な何か）によって空気がビリビリと振動し、照明が不安定に明暗の濃度を変える。

もちろん効果音は『**ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ**』だ！！

「……………視える……………視えるぞ、私にも敵が視える」

「いや、何が視えてるんだよ！とゆうかこれもうハイ・アナライズじゃないだろ！もはや別の何かだろ！」

ノアが何やら叫んでいるが、知ったこっちゃない。

……『言語自動翻訳機能』は、まあ当たり前か。普通に喋れてるし。

ほう、ノアは剣道をやるのか。救世主^{勇者}は剣が王道だもんな。

あ、地味に動体視力のパラメーターが高いな。音ゲーが好きと見た。

あとは……………うん、体力は多分アスリートぐらいのレベルの体力にな

ってるし、魔力も結構高い。だが、チートには程遠いな。

そして、唯一スキルという形でにーさんから与えられたらしき、『超成長力』がある。

おそらく、直接的に大層な体力や魔力を与えられる程の実力がないため、あとは成長、とゆうか鍛錬で補ってくれということだろう。

まあ、実力がないなりに機転の利いたやり方と言えようか。

状況によってはチートに成り得るかもしれないし、主人公は成長していくものだしね。

ところで、「くだしね」とゆう文章を見ると、脳内で「くだ！死ね！」とゆう文章に勝手に変換されるよね。

え、されない？私だけ？

それはともかく。

視るもんも視終わったため、私は周りの空気の振動だとか証明の点滅だとかいった、特殊効果を解いた。

ちなみに何をやったのかと言うと、エフェクトの地味な（おい）ハイ・アナライズに、ジョンからもらった『中二っぽいエフェクトをつける能力』でエフェクトをつけただけである。

少しは派手になったかな？なってたらしいなあ。

「……さて、とりあえず君のパラメーターとスキルは確認させても

らった。どうやら、いくつか能力が追加されてるらしい」

「ジョ●ヨ立ちを直せ!! さっきのエフェクトみたいなのを引っ込めたんならポーズも戻せよ!」

「痛快な突っ込み、嬉しいねえ」

言いながら、姿勢を直す。

トリップ先で似たようなことをやってもネタが通じないし、かと言って元の世界で魔法やらなんやらを使ってまでネタをやるのは危険過ぎる。

ノアが元ネタを知っているように知っていまいが私の態度に変わりはないが、知っているのならそれに超したことはない。

「……とゆうか、技はペル●ナ、ポーズと効果音はジ●ジョで、セリフはシャ●って統一感なさ過ぎだろ」

「おお、全部わかってくれたか。そしてノアはペ●ソナ派か」

「ああ、まあ。3はやり込んだかな」

「そうか。私はメ●テン派なんだ。あ、もちろん●ルソナやデビ●マも好きだぞ? アバ●ユは人●羅に釣られて買ったんだが……あれは失敗した」

「……ごめん、知らない」

「……チツ。まあ、仕方ないね」

「いや、今明らかに舌打ちしたよな？」

「してない」

「嘘つけ！」

今回のことは単に自己満足で行ったに過ぎないが、おこな今までの応酬で
思いの外ノアは打ち解けてくれたようだ。

本人は気付いていないだろうが、口調にも多少変化が見られるし、
私に対して遠慮がなくなってきた。

これは嬉しい誤算だな。

「さて、それはともかくとして君の能力だ。視たところ君にあるの
は『言語自動翻訳機能』と『多分アスリートレベルの体力』と、『
結構な魔力』と『超成長力』の四点だ」

「……最初と最後はともかく、真ん中の二つアバウト過ぎないか？」

「しょうがないじゃん、そうとしか表現できないんだから。で、こ
の中で一番重要なのは『超成長力』ね。体力も魔力も与えたけど、
結局は自分で成長しろってことかね」

私がそう言うと、ノアは何やら真剣な顔で目を伏せ、溜め息をつい
た。

「やっぱりゲームみたいにはいらないか……自力で頑張らないとな」

「いや、体力面と魔力においては、ゲームを中盤の頭ぐらいまで進めたところで『強くてニューゲーム』をしたぐらいには有利だぞ?」

「……微妙な例えだな」

「まあ、『超成長力』があるから、鍛錬次第では実力には困らないだろ。……精神面では知らんよ」

御伽噺の主人公み^{ゲーム}たいに上手いこと成長してくれりゃいいんだがね。そうそう上手くはいかないだろ。

ま、ノアのためにもせいぜい暗躍しますか。

「なあ、瑠璃は何者なんだ?」

今後の『いかにノアを救世主に仕立て上げるか』について考えていると、ノアにそんな質問をされた。

……随分唐突だな。いや、いずれは訊かれることだっただろう。

それに目の前で普通の人間には有り得ないことしたりしてるし、神ボコッたと言っちゃったし。

さて、上手いことごまかし……うわ、なんかめっちゃ真剣な目で見てるよ。

ノアは、なんか嘘をつくのが申し訳なくなるような目で私を見ていた。

多分、あの純情そうな王女サマなら一殺イチコロだね、こりゃ。こういうのも主人公要素の一つか。

だが、ここであえて空気を読まないのが私です。

私は国王キングリの前でしたように、不敵に笑った。

「女は秘密が多い程美しくなるのよ」

そんな私の寒いセリフに対する返答は、

「いやもう、秘密とか通り越して謎だから！！美しいってかも、謎だから！！なんかもう、謎でしかないから！！」

痛快な突っ込みだった。

第九話　もしも僕が悪魔でも、友達でいてくれますか?.....え?僕?そもそも

ノア君は突っ込みです。

元ネタの紹介

(※今回はわかりにくいので、全部紹介します。多分)

・ハイ・アナライズ

ペ●ソナとかに出てくる相手のスキルとかパラメーターを見抜く技。

・**丁** **丁** **丁** **丁** **丁**

某有名漫画の効果音。

・ジヨ●ヨ立ち

某有名漫画での立ち姿のこと。

・見えるぞ、私にも敵が見える

某赤い彗星のセリフ。

シャ●少佐って言いにくいよね。シ●アしようしゃ。

・メ●テン、ペ●ソナ、デ●サマ、アバ●ユ

全部ア●ラスのゲーム。ペル●ナ以外略称。

・人●羅

真・女神●生?の主人公。

第十話 最初の一撃が戦闘の半分らしいけど、思いっ切り描写飛ばしました。す

言ったそばからあっさりユニーク1000超えちゃいました……
皆様、本当に、本当にありがとうございます（；∀；）

でもいつ連日投稿が途切れるかわからないこのヒヤヒヤ感。

第十話 最初の一撃が戦闘の半分らしいけど、思いっ切り描写飛ばしました。

そして時は少し飛んで謁見があった日の翌日。

はい皆さん、おはこんばんちは!!

あなたのハートにダイナマイツ! (発音良く) 飛び散れ血飛沫!
(リアルに)

皆のアイドル、変身魔女っ子プリティー☆ステルス☆ルリちゃんだ
Y※△#■×◎☆♪?おろろろろろろ r

……うおえ。くそう、自己紹介まで持たなかった。

目眩まし用の新しいキャラ作りに取り組んでみたのだが、これは駄目だ。

いくらなんでもこれはない。

さてそれはともかく、私は現在城の外にある騎士団用の訓練場に来ています。

え、なんでかって？

「はあっ！」

「とうあっ！」

ノアが騎士団員に模擬戦申し込まれたからだヨ☆

なんでも、昨日私にちぎっては投げちぎっては投げをされた騎士の皆さんが、このままではいかんと、救世主であるノアに稽古付けをお願いしたのだそうだ。

そうなんと救世主補佐である私も着いて行く他ないわけで、初戦からずっと脇で戦いを眺めているのである。

城の中を探検（と言う名の家捜し）しようと思ってたのになあ……
だって隠し通路とか確保しておきたいじゃん。

魔物の群れでも反乱軍でもいい。

何かしらが城に攻めて来た時、「お前ら救世主なんだから戦えよ！
王族は逃げるからな！」とか言われたら、速攻でノアを連れて失踪
するためだ。

私が飛ばされた世界じゃガチでそうゆうことする奴いたしな。
備えあれば憂いなしって言うし。

まあそんなことがなかったとしても、見つけたら見つけたでもちろ
ん有効活用させてもらうんだけどね！

人知れず街に出たり、情報収集したり、あれこれ手回しとかする必
要があるかもしれない。

ああ、あと、なんか隠し部屋何か見つけておきたいな。

そんで私の周辺にノアにしかわからないようなその部屋の情報とか
隠しておいて、ノアがその部屋を見つけた時のために、「君がこの
手紙を読んでいるということは、おそらく私は君の側にいないのだ
ろう。例の件なんだが、君の知りたであろう情報を私は持っている
る。実はあれは云々」みたいなことを書いた手紙を設置したい。

いやだって、ロマンじゃんそうゆうの！浪漫と書いてロマンと読む。

まあ、そうゆう事態にならないことを祈るけどね。

それはそうとして、ノアはさっきからずっと騎士団員相手に勝ち続けている。

どうやら腐っても神の恩恵ともなれば、それなりの効力を発揮するらしく、ノアは連戦しているにも関わらず息切れ一つしておらず、さらに言うところ現在進行形でメキメキ成長中である。

一戦ごとに確実に太刀筋が力強くなっていつている。

本人の向上意志みたいなのもあるんだろうけど、これが『超成長力』か……。

この世界に来たばかりの状態がLv38ぐらいだとしたら、今はLv46ぐらいか。

模擬戦開始してからまだ二時間ぐらいしか経ってないんだぜ？

こりゃ思ったよりレベル上げは楽そうだな。精神面ではどうか知らんが。

「やあっ！」

「ほうあっ！」

「たあっ！」

「チヨストアーーーーー!」

「せいっ!」

「ぶrrrrrrrrるあああああ!」

ちよ、対戦相手の騎士の人、なんかよくわからん生き物になつとるよ。

横回転しながら宙を飛んで突きを繰り出すとか、よくやれるな。

それを軽くあしらっているノアもノアだが。

「!　そこだ!」

「ぐふっ!」

どうやら勝負あったようだ。

ノアの鋭い胴薙ぎに、騎士の人は『ただのしかばね』になりそうな声を上げて吹っ飛んだ。

……あの人死んでないよね？生きてるよね？

とゆうか、二時間も模擬戦見ると流石に飽きるな！。

最初のうちはノアの攻撃の癖とかを見極めようとしてたけど、それはあっさりわかつちやったし、勝手にレベル上げてくれるからすることもないし。

あたりめでも食べてようか。

「瑠璃ー」

とか考えてると、ノアに何か棒状の物を投げてよこされた。

いや、何かではないな。見なくてもわかる。訓練用の木製の剣である。

ちなみに、これの斬れ味は基本的に皆無に等しい。

私がそれを空中でキャッチすると、ノアの後ろでさっき飛ばされた騎士の人が担架で運ばれて行くところだった。

「瑠璃、俺と模擬戦しないか？」

「うん？ いいよ？ 手合わせしてもいいって言ったの私だし」

正直私には訓練にもならんのだろうけど、いきなりどうしたんだ。
騎士団員を相手にするのに飽きたのか？

そんなことを思いながらノアの正面まで歩いて行くと、ノアはおもむろに口を開いた。

「なあ、賭けをしないか」

「ほう（????????）」

「……その顔はやめてくれ」

珍しく挑戦的な視線を向けてきたノアに、→^{うえ}のような表情で見返す。

模擬戦中に木刀（刀じゃないけど）投げてよこして「賭けをしないか」とくれば、何をしたいのかは聞くまでもなかるーが。

ここでの連勝に気を良くしたか？ 小童^{こわっぱ}が。（????????）

「で？ だいたい予想はつくけど、賭けの内容を言ってみなさい」

「簡単だ、大したことじゃない。今から模擬戦をして、「負けた方が勝った方の要求を一つ飲む」言ってみなさいと言っておきながらこの仕打ち!!」

調子こいた（ヒデユ）ノアを適当にあしらう。

はっきり言って負ける気しないしな。

まあ、最初なんだし、せっかくだからその慢心を粉碎させてもらいましょーか。

「ま、別に私はいいけどね。何？要求って」

「終わってから言う。だから瑠璃も言わなくていい」

「ホホホッホッホッホホホホホホWW面白い、受けて立とうじゃないか」

「何だその笑い方……どこまでも謎な奴だな」

そんなこんなで私はノアと模擬戦をすることになりました。まる。

さて、瞬殺することぐらいわけないんだが、せっかくだし時間かけて相手してやろう。

経験値もらって欲しいし。

「人生は負けた方が経験値を多くもらえるんだ」とは誰の言葉だったか……。

「手加減するなよ、瑠璃」

「えー」

「不満そうな声を漏らすなよ……怪我するぞ」

正直、私が手加減しなかったら君は怪我するどころの話じゃなくなるんだがね。

「んじゃ、怪我しない程度に手加減するよ」

私の不真面目は態度に、ノアが眉間に皺を寄せる。

「それよか、注意するべきなのは君の方じゃないのかい？ 私は今まで君の戦い方を見てきてるんだよ？」

「……なるほどな」

私の言葉を挑発と取ったのかは知らないが、ノアは静かな激情を湛えた瞳で、ゆっくりと剣を構えた。

「ならこっちは手加減しない。何がなんでも本気を出させてやる」

「楽しみにしてるよ、駆け出し救世主殿^{メシア}」

……………あれ、私悪役っぽくね？

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

渾身の力で振り下ろされたノアの斬撃を、片手でなんなく受け止める。

そして、そのまま剣を振って相手を弾き飛ばす。

ちなみに、私は開戦から一步も動いていない。

「フフフハハハハ!! その程度では私は倒せんぞ人の子よ!!」

最早開き直り、思いっきり魔王悪役のセリフで相手を挑発する。

相手も挑発だとわかっているのだろう。すぐに斬りかかってくるようなことはしなかった。

「くそ……ここまでとは……!」

気分はすっかり勇者と魔王である。

まあ、向こうはそんな余裕もないだろうけど。

「来るがいい……その程度ではまだ終わらないのだろうか？」

「クッ……！」

二時間も模擬戦を続けて息の一つも切らさなかったノアだが、今は呼吸が乱れてきている。

そんな親の仇でも見るような目で見るなよ。照れるじゃないか。

ま、私も調子こいて悪役じみたセリフで挑発しまくったしな。ちょっとふざけ過ぎたか。

ノアは剣を上段に構えると、地面を蹴って一気に距離を詰めてきた。

「あああああああああああああああ！！！」

雄叫びと共に、ノアが切なさ乱れ打ち……じゃない、とにかく目にも止まらぬ速さで連撃を繰り広げてきた。

まあ、目にも止まらぬ速さって言うてもあくまで常人にとっての話で、私にはスーパースローカメラも真っ青な程、大変良く見えます。

そして私はそれを片手で残さず受け止める。

しかし……ずいぶん速くなったようだ。

剣を交えながら片目だけでハイ・アナライズを繰り返おこな行っていたのだが、私と闘っている今、まさに、この瞬間！レベルが上がっている。

それはもう面白いくらいにピコンピコンとレベルが上がっていく。

でも、あんまり一気にレベル上げてしまうとつらいよなあ、この辺でやめとくか。もう面倒だし（酷い）。

私は斬撃の力の入りが甘かった箇所を引っ掛けて、ノアを弾き飛ばす。

「ノア。次の一撃で、最後にしなさい」

私が防ぎきれるか、ノアの剣が私に届くか。いや、多分届かんだろうけど。

ノアも私言いたいことを理解したようで、もう一度剣を上段に構えた。

「……わかった。次で最後だ」

ノアが剣を振り上げる。

その瞬間、ノアがカツ!!とストロボのごとく瞬いた。またた

……いや、多分魔力をまとって光輝いたと言うのが正しいんだろうけど、今までそんなの散々見飽きている私に大した感動はない。

周りの騎士団の人達にはどよめきが走っているけど。

「来るがいい救世主よ!!勇者 さすればその刃、我が身に届くかもしれない」

せっかくなので思いつ切り煽ってみた。

魔王も経験済みだしな。雰囲気作りぐらい朝飯前だ。それ以上に雰囲気壊すのも得意ではあるが。

「これが……俺の全力だ!受け止める!!」

そう言って、ノアは先程とは比べ物にならないスピードで肉迫してきた。

だが、まだ見える。

一瞬だけ、ノアが立っていた箇所を目を向ける。

魔力も力も今までで一番強いようだったが、蹴った地面にクレータ
ーができる程ではない。

私は0・02秒でそれを確認すると、0・5秒で迫って来たノアの
剣を、またはや片手で防ぐ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

ぶつかり合った剣がミシミシと音を立てる。

いや、私の使ってる方は私の魔力を通してあるからしばらく折れは
しないが。

ノアの方も、無意識ながら剣に己の魔力をまわせているようだ。
でなきゃとっくにお陀仏になってる。

周りは私達を中心に暴風が吹き荒れ、地面は私が立っている直径一
メートルを除いて、メリメリと割れ始めた。

視界の済みで騎士団の人達が逃げ惑うのが見える。

ちなみに、何故私が立っている直系一メートルは無事かと言うと、地面に魔力を流して自分と一時的に同化させることによって、被害をまぬがれているのである。

……さて、どうするか。

主人公が今まで苦戦していた相手に全力の一撃を放つというシチュエーションは、確実と言っている程主人公の勝利によって締め括られる。

脇役でありたい私がここでするべきなのは、あえて負けて主人公に華と自信を持たせることなのかもしれない。

だがあえてそうしないのが私です（笑）

剣に魔力を込めて、ノアの剣を根元からへし折る。

「……………ッ！」

驚愕に目を見開くノアの額に、ツツ、と人差し指を突き立てる。

「マカジャマ」

パキン、という乾いた音と共に、ノアの頭上にクロスさせた金色のリングが現れる。

その途端、ノアがまどっていた魔力は一瞬にして消え失せた。

「え……？」

私はクスリと不敵に笑って見せた。

「おしまい」

そして斬撃の勢いで前に踏み出しかけていたノアの足を引っ掛ける。見事にバランスを崩したノアは、慣性の法則でそのままゴロゴロと転がって行き、数メートル離れたところに生えていた木を一本へし折って止まった。

……そこ、やることが非道とか言わない。

周りがしんと静まり返っているが、私は気にせずてってとノアに駆け寄る。

「ノアー大丈夫ー？」

一応足を引っ掛けた時魔力のシールドかけたから、怪我はないと思うんだけど。

すぐ近くまで行くと、ノアが上半身を起こした。

うん、怪我はないようだね。

てか超呆然としてるのワロス。クローズもかかったまんまだし。

「負けた……んだよな」

ようやく状況を認識できたのか、ノアが呟く。

「ういや。僕の勝ちだ、L」

言いながらノアのクローズを解く。

ちなみに私が放ったマカジヤマという技は、メ●テンシリーズに出てくる魔力を封じる魔法である。

F●のサイレスにしようかとも考えたが、あれはどちらかと言うと呪文詠唱を止めるタイプだったので、こちらにした。

ノアはまだ呆然としているのか、いつもの痛快な突っ込みは返ってこない。

……むう。むなしい。

「負けた……負けたのか……どれだけ強いんだよ、瑠璃」

独り言のように、ノアが呟く。

「私の戦闘力は53万です」

「それは……すごいなあ……」

突っ込みが返ってこねえー！ー！ー！ー！！

反応がないことがこれ程つらいことだとは……！

一度より良い状態になってしまうと、人は元の状態には戻れないのよ！

まあ、私は構わずネタを続けるけど！

「ノア……お前には足りないものがある」

「俺に足りないもの？」

ノアは、ハッとしたような顔で私を見上げてきた。

うむ、瞳に光が戻ってきたね。

「お前に足りないものは、それは！情熱・思想・理念……頭脳、と……あと……えーと……まあ、あとなんやかんやで速さが足りない！！」

「それはストレイトクー●ーのつもりなのか！？覚えてないなら言うなよ！」

ああ……いつもの突っ込みだ……いつものノアだ。

私の中では、すでにノアⅡ突っ込みとゆう式が出来上がっていた。

突っ込みのできないノアに、なんの価値があらうか（救世主？んなもんほっとけ）

「あってるでしょう？」

「あってねえよ！！あとクー●ーはもういいよ！！」

ちなみに、私の使った訓練用の剣は、バトルが終わったあと雲散霧消しました。

訓練用の剣は犠牲になったのだ……

第十話 最初の一撃が戦闘の半分らしいけど、思いっ切り描写飛ばしました。

ああ……今回長いなあ。

戦闘描写とか難しいのです。

元ネタの紹介

※作中で説明(?)があるものは省きます。

・ぐふっ！

ドラ●エで使用頻度の高い断末魔の一種。

その後、大抵は『ただのしかばね』と化す。

・切なさ乱れ打ち

刹那五月雨撃ち。

・僕の勝ちだ、L

某ノートの主人公のセリフ。
だったはず。

・私の戦闘力は53万です

フ●ーザ様が最強の某星人と戦う前に発したセリフ。

・お前に足りないものは、それは！情熱・思想・理念・頭脳（中略）
速さが足りない！！

・あってるでしょう？

某アニメのストリートクー●ーというキャラクターのセリフ。

・犠牲になったのだ……

某忍漫画に出てきたセリフが元ネタ。

(????????)の顔文字が反映されないかもしれません。

どんな顔文字が見たい方は「?(ジョニー)」 「ニコニコ大百科」
でググってみてください。

とりあえず、どんな顔かはわかると思います。

お手数をおかけして大変申し訳ありません。

第十一話 賢者はすぐに許す。時の価値を知っているから……いや、その賢者

前話の最初の方で、無意識に「変身魔女っ子」という表記をしていたことを蘇芳（同じIDで投稿している同居人）に指摘され、思わず自分の年齢を顧みてしまった昨日。

今は「魔法少女」ですもんね。

そしておそらく連日投稿はここでストップです。

ほぼ丸一日かけて書いているので、いくら春休みでニート生活やっているとさえ生活に支障がでます故……

いつも楽しみにしてくださっている方、申し訳ありません。

ですが、できる限り更新していこうと思います。

第十一話 賢者はすぐに許す。時の価値を知っているから……いや、その賢者は

私が手を貸してノアを立たせていると、白い王女サマが蒼白な顔で駆けて来た。

「ノア！」

後ろにはなんか爺やっぽい人やメイドさんを数人わらわらと引き連れていて、なんか「お待ちくださいホワイト様！」とか叫んでるのを丸っと無視している。

おいおい、老体に鞭打たせるなよ。爺さん死にそうな顔してるぞ。

「ノア！大丈夫ですか！？怪我は！」

うわ、うっさ。（酷い）

声でかいよ白い人。

「え、ああ、大丈夫ですよ」

勢いに気圧されながらノアが答えると、白い人は私達のいる場所ま

で辿り着き、そのままノアにすがり付いた。

「本当に！？怪我はないんですね！？」

疑うんならすがり付くなよ！本当は怪我してたらどうするんだよ！

まあ、模擬戦中は最後以外こっちは一切攻撃してないし、魔力のシールドは確実だから、かすり傷一つないんだけどね。

あ、私以外の模擬戦では知らんよ？

「ありませんよ。本当に大丈夫ですから、落ち着いてください」

そうだそうだ、さっさと落ち着け。

思っても口には出さないけど。

できるだけノアと王女サマのフラグ建設を邪魔したくないのだ。

最終的には元の世界に帰るため、恋人を作るとはあまりオススメできないが、せっかくの異世界トリップである。それぐらいの面白いイベントがあっても罰は当たらないだろう。

ちなみにホワイトちゃん（ここはあえてこの呼び方）は、何度も言うが本当に可愛い。

名前の通り白くて長い髪は艶があってシルバーに輝き、緑色の宝石のような瞳はくりくりの睫毛に縁取られ、ふっくらした輪郭は幼さを残しつつも、穏やかな雰囲気^{かも}を醸し出している。

……しかし、あちこち飛び回って美形や美人さんを見まくっていたせいで耐性がついて、美人さんをどう言語表現すればいいのかよくわからなくなってきたな。

今の表現でちゃんと伝わっただろうか？

「……本当ですか？」

「本当ですよ」

「本当に？」

「本当に本当です」

「よかった……」

王女サマはホッと息を吐くと、全身の緊張を解いた。

ぬう、そこまで私が信用できんか。そりゃ信用できんだろうな。

「……訓練場でお二人が闘っていると聞いて来てみれば……なんて闘い方をするんですか！怪我でもしたらどうするんです！あなたは救世主なのですよ！？」

あんな闘い方とは、おそらく周りのものを吹き飛ばしたり地割れを起こしたりした時のことだろう。

ちなみに王女サマはノアが切なさ乱れ打ち……連撃を繰り広げたあたりからいました。

その時は一人だったけど。

そこそこ離れてたし、試合の妨げになるから言わなかったけどね。

……しかし、「救世主なのですよ」ときたか。

王女サマはまだまいちノアのことを、救世主、つまり正義のヒーロー的な目でしか見れていないようだな。

まあ、昨日の今日だし、仕方ないか。フラグ建設の道のりは長い。

てゆうか王女サマ、ノア以外眼中にないな。

後ろで爺さんが死にかけて「衛生兵ー！」とか叫ばれてるのに気付いてないし、あんなノアの馬鹿みたいな一撃を喰らった私への心配はなしですか、そうですか。

別にいらんけど。

しかしまあ、フラグはまだまだともなると、あんまり遠慮して下がつてる必要はないな。

ノアもあんまり慣れてない人相手に、困ってるし。

「まあまあ白さんや、その辺にしてやっておくれでないかえ」

「誰が白さんですか！そしてあなたはどこの人ですか！」

とりあえずこの場を和ませようとしたら、突っ込みののち、白い人にキッと睨まれた。

「大体あなたも！もっと考えて行動してください！彼が邪神再封印の前に取り返しの付かない大怪我をしたらどうするんですか！？ちゃんと手加減してください！」

（
。| ,
Д ° |
）
!
?

おそらく顔に出ていたのだろう。ノアが顔を背けて小刻みに震えている。

昔から友人からは「瑠璃は顔文字まんまの顔するよね（笑）」と言われてたからな。

……畜生、笑いやがって。

だがそんなことはどうでもいい。この女、今なんだった？

「手加減しろ」だと？ あんた、救世主を支援する側だろ。それ、本

気で言ってるのか。

成長中の救世主^{勇者}相手の試合で「手加減しろ」？

攻撃なんぞ一切せず、怪我しないようシールド張ってやって、レベルも三十ぐらい上げてやって、命の危機に関わる慢心砕いてやって、「手加減しろ」！？

不用意に過保護な扱いして、それがどんな結果を呼ぶのかわかってねえのかよ！

ふざけんな！！

しかし王女サマはそんな私の気持ちなど露知らず。検討外れにノアの心配なんぞをしている。

「大丈夫ですかノア！？やっぱりどこか怪我でも！？？」

「い、いや、違……」

ノアが笑いを堪^{こら}えながらチラリと私の方を見る。

そして、固まった。

おそらく、彼には私の背後に某管理局の魔王を見ているのだろう。

そして私は、ここにきて一番の、満面の笑み。

「少し頭……冷やそうか？」

「ま、待て！落ち着け！笑ったのは悪かったから！」

「違えーよ」

私が怒ってんのはその話じゃない。

私は、わけがわからないと言った風に私とノアを交互に見る白いのに、にっこりと笑顔を向ける。

「なあ王女さんよ。私は手加減したよ？攻撃なんて最後に魔封じかけて足引っ掛けたの以外一切してないし、転がってった時もシールドかけてノアが怪我しないように、した、よ？」

語尾が、怒りで僅かに振れた。

ノアは私の怒気に圧されたのか、先程とは別の理由で細かく震えている。

王女さんも若干圧されたようだが、鈍感なのかそうでないのか、なおも食い下がろうとしない。

「で、ですが！もっと、安全な方法があったと思います！」

「……………ハッ」

押さえ切れず、蔑むような失笑が零れる。

「貴様！王女陛下になんという態度を！」

「……………ああ？」

騎士団員の一人が威勢良く突っかかってきたが、先程の闘いを見ていたためだろう。

凄みを利かせて睨みつけると、あっさり黙り込んだ。

邪魔がいなくなったところで、私は王女さんに向き直る。

「私が自身が手加減したことを認めた上で、あえて言わせてもらう。手加減というのは、相手の実力を侮るってことだ……それは、戦士に対して侮辱になると思わないか？」

ああ、確かに私は手加減したさ。

だがこの場合、それは仕方ないだろう？本気を出せばノアは死ぬ。

それに、手加減の程度は充分加減した。

怪我をさせない程度に、ノアが全力で闘えるような加減で闘った。

侮辱、という言葉に反応してか、王女さんが一瞬言葉に詰まり、な
おも反論する。

「なら！あなたの行動もノアを侮辱したことになります！」

「ああ、そう取られても仕方ないだろうな。けどな、これは第三者が言っているこっちゃないんだよ」

私は、ピッと王女さんの横にいるノアを指差す。

「もしも私が手加減したせいでノアに負けていたら、それは私のせいだ。相手を侮ったツケは、ちゃんと本人に返ってくる。だが今回は私が勝った。この場合、相手を侮ったことにはならない。何故なら、実際に相手が手加減でも事足りる実力だったからだ。だが第三^{あん}者はどうだ？どうやって、自分の言ったことの責任を取るつもりだ？しかもあんたはノアを支援する側だろ？味方がこいつの実力侮ってどうすんだよ」

本当は味方だなんて言いたかないんだがね！

数分前、ノアにこいつのフラグ立てさせようとしていたことに、本気で後悔し始めた。

「そもそも戦場に安全な方法なんざあるか。あんたは味方攻めてる敵陣の下真ん中へ行って『もつと安全な戦い方をしなさい』とでも言うのか？あんたがしてんのは心配じゃない、ただの偽善だろ。救世主に気を使ってる自分に酔いたいだけだろ。戦いのことを何も知らないド素人が、知ったような口を利くな」

私がそう吐き捨てると、王女さんは目に涙を溜めてふるふると震えていた。

ああ、駄目だ、本気で腹が立つ。

今回はノアがいる手前、あまり後ろ盾の神経を逆撫でするようなことはしたくなかったが、私の怒りは収まらなかった。

「瑠璃、言い過ぎだ。相手の気づかいに、そんな言い方は良くない」

「引っ込んでろ、森本レ●」

「森本●オ！？名字から先に弄る人始めて見た！！」

……ノアの突っ込み聞いたら少し落ち着いたな。

今日の大河内さんは、ちょっとばかりバイオレンスですよお？（言葉の暴力的な意味で）

「……………はあ」

私は肺を半分以上空にするような溜め息をつく。

「……………なんかもう、言う気失せた」

「引っ込んでろとか言っておいて!?!」

もう言いたいこと言ったしな。

つかの間の賢者も……………冷静になる。

ノアの突っ込みには、沈静、リラックス等の効能があります。

言ったことに後悔はしていない。王女サマのした発言は、身の程知らずもいいところだ。

しかし、あれだけ言っというてなんだが、王女サマの優しさは嘘偽りではないと思う。

だが、箱入りなのか己の無知さ加減と、王族故のある種の遠慮のなさ、その優しさを悪い方向に発揮させていた。

これはどうしたもんかなあ……。

これがどうにかなりや、ノアのフラグ相手に丁度いいんだけどなあ……。

私の思考は既に切り替わっていた。

もう先程の怒りなど、念頭にない。

友人からは、「瑠璃って怒るだけ怒って気が済んだら、あっさり元に戻るよね。怒らせた方は申し訳なくてギクシャクするのに、当のあんたはケロッとしてるんだもん」とか言われたっけ……。

もう……その友達にも会えないんだよなあ。

ふとしたことを思い出して、この場の空気にも関わらず、柄にも無くセンチメンタルな気分になる。

だから、ノアがいきなり殴りかかってきたことに気付かなかった。

「！……ッうっはーお！危ねえなおい！」

それでも咄嗟に身を捻って避ける。お陰で変な声が出たが。

てか、いきなりどうしたんだよこいつ！？

「瑠璃。俺ともう一度闘え」

「ちょ、どしたの、落ち着けて！」

「俺は落ち着いている」

「それは落ち着いていない人のセリフだ！」

言っている間にも、ノアは次々と拳を放ってくる。

私が全部避けているため、シャドウボクシングみたくなっているが。

「これは俺のせいだ。俺に力がないばかりに、ホワイトさんを傷

付け、瑠璃にあんなことを言わせた。全部俺のせいだ。だから、俺と闘え！闘って、俺はもっと強くなりたい！！」

「はぁ！？あんた何言ってるの！？これはあんたのせいじゃないし、私と王女さんの性格上、いずれはこうなった！そもそもあんた、私がギリギリのタイミングでクローズかけたから気付いてないだろうけど、魔力が枯渇寸前なんだよ！？闘える状態じゃないって！！」

予想だになかったノアの行動に、知らず声を張り上げる。

ああ、真っ直ぐ過ぎる人間がここまで面倒だとは思わなかった！

「問答無用！！」

先程と同様、ノアが光輝く魔力をまとう。

「ノア！」

王女サマが叫んだがノアは止まらず、神速とも思われる速度で拳を突き上げる。

その拳は、私には届かなかった。

シュワツ……と、ノアがまとっていた魔力が消滅する。

今にも殴りかかろうとしていた影がグラリと傾き、間近にいた私は、その身体を抱き止める。

そつと顔を覗き込むと、その瞼は閉じられていた。

「魔力切れ。……たたく、言わんこっちゃない」

私は、今まで介入せず私達のやり取りを見ていた取り巻きに目を向ける。

「医務室どこ？こいつ連れてくから」

第十一話 賢者はすぐに許す。時の価値を知っているから……いや、その賢者

今回はちょいシリアス風味。

瑠璃ちゃんはお怒りのようです。

ちなみに、ノア君は瑠璃ちゃんと闘ってレベルが30ぐらい上がったので、Lv70ぐらいになりました。
パネエ。

あれ……駆けはどうなった（汗

元ネタの紹介

・少し頭冷やそうか？

某管理局の魔王、もしくは白い悪魔のセリフ。

・森本レ●

「おわかりいただけただろうか……」の人。

・今日の上条さんは、ちょっとばかりバイオレンスですよお？
インなんとかさんのラノベの説教の長い主人公のセリフ。

・賢者タイム

まあ……その……知らないなら知らないままのあなたでいてください。
い。

第十二話 過去は安い本と同じ。読んだら捨ててしまえばいい……えっ？古本屋に出

パロ元をご指摘くださったM朗さん、改善点と感想をくださった天気雨さん、ありがとうございます！

感想や意見を文章にしてくださるのは、非常に有難いです。

楽しみにしてますとか書かれた日には、嬉し過ぎて打ち上げられたマグロのごとくのた打ち回ります。ビタンビタン。

空行が大き過ぎるとご指摘いただいたので、これからは注意しようと思いますが、画面をスクロールさせてどのタイミングで文章が見えるかで空行の幅を決めている箇所があります。

そのため、そういった箇所は相変わらず空行が目立つと思います。申し訳ありません。

第十二話 過去は安い本と同じ。読んだら捨ててしまえばいい……えっ？古本屋に出

side.. 森本乃明

俺には、幼馴染がいた。

少し気が強くて、周りをぐいぐい引っ張って行くようなタイプで、それでいて優しく、お人好しで。

とても世話焼きで、親が共働きで一人でいることが多かった俺の家に来ては、よく夕食を作ってくれた。

「コンビニ弁当じゃ栄養偏る！」とか、よく言っていたな。

俺は、そんな彼女が好きだった。

付き合っていたわけじゃない。

幼馴染のことは好きだったけど、今はなんとなくこのままでもいいかなと思っていた。

「ほら乃明、早く行こうよ」

どこに？と問うと、幼馴染は形のいい頬を膨らませて、眉を少し吊り上げる。

「買い物に付き合ってくれて言うたじゃない！荷物持ち！」

ああ、そうだった。

今日は部活がない日だから、幼馴染の買い物に付き合うんだった。

「そうだった、じゃないよ……ま、思い出したんならいいけどねっ」

どこか楽しそうに幼馴染は言って、綺麗に結われたポニーテールを揺らしながら歩き出す。

俺は幼馴染を追いかけて、その横に並んだ。

横からは、幼馴染の凜とした声が聴こえる。

授業がつまらないだとか、部活の先輩に彼氏ができただとか、今クラスで何が流行っているだとか、そんな話。

俺も相槌を打ちつつ、話に乗る。

季節は秋も終わる頃。

木々を紅や黄に染めていた葉は多くが地に落ち、道で落ち葉掻きをしている人はほぼ毎日見る。

そう言えば、買い物って何の？

そう訊こうとして振り返る。

しかし、そこに幼馴染の姿はなかった。

ゆっくりと視線を落とすと、彼女はいた。

棺桶に入れられ、菊の花に囲まれて。

そこで、俺はようやく思い出す。

幼馴染は死んだのだと。

顔を上げると、悲しそうな表情をした幼馴染が立っていた。

幼馴染は踵を返すと、どんどん遠ざかって行く。

待ってくれ！行かないでくれ！

俺は幼馴染を追いかけて、その肩を掴もうと手を伸ばした。

その距離は、届きそうで届かない。

一瞬、手の中をすり抜けかけた細い肩を、必死になって掴む。

そこにいたのは――

「引っかかったな、馬鹿め！」

――^{彼女}瑠璃だった。

「貴様にホーニッヒはやらん！」

「だからホーニッヒって誰だよ！」

「……………はっ!？」

目の前いっぱい、白い天井が広がる。

……また、あの夢だった。

三年前、幼馴染が歩道に突っ込んで来た自動車に轢かれてからよくこの夢を見たが、手が届いたのは初めてだった。

……もつとも、幼馴染ではなかったが。

ただそのお陰か、普段のようなやるせなさや憂鬱感はあまりなかった。

俺は、天井に視線を向けたまま、ふうと息を吐く。

「……s「知らない天井だ」お約束のセリフすら言わせてくれないとか!」

言おうとしたセリフを遮られ、俺はその場に跳ね起きる。

こんなことをするのは一人しかない。むしろ他にいたら困る。

声のした方に視線を向けると、窓から入ってくる日の光を背に、腕組をした瑠璃が立っていた。

瑠璃は、俺が知っている服装とは違っていた。

以前はいかにも女の子の私服、といった感じだったが、今はピシツとした上着にパンツルック、首元にはスカーフ、そしてショートブーツ。

強いて言うのなら、ファンタジー系のゲームや漫画に出てくる従者のような格好だった。

ただ、武器の携帯はしていない。

本来ならば脇役同然の服装なのだが、その堂々とした立ち姿のせい、なんとゆうか……とても凛々しい。

黙っていれば美人なのに、その性格は詐欺だと思う。

「大声出しなさんな。白さん起きるぞ」

瑠璃は言いながら人差し指を口元で立てると、その指で俺のすぐ横を指差した。

指し示す先を視線で追うと、俺がいるベッドに突っ伏すような形で、ホワイトさんが眠っていた。

「ほとんど付きっ切りで看病してたぞ。私のせいですーとか言って」

ホワイトさんは余程疲れているのか、先程の大声にも起きる様子はない。

そう言えば俺は、訓練中に瑠璃の静止を無視して魔力を開放して……そのあとの記憶がないから、おそらく意識を失ったんだろう。

心配、かけたんだな……。

そつとホワイトさんの髪を撫でていると、不意にポン、と肩に手が置かれた。

「役得だね、救世主君」

「は？」

瑠璃は何故か、某生首みたいな顔でニヤニヤしている。某生首について詳しくは知らないが。

なんとゆうか……うざい。すごくうざい。だからその性格は詐欺だと（ry

「ま、私も一昨日は怒っちゃったけどさ、実際はいい子だから。起きたら^{ねぎら}劳いの言葉でもかけたって」

「普通にちゃんとお礼言うよ。心配かけたみたいだし……それより、一昨日って？」

瑠璃は「うん？」と軽く首を傾げると、まるで何でもないように言った。

「ああ。ノア、丸二日くらい眠ってたんよ」

「……二日も!？」

ノアが驚きに目を見開く。

まあ、驚くのも無理はないわな。

「うん、二日。てゆうかトリップ二日目にして昏睡イベントとか早過ぎだろ。絶対ストーリー設計ミスだって」

「いや、そうゆう問題じゃなくて」

呆れ顔でノアが裏拳で突っ込みを入れてくる。

えー、でも実際早過ぎだろ、昏睡イベント。

「まあ、魔力切れるまで放出したしね。大事には至らなかったし、今回のことは気にすんな……とは言わんど。当事者の一人である私が言うのもなんだけどな、アホかお前」

見下ろすように軽く睨み付けると、ノアはぐっと詰まったように黙り込んだ。

「忠告はした。強くなりたいってのもわかる。でもな、いらんところで魔力放出して魔力切れとか、アホか。バ●オで敵にビビりまくって銃乱射して弾切れ起こして、次に弾丸拾うまでナイフ一本で渡り歩く破目になるくらいアホだ」

「例えわかり易っ！でも府に落ちない！」

「だいたい、ノアはもう充分強いぞ？『超成長力』のお陰だと思うけど、この世界に來た時点でLv38ぐらいだとすると、今はLv75ぐらいだ」

「何それ高っ！」

Lv75と言うと、世間では充分ラスボスが倒せるレベルである。基本的にラスボスというのは、Lv60～70程度で倒せるようになってる。

一日でそこまで上がったんだから、普通に化け物レベルだよなあ。

ちなみに、ラスボスと違いLv99になったとしても簡単には倒せないのが隠しボスである。

……多分それ、私なんだろうなあ。勘だけど。

まあ、所詮は隠しボス。せいぜい見付からないようにしましょ。

「……ま、いいや。説教は白さんに聞きなさい」

「え、もういいのか？」

「良かないが、ここでの説教は私の役目ではない気がする。まあ、大丈夫だ。白さんが良心を電動ドリルで抉^{えぐ}られるようなお説教をくれるだろうから」

「……表現がエグいな」

実際そうだろう。

多分あの王女サマはノアに泣いてすがり付く。そして泣きながら怒る。

白さんもノアもストレートなタイプだから、これはつらいだろうなあ。

既に良心を抉られたような表情で黙り込むノアを尻目に、私はさっさと踵を返す。

「んじゃ私はノアが起きたこと伝えて、フラグ建設適当にブラついてくるわ。愛のお説教タイムを邪魔する気ないし」

部屋を出ようとドアノブに手をかけたところで、私はふと思うところがあって、振り返った。

「……ちなみに、ホーニツヒは第三ポジ惑星の姫君でな、十三本の八重歯を持つハエ叩きの生まれ変わりで、彼女の三十メートルのエリアは銀河一美しいとされているんだ。ヤマアラシの顔した民達は、

彼女こそが『壊れたヘッドホンと静岡の電波だ』と人望も厚く――」

「だからホーニツヒはもういいよ!!」

第十二話 過去は安い本と同じ。読んだら捨ててしまえばいい……えっ？古本屋に出

今回はイマイチ面白くないような……。

次回から、瑠璃ちゃんが本格的に行動し始めます。

元ネタの紹介

・知らない天井だ
説明不要かもしれないですね。
エ●アです、●ヴァ。

・某生首
ゆっくりしていったね……！！

・バ●オ
バイ●ハザード。
カ●コンの有名なゲーム。

第十三話 薬も過ぎれば毒となる。愛も過ぎ去れば毒男となる（前書き）

蘇芳「てか、ホーニッヒってなんなの」

鷹村「ああ、どっかで説明入れようと思ってるんだけど、どこで入れようか……てゆうか、あんたはホー→ニッヒ←って発音するんだね。私ホー←ニッヒ→だと思ってた」

蘇「ふーん……ねえ、ポ●キー取って」

鷹「ほい（甘納豆渡す）」

蘇「（。）。」

第十三話 薬も過ぎれば毒となる。愛も過ぎ去れば毒男となる

吾輩は瑠璃である。名前は今名乗った。

どこで生まれたかと言うと、異世界だ。

何でも目に痛い程真っ白な所で神をフルボッコにして居た事丈は記憶して居る。

吾輩はこゝで始めて脇役といふ役所を得た。

かくして吾輩は遂に脇役を自分の立ち位置と極める事にしたのである。

そんなわけで、大河内瑠璃です。はい。

ノアが目覚めてから数時間後、現在私はノアと白さんと共に優雅に紅茶を呷あおっている。

……いや、呷あおったら優雅ではないか。

ちなみに側にはメイドさんが待機していて、彼女の煎れる紅茶がまた美味しいこと美味しいこと。

トリップ先では割と権力者のお近付きになることが多かったからな。

嗜好品や料理の質に関しては、そこそ舌が利くつもりである。

そしてノアにも訊かれたのだが、私は今城に提供された服を着ている。

何日も同じ服を着ているのもあれだったので、救世主補佐ということで従者の服を提供されたのだが、これが中々動き易くて使い勝手がいい。

ノアも同様に城から提供された服を着ている。

どのような服装かと言うと、なんとゆうか……えーと、どう説明したらいいのかな？これは。

いや、別におかしな格好をしてるわけじゃないんだ。

強いて言うのなら、中世ヨーロッパの貴族みたいなのを動き易くシンプルにして、かつセンスを良くしたような感じなんだけど……。この手の服装はいつになっても表現に困る。

ちなみに白さんは初日からずっとシンプルなドレスです。

色は毎回変わりますが、だいたいパステルな色です。今日はクリーム色。

詳細は面倒だから省く。

そんなわけで、優雅にティータイムです。まる。

邪神の再封印云々に関してだが、救世主ノアの大事を取って明日という

ことになった。

ノアが意識不明だった二日間、私は宣言通り城の中を探索しまくった。

まとまった時間があつたお陰で、この城の隠し部屋と隠し通路はほぼ全て把握した。

某弾幕ゲーの酒好きの鬼の能力で霧と化して探したため、王族用の部屋の隠し通路までばっちりだ。

霧と化したことで空気の流れがわかり、案外早く隠し通路が見付けられたのは嬉しい誤算だったが。

ついでに言うとジョンからもらった『二次元力（と呼ぶことにする。ちなみに『にじげんりよく』ではなく『にじげんりき』と読む）』の『主人公のデフォルト』^{マッピング能力}により、この城の見取り図はすっかり頭のなかにインプットされているのだ。
その辺も抜かりないぞ。

まあとにかく、今は放●後ティータイム……じゃない、三人でお紅茶を嗜^{たしな}んでいるのですよ。

しつこいようだけど。

「うーまーいーぞー！」

「出すなよ!?! 口から光線は出すなよ!?!」

「ちっ」

「だから舌打ちするなよ!とゆうかやっぱりできるのか!」

横でノアがうるさくやってるが、そんなん知らん。

ちなみに、私にかかれれば口から光線など『二次元力』がなくとも容易い。

ただし魔法は尻からd嘘です。

「実際美味しいんだよ。純粹に褒めて悪いか」

「褒めるのは悪くない。光線を出すのが悪いんだ」

そうは言っても、実際このメイドさんの煎れるお茶は美味しいのだ。

それに、私は二桁も異世界に飛ばされたりしているが、このお茶自体も初めて飲む味で、中々新鮮である。

白さんはそんな私達のやり取りを見て苦笑していた。

「彼女はメイド一紅茶を煎れるのが上手ですからね。私もよくお願いしてるんです」

「そーなのかー。森さん、おかわり」

「私はモリではないのですが……かしこまりました」

そう言って、メイドの森さん（私命名）が空になったカップを受け取る。

ちなみに何故森さんかと言うと、似てるのだ、閉鎖空間で赤玉と化して巨人と戦う某メイドに。

顔立ちといい二括りにされた黄褐色の髪といい、どう見ても森さんです。本当にありがたいございました。

「シェンナ、私にもおかわりをください」

「かしこまりました、ホワイト様。……あ、もうお砂糖がありませんね」

森さん（本名シェンナさん）はティーセットを乗せてきたワゴンから、両手に収まるくらいの箱を取り出す。

そしてメモ紙を取り出し何やら書き込むと、箱に入れて蓋を閉めた。

あー、これはあれかな、魔法具たぐいの類かな。

きっかり十秒後、森さんが再び蓋を開けると、箱の中には新しいシユガーポッドが入っていた。
ビンゴ。

「すごい……」

ノアが感嘆の声を上げる。

そうか、トリップ初心者にはこの程度でも驚きなんだなあ。

パト●ツシュ、私はもう慣れたよ。

「ホワイトさん、あれはなんですか？」

「あれは転送装置の一つで、あまり大きい物だと無理なんです、箱に物を入れて蓋を閉めると、対になっている箱に中の物が届くようになっているんです」

「へえ、そうなんですか……どんな仕組みなんだろう」

「……中に誰もいませんよ」

「わかってるから！ いたら怖いから！！」

「？ 誰かいると問題あるんですか？」

「ああ……あるところに、一人の男の子と二人の女の子がいてな……」

「やめろ！ 話すな！ 純情なホワイトさんにあんなドロドロした話聞かせるな！」

そんなやり取りをいている間にも、森さんは表情一つ崩さず紅茶を煎れている。

うん。メイドの鏡だね。

「そう言えばさ」

「どうかしたのか？」

「いや、『ホワイトさん』って『マルダさん』に似てるよね（イントネーションが）」

「どこが!？」

「紅茶が入りました」

やや会話を断ち切るような形で、森さんが紅茶のおかわりをテーブルに置いた。

「ノア様もどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

ノアがお礼を言うと、森さんにはにっこりと微笑みを浮かべた。

営業スマイルでないことを祈る。

私は新しい紅茶に二つ程角砂糖を放り込むと、他の二人より先にカップに口を付けた。

紅茶の上品な香りが、口の中いっぱいに広がる。

……………ん？

ふと、口に、舌に、食道に、胃に、何か引っかかりを感じた。

その違和感は一瞬で確信に変わり、私は咄嗟に手の中の空気を圧縮

し、コインでするように力強く親指で弾く。

「^{待て}Wait!!」

私が飛ばした空気の塊は、丁度ノアが砂糖を取り出そうとしていたシュガーポットに当たり、派手な音を立てて吹き飛ばした。

哀れシュガーポット君は壁まで吹き飛ばされ、ぶつかって中身もろとも粉々に砕け散る。

あれだぞ、私だからできる芸当だかな。良い子は真似すんなよ。

ちなみになんでシュガーポットを飛ばしたのかと言うと、ティーカップだと大惨事になるからだ。

とにかく、この場の面子の気が引ければよかったからね。

……え？やり過ぎ？こまけえこたあいいんだよ!!

案の定、他三人は突然の私の行動が理解できず、呆然としていた。

それ以上誰かが何かする前に、今の音を聞きつけてか、部屋の外で護衛のため待機していた騎士さん方（一人は初対面で邪神呼ばわりしてくれた人）が部屋に飛び込んで来た。

「どうされましたか!？」

「今の音は一体!？」

私は騎士さん方を無視し、未だに呆然としている二人に声をかける。

「二人共、その紅茶飲むなよ。毒入ってる可能性がある」

「毒!？」

驚愕する一同を尻目に、私はもう一度自分のティーカップを手にする。

一口だけ口に含み、じっくり味わうように舌の上で転がす。

それを見たノアが、ぎょつとして私のカップを持っている方の腕を掴んできた。

「なっ……!?!? 瑠璃! 何やって……」

ごっくん。

「ちょっとおおおおおおおおお!?!」

「うっせー、一々騒ぐな。私は毒じゃ死なん」

「そうなのか!?!? い、いや、そうは言っても!」

「うーん、多分神経毒だな。テトロドトキシン……俗に言う河豚毒みたいな。致死量かどうかはちょい微妙だが、命が救かったとして

も後遺症が残る程度の量だ」

「……そこまでわかるのか？」

「まあな。ただ、紅茶そのものに入れられたのか、カップに塗られていたのか、そこまでは知らん」

「いや、それは別に知らなくても……てゆうか、本当に大丈夫なのか？」

「あたぼうよ。伊達に人間諦めてないわ」

「諦めるなよ……」

「俺は人間をやめたぞ！ノアーーーーッ！！」

「断言するなよ！！」

突っ込みを入れるノアの手を剥がし、私はテーブルにカップを戻した。

そんなやり取りをしている間に、騎士さん方はと言うと、腰に差している剣を抜いて森さんに突き付けていた。

「……毒を盛ったのはお前だな」

その剣先を見て、森さんが青ざめて首を振る。

それに慌てたのはノアと白さんだった。

「待ってください！まだ彼女が犯人と決まったわけじゃないでしょう！？」

「そ、そうです！シェーナがこんなことするはずがありません！」

ほう、森さんは中々信頼されているのか。

私はそんな彼らの感動的なやり取りをガン無視して、粉々になったシュガーポット君のところまで行く。

そして入れ物同様粉々になった角砂糖を指先で突き、指に付いた白い粉を舐め取る。

「ペロ……これは青酸カリ！！」

「嘘つけ！今自分で神経毒って言っただろ！」

相手が私でなければもっと他に気にするべきことがあるだろうノアの突っ込みを聞きながら、私は辛うじて原型を留めていた角砂糖をつまみ上げ、齧^{かじ}った。

「カリ……これは青酸ペロ！！」

「青酸ペロってなんだ青酸ペロって！！てゆうか今はそんなことをしてる場合じゃないだろ！何が何でもボケたいのか！！」

ノアがキレかかってきたので、私は角砂糖をモゴモゴと租借しながら、ボケるのをやめて森さんに向き直った。

「森さんや。そっちの空のシュガーポットを選んだのは君かね」

「え……？いえ……」

森さんは、私の問いの意図に首を傾げながらも答える。

「いつもの場所になかったものですから……他のメイドに訊いて、受け取りました」

「ふむ」

私は森さんの顔をじっと見つめる。

森さんの方は困ったような、怯えたような顔で私を見返していた。

……うん、森さんも中々美人だ。家庭的な女性として箔が付きそうな感じ。

なんとゆうか、ぶりっことかセクシー系とかそうゆう捻りなしでの、普通にちよつと照れた感じで「お帰りなさい。ご飯にする？お風呂にする？それとも……私？」といったシチュエーションがあると、実に素朴かつストレートで、いい。実にいい。

そりゃ、猫耳メイドだとかロリだとかムチムチボインのお姉さんとか、そうゆうのももちろんいいさ。

だが、わかるだろ？

そういった無駄な装飾設定などなく、素材をそのまま生かした素朴な味わい。飾り気のない、落ち着いた控え目な雰囲気。そして、二次元他の娘とはどこか外れたような現実感。

何が言いたいのかとゆうと、二次元でしか有り得ないような娘もい

いが、どこか現実リアルに近いような、突飛な特徴のないキャラクターも、充分過ぎる程萌えだと思っんだ。

……さて、少々話が脱線してしまったが、本題に入ろう。

「騎士さん、剣下ろしな。森さん、犯人じゃないよ」

第十三話 薬も過ぎれば毒となる。愛も過ぎ去れば毒男となる（後書き）

本格的……本格的ってなんだっけ……orz

シエンナⅡシエン土のこと。黄褐色をしている。

つまりキャラクターの名前は髪の色で決めています。

余談ですが、我が家には何故か色の辞典のような物があり、大変重宝しております。

元ネタの紹介

- ・毒男

独身男性の略。

- ・吾輩は猫である

これは言わずもがな。

夏目漱石の有名な著書です。

- ・某弾幕ゲーの酒好きの鬼

東●プロジェクトの某鬼のことです。

- ・放●後ティータイム

某軽音漫画で主人公達が結成するバンドの名前。

- ・うーまーいーぞー！

某グルメ漫画のリアクションの一つ。

口から光線を出す他にも、津波の中を泳いだり、巨大化して大阪城を破壊したり、車椅子で病院の階段を駆け上がりたりするそうです。

ちなみに瑠璃ちゃんは全部できます。

・ただし魔法は尻から出る

魔法陣グ●グルに出てきたセリフ。

・そーなのかー

某弾幕ゲームの闇の妖怪のセリフ。

・森さん

閉鎖空間で赤玉と化して巨人と戦う某メイドです。

ハ●ヒです。

・パト●ツシュ、僕はもう疲れたよ

これも言わずもがな。

某フランドル地方の犬の主人公のセリフ。

・中に誰もいませんよ

原作が恋愛ゲームの某アニメの最終回に言われたセリフ。
怖いです。

・マ●ルダさん

初代ガ●ダムの登場人物。

・こまけえこたあいんだよ!!

「マー●ーライセンス牙 & a m p; ; ブラックエンジェルズ」と
いう漫画が元ネタという説が有力らしい。

・おれは人間をやめるぞ! ジョジョー! ツ!!

某有名漫画のD I ●のセリフ。

・「ペロ・・・これは青酸カリ!!」
某バーローが七巻で床に落ちている粉を舐めて麻薬を発見するシーンを改変したネタの一つ。

・「カリ・・・これは青酸ペロ!!」

悠さんからご指摘いただきました。

2chが元ネタだそうです。

悠さん、ありがとうございます!

第十四話 強くなければ生きてはいけない。優しくなければ生きていく資格がな

感想をくださった和砂さん、ありがとうございました！

とりあえず、打ち上げられたマグロのごとくのたうち回ります。ビタンビタン。

この小説を読んで、皆様の心が少しでも軽くなるのであれば、それに超したことはございません。

そして地震の当日とその翌日、作者は珍しく体調を崩しました。

鷹村「（冷えピタ貼りながら）いやー、体調崩すなんてここ三年程なかったけど、あれだね、熱出した時の“頭と胴体が別々になる”のような感覚は、いつまでたっても慣れん」

蘇芳「おいやめろ！」

鷹「あ、ああすまん（ま●か☆マギカか……大層トラウマらしいが）」

蘇「お前も見ろよ！この絶望を共有しろ！！」

鷹「ヤダヨ！！」

ちなみに蘇芳はCCレ●ンのペットボトルの上半分がソ●ルジェムに見えてくる程末期です。

第十四話 強くなければ生きてはいけない。優しくなければ生きていく資格が

「何……?」

騎士さんが「何言っちゃてんのコイツ」みたいな視線を私に向けてくる。

よせよ、照れるじゃないか。

「森さんは犯人じゃない。大事なことなので二回言いました。だがあえて言おう、二回も言わせんなと」

「いや、二回言ってやれよ。大事なことなんだから」

ノアの至極もつともなコメントを受け流していると、騎士さんが怪訝そうな顔をしてきた。

「……モリと言うのは、このメイドのことか?」

「そーよー。こっちの世界で有名なメイドさんによく似てんのさ」

嘘は言っていないよ、嘘は。実在はしないけど。

それはそうと、私は二人の騎士さんのうち、レモン色の髪をした知らない顔の方に話を振る。

「ところでそっちの騎士の人」

「……え、俺ですか？」

「当たたり前だろ、他に誰がおるんよ。……まあ、後ろに十四、五人連れてらっしゃるようだけど」

「何！？誰！？俺の後ろに誰がいの！？俺一体何連れてんの！？てゆうか多っ！！」

どうやらレモン髪の騎士の人はそうゆうネタに弱いらしい。めっちゃくちや怯えてる。

本来なら悪ノリしてとことんそうゆうネタを振るのだが、今は非常事態故お遊びは一切なしで。

いや、やっぱ無理だ（即決）。

「今から厨房に行って、モリさんに砂糖渡した人と魔法具に砂糖入れた人捕まえて来なさい。多分そいつが犯人だから、逃がしたり自殺されたりしないようにね」

私がそう言うと、その場にいた全員がぎょっとした表情になる。

「な……どうゆうことだ？」

「説明は後。ほら騎士の人、さっさと行かないと逃げられるかもよ。……それとも、後ろの人達の中から誰か行くかい？」

驚愕の表情を浮かべるノアを尻目に、半ばマジな顔でそう言うと、レモンの騎士はまるで転げるように部屋から出て行った。

……そんなに怖がらんでもよいではないか。

てゆうか、レモンの騎士って言うとなんかり●ンの騎士みたく聞こえるよね。

「さて……」

私は粉々なシュガーポットのところまで行くと、パンツと一つ拍手かしわでを打つ。

すると、原型を留めていなかったシュガーポット君は、一瞬で元の姿を取り戻した。

それを見て、さらに驚愕の表情を浮かべる皆さん。

忙しいな、おまいら。

「ル、ルリ、今のは……？」

白さんが零れ落ちそうな程目を見開いて訊いてくる。

うん、まあ、魔法圏の人は見たことないかもね。

「練成だよ、練成。錬金術。化学的手段を用いてN o t金属！からY e s金属！を作り出そうってゆう……」

「なんだその説明。間違っていないけど、なんだその説明」

「まあ、あれだ。広義では、金属に限らず様々な物質や、人間の肉体や魂をも対象として、それらをより完全な存在に錬成する試みを

指す。錬金術の試行の過程で、硫酸・硝酸・塩酸など、現在の化学薬品の発見が多くなされており、実験道具が発明された。その成果は現在の化学（Chemistry）にも引き継がれている。
Wikipedia参照

「Wikipedia参照かよ！ちょっと見直したのに！」

「知識とは、適した場面で使われればそれでいいのだ。どこで得たかなど、どうだっていい」

「いいセリフでそのドヤ顔やめろ！反論できないだけにムカツクなおい！」

相変わらずノアの突っ込みは痛快で楽しい。

ちなみに白さんと騎士さんはとゆうと、私の言った内容の半分も理解できずにポカーン（。㇏。）としている。

まあ、あれだよな。錬金術は私らがいた世界では完璧ファンタジーだったけど、あくまで化学的手段なわけだし、魔法圈の人達にとつては超技術なんだろうね。
オーバーテクノロジー

そして、言わずもがな私が行ったのは某鋼のニーサンの練成である。

「まあ、とある物質から同じ質量の全く別の物を生み出す技術と違ってくれば、間違いではないと思う」

「はあ……ルリ達のいた世界では、そのような技術が復旧していたのですか？」

「うーん、とりあえず、多くの人間が知るポピュラーな技術ではあったよ」

おいノア、そんな物言いたげな面を向けてくんな。
嘘は言っていないぞ、嘘は。

「なるほど……では、何故その技術をシュガーポットに？」

「ああ、一応証拠物品とはいえ、こうも粉々だと扱いが面倒だからな。応急処置として戻させてもらった」

応急処置ってゆうか、これ以上の施^{ほどこ}しようはないんだけど。

「証拠物品？」

「毒が盛られてたのは、紅茶でもカップでもない。こいつさ」

そう言って、復活したシュガーポット君を持ち上げ、顔の前でカラと振って見せる。

皆さんの表情は最早説明不要だ。

「説明を求めている顔してるから説明する。まず、この状況で毒が盛られたら、真っ先に疑われるのは誰？」

「それは……そこのメイドだろう」

騎士さんが何故そんなことを訊くのか、とでも言いたげな表情で言う。

「その通り。もし本当に森さんが毒を盛ったとして、自分に疑いがかかることを考えないはずがない。よって、こんな風に目の前で堂々と毒を盛ろうってんなら、それなりの覚悟はしてるもんさ。ところが、森さんは騎士さんの言葉に対して首を横に振った。自分に疑いがかかることを知った上で毒を盛ったにしては、おかしい行動だとは思わないかい？ 命が惜しくなって自分は犯人じゃないと否定したところで、聞いてもらえるわけないのだから」

ついでに言うと、実は森さんに対して某橋の下の銃刀法違反聖職者の人間嘘発見器能力を使ったのだが、そこまで言う気はない。

あくまで確認のためだったし、今言った理由と森さんの表情からほぼ確信してたし。

「さっき砂糖を舐めて、こいつに毒が入ってるのはわかった。なら、あらかじめ普段置いてある場所からシュガーポットを隠し、内容量を残り少なくなったポットを森さんに渡し、砂糖がなくなったところで毒入りの砂糖が入ったポットを送りつけ、あたかも森さんが毒を盛ったかのように偽装した、ってところだろう。……ただ、この状況だと三人のうち誰を狙ったのかはわからないな」

「……何故そのようなことがわかる。救世主を凌ぐ程の實力しりといい、お前は一体何者なんだ？」

騎士さんが信じられないような、不可解なものを見るような目を向けてくる。

まあ、何故わかるかってーとぶっちゃけ経験則なんだけど、それを言う気はない。

「私はしがない救世主補佐さ。別に、私が何者で何を言おうと関係ないだろう？ 例え私が何者であろうと、真実はいつもひとつ。たったひとつの真実見抜く、見た目は子供、頭脳は大人、その名は名探t」

「さり気なくバーローを混ぜてくるな！ 一瞬何言ってるのかわからなかっただろ！」

ああ、よかった、突っ込んでくれて。

このセリフを最後まで言ってたら、スベツた感じになってたよ。

やはりノアは期待を裏切らない。

「ノア……私は君を信じてるよ」

「このタイミングでそんなセリフ言われても！」

サムズアップに加えて、キラリを白い歯を光らせてみたが、返ってきたのは突っ込みだった。

むう……今回私は割りとまともなことを言ったはずだぞ？

例えそれが突っ込みに関することだったとしても。

ノアは呆れた顔で溜息をつく。

「はあ……まあいいか。瑠璃が何を言いたいかはわかった。それに
関して、あまり詮索して欲しくないってことも。ただ、もう一つ訊

きたいことがある」

「なんぞや」

「さつきリモーネさんに言った……逃げたり、はわかるけど、自殺されたりしないようにっていうのは、どうゆう意味だ？」

……………。

……………リモーネ。

……………リモーネ？

あんまりソワソワしないで♪あなたはいつでもキョロキョロ♪
よそ見をするのはやめてよ♪私が誰よりいちばん♪

好きよ	(好きよ)	好きよ♪	(うっふん) ↑合いの手
好きよ	(好きよ)	好きよ♪	(うっふん) ↑合いの手
好きよ	(好きよ)	好きよ♪	(はーどっこい) ↑合いの手
好きy			

「…………リモーネさんて誰」

「さつき瑠璃が厨房に行くように言った、騎士団の人」

「へえ……」

レモンの騎士はリモーネさんというのか。

いつの間に名前聞いたんよ、ノア。

「自殺されないようにってのの意味？森さんの話によると、最初のシュガーポットを渡したのは他のメイドなんだろ？なら、そいつが主犯だってことは考えにくい。そのメイドが脅されていたにしろ、自ら進んで毒を盛ったにしろ、メイドに扮した部外者にしろ、な。その場合、上部っつーか依頼主の情報を守るために、服毒でもなんでもして自殺する可能性がある」

今まで何度もそうゆう奴には遭遇してるけど、あれホント面倒臭い。

死なれると主犯誰かわかんなくなるし。

ああウザイウザイ、と苦い顔をしていると、ノアは絶句の表情を浮かべていた。

「そんな……」

「え、何、どした？」

「そんな理由で自殺……？」

ノアの呟きの意味がいまいち理解できず、首を傾げる。

「私、何かおかしいことでも言った？」

「おかしいことって……おかしいだろ。なんで瑠璃はそんな平然としていられるんだよ」

「なんでって」

私はノアの問いを理解できず、柄にもなく困惑する。

「王族に対して毒殺なんぞ企めば、確実に反逆罪で死刑っしょ。それなら主犯の情報を吐かせるために拷問受けるより、潔く自殺した方が遥かに楽だろうに。実に合理的だと思うぞ？ あくまで向こうの都合だろうけど……」

「そうじゃなくて！ 人が死ぬかもしれないんだぞ！？ いくら俺達を殺そうとしたって言っても……なんでそんな平然としていられるんだよ！」

大事なことなので二回言いmいや、さすがに不謹慎か。一回使ったネタだし。

しかし……こうゆうところが複数トリップの弊害なのである。

私は自分を殺そうとしたかもしれない人間が死のうと生きようと、最早どうでもいいんだがね。

どうにも、ノアはそうは思わないらしい。

それにしても、ノアは相変わらずの真っ直ぐ人間である。

「^{優しい}甘いな」

無意識に、普段より低い声色で呟く。

完璧に一人言だったのだが、静かな部屋にはよく響き、ノアと白さんがビクリを肩を揺らす。

白さんはともかく、ノアと騎士さんは私の言わんとしたことを察しただろう。

私は何でもない風を装って、ややわざとらしく肩をすくめる。

「ま、ノアが危ない目に遭っても、私が守ればいい話だ。何度も言うけど、私をまともな人間と思うなかれ。ノアは間違ってるよ。私がおかしいんだ」

周りの言うまともな人間であろうとするのは、とうにやめた。

人間でいる
人間性を保つことは、とっくに諦めた。

開き直って、仕方ないのだと、丸ごと飲み込んだ。

平凡な日常よりも生き伸びることに執着した。

世界を飛ぶ度自分が作り変えられていくことに、抗^{あらが}うのをやめた。

「君が言った通り、おかしいのは私だよ」

狂^{おかしい}っているのは、私だよ。

第十四話 強くなければ生きてはいけない。優しくなければ生きていく資格が

……なんかこれ、ノア君視点で書いてもそれはそれで面白いんじゃないかと思えてきた。

彼の性格とシチュエーションは丸つきりテンプレなのに、明らかにおかしい異分子がいるってゆう（笑）

そして今回はちょっぴり瑠璃ちゃん的心情が。

なるべく軽い方へ、コメディへと持って行きたいのに、どうにもシリ阿斯風味になるのが僕の悪い癖（右●さんボイス）。

リモーネIIイタリア語でレモンのこと。

よって、レモンの騎士さんの名前はリモーネさん。

元ネタの紹介

※作中で説明（？）があるものは省きます。

・ま●か☆マギカ

某魔法少女アニメ。

僕と契約して魔法少女になってよ！

・大事なことなので二回言いました

●フデントのCMのみ●もんたのセリフが元ネタというのが、有力らしいです。

・リ●ンの騎士

手●治虫の作品の一つ。

・ 真実はいつもひとつ！

・ たったひとつの真実見抜く、見た目は子供、頭脳は大人、その名は名探偵（略）

おっちゃんを眠らせたり、蹴り破れるんじゃないかってレベルでサッカーボールを蹴ったりする、某小学生探偵です。
バーローです。

・ あんまりソワソワ（以下略）

ラ●のラブソングの歌詞。

リ●トンのリモーネのCMで流れてたので。

合いの手は適当に入れました。

第十五話 間違いを犯しても、深刻なものであっても、やり直す機会は必ずある

再び感想をくださった和砂さん、ありがとうございました！

え、感想って返信できたの？Σ（。Д。；）……ああ、本当だ。で
きる（ゝ・ω・ゝ）

もっと調べておくべきでした。申し訳ありません。

ですが、せっかくですので、感想をくださった方に前書きでお礼を
述べさせていただくのは、続けようと思います。

羞恥プレイとか公開処刑とか、そんなんではないのです。

ただ単純に、嬉しいのです。ビタンビタン。

そして総合評価ポイントが1000点に達しました！
皆様ありがとうございます！

第十五話 間違いを犯しても、深刻なものであっても、やり直す機会は必ずある

現在、私達の前では、リモネさんレモンの騎士が床に頭を擦りつけんばかりにDO☆GE☆ZA☆をしている。

いやー、この世界でもジャパニーズDO☆GE☆ZA☆って通じるんだねえ……。

ぼんやりとそんなことを考えていると、あの場で私達と居合わせたもう一人の騎士さんが、絞り出すように声を発した。

「逃げられた……だと」

騎士さんは私達とレモンの騎士の間に立ち塞がるように仁王立ちし、握られた拳は怒りによって、前日うっかりマナーモードにしたまま就寝してしまったため、朝になってアラームを鳴らそうにも全く気付いてもらえない携帯電話のごとく震えていた。

こちらからは背中しか見えないが、おそらく般若のような形相をしているのだろう。

ちなみに私はマナーモードのアラームでもバッチリ起きられる。異世界トリップで培われた危機管理能力により、ちょっとした周囲

の変化でも目を覚ますことができるのだ。

うんと気を抜かないと風で窓が揺れただけで目が覚めるから、ある意味めっちゃ不便だけどね！

「すみません騎士団長おおおおお！！」

レモンの騎士は土下座をしたまま、負けず劣らず震えている。

いや、こちらはバイブレーションどころか電動ノコギリのようにガタガタ揺れてるけど。

てゆうか騎士さん、騎士団長だったんか。

道理で王女サマや重要人物ノブの近くにいると思った。

そして、騎士団長とゆうフレーズで騎士団長ナイ●リーダーを思い出した私に罪はない。

全然似てないけど。

「貴様……国家反逆者を逃がしたなどと……覚悟はできているだろうな？」

「ひいひい！！ももも申し訳ありません！！」

騎士団長からドス黒いオーラが立ち上っているのが見えたのは、おそらく私だけではないと思う。

だってみすみす毒殺犯（未遂だけど）逃すとか……お前なんのために騎士やってんだよ。ププー（失笑）

ノアと白さんは、この状況にどう言うこともできず、無言でおろろしている。

「ホント申し訳ないです!! すみませんでした!! どんな処罰も受けます!!」

「当然だ! ……だが、お前から逃れるとなると、相手は相当の手練だな。とりあえずお前は「切腹しろ! 介錯してやる!!」 そうだ切ぶ……え?」

なんの前触れもなく口を挟んだことに、騎士団長が一瞬言葉を失う。他の二人も似たり寄ったりな感じた。

その一瞬を逃さず、残像を残しながらレモンの騎士に歩み寄る。

そして、

「そいやあああああああああああああ!!!!」

「うわあああああああああああああ!!!!?」

掛け声と共にレモンの騎士にネックハンギングツリーをかけ……ようとして、危ないので指の筋力だけで甲冑の胸倉を引っ掴むのに変更。

鉄製の鎧に指型のクレーターができた。

「てめええええええ！ わざわざ俺が目星付けてやったのに逃がしたってのはどうゆう了見だこのスンバラリア星人！！」

「スンバラリア星人!？」

ノアの素つ頓狂な声を聴きながら、レモンの騎士をガクガクと揺さぶる。

レモン色の髪がヘドバンよろしく揺れる度に、掴んでいる甲冑がピシピシ碎けていくが、ここで誤ってボリツともいでしまわないところが大河内瑠璃です。

「何故逃がした！お前はそれでもナイトか！それともバイトなのか！？」このレモン石鹸が！！この石鹸野郎！！ダ●モイスチャー！！」

「格上げされた！？てゆうかやめろ！そこまでする必要ないだろ！今すぐやめろ！リモーネさん死にそうだろ！！」

「イエス！ ユアハピネス！ だが断る！！」

「断るのかよ！てゆうかユアハピネスってなんだユアハインネスの間違いか！？レ●アハピネスみたいになってるだろ！石鹼とゆうか洗剤から離れろ！！」

「てめーの敗因はたったひとつだぜ……たったひとつの単純な答えだ。『てめーはおれを怒らせた』！ルリーシュ・ヴィ・ブ●タニアが命じる！貴様は死んだほうがなんぼかマシだったってゆう目に遭え！！」

「エグいわ！！あと違和感なく別のセリフ繋げるな！そして変えるな！」

「末代まで呪ってやる！二十代でハゲろ！ハゲ散らかせ！どうせお前の血筋なぞお前の代で途絶えるだろうが、この話だけは七十五日を過ぎようとも世間から一生消えることはないだろう！！」

「しつこっ！！そして失礼極まりないな！！」

「粘着系男子の本気を見せてやる！おニューのかさぶたペットに食われろ！家の裏でマンボウが死んでろ！！」

「瑠璃は男子じゃないだろ！！じゃなくて、もう許してやれよ！ああもう、わかった！わかったから！何かしら罰を与えたいのなら俺が代わりに考えるから！それでいいだろ！」

「At the mercy of Messiah. (救世主の慈悲にお任せしよう)」

「だよなあ、そう簡単に引き下がるわけ……ごめん、今なんて言った？」

「あんたの判断に任せるつつたんだよ、一発で聞き取れ」

「あ、ああ、悪い……」

あれだけしつこかったのがあっさり過ぎる程あっさり引き下がったため、ノアは拍子抜けしたらしい。

高校生レベルで今の英語を一発で聞き取れという、理不尽な物言いに反論することもなく、歯切れ悪く返答する。

「で？」

「え？」

呆けているノアに、さっさと先を促す。

「代わりに考えるんだろ？どーすんだこいつの処遇。さっさと決めねえと俺の右腕にある邪気眼が暴れ出すぞ」

「……。瑠璃が言うとは本気で起こりそうだからな」

ノアは高校生に似合わないなんとも思い溜息をつくど、少しの間考えるような仕草をした後、いささか迷うような表情を残しつつ言った。

「……じゃあ、リモーネさんには邪神再封印に行く時着いて来てもらうってことで」

その言葉に、騎士団長と白さんは驚愕に目を見開いた。

ノアの決めた代わりに、私は満足気に笑う。

「んじゃあそれで決定ね。騎士団長さん白さんも、救世主ノアが決めた

んだから反論はなしよ。彼にはこれ以上お咎めなしってことで」

「なっ！？……た、確かにこいつは騎士団の中では実力は高い方だが、邪神の再封印に同行できる程かどうかは……」

「そんなのは団長さんが決めることじゃないよ。ノアが決めたんだ。それでいいじゃんよ」

ねーノア、と振り向くと、ノアは一瞬答えに詰まったような間を置いてから、ホッとどこか安心したように小さく息を吐いた。

ま、気持ちにはわかるがね。

もういつも通りの瑠璃ちゃんですよ。

ごめんねーびっくりさせて。

「あー、まあ………とりあえず、リモーネさんを放してあげなよ」

ノアに言われて手元に視線を落とすと、レモンの騎士は白目を向いて気絶していた。

オウ、シット。

「うわ、ごめん。さすがに悪いことしたわ。半ば八当たりだったし」

私はレモンの騎士を床に下ろすと、手早くケアルラをかける。

せいぜい脳震盪程度だと思うけど、念のため。
のうしんとく

ついでに両手パンして壊した甲冑も直しておく。

「謝るならちゃんとリモーネさんに謝れよ。今のはさすがにやりすぎだ」

「うん、わかってるよ。でもごめんね、びっくりしたでしょ」

さすがに無意味なことをしたとは思っているため、素直に謝る。

珍しくしおらしい私を見てどう思ったのか、ノアはどこか怖いものでも見るような表情を浮かべて、眉を顰^{ひそ}めた。

「……何かあるなら相談しろよ」

頼りないけど、と、彼は小さく付け足して言った。

それに対して、私はただ曖昧に笑うだけである。

「それよか、彼はもう完璧邪神再封印チームメンバーってことでおk？」

「随分と軽いな……まあ、リモーネさんが拒んだら考え直すつもりだけど」

「そうかい。じゃあ決定だな」

「……話聞いてたか？」

「レモンのきし が なかまになった！ ▼」

「どこのド●クエだよ！ てゆうかレモンの騎士て」

「ニックネームを つけますか? ▼」

「と思ったらまさかのポ●モン!？」

side.. 森本ノア

「君が言った通り、おかしいのは私だよ」

そう言った彼女は、瑠璃じゃないと思った。

世界の全てに絶望したような。

望みを全て諦めたような。

今まで見たこともない、そんな瞳^めをしていた。

ほんの数秒にも満たない間の出来事だったため、その時はあえて何も言わなかったが、普段の自由放埒^{ほうらつ}とした彼女からは考えられないような、負の感情で満たされた深い淵のようなものが、顔を覗かせていた。

そして、リモーネさんを吊るし上げた瑠璃は、その時と同じ瞳^めをしていた。

リモーネさんへ向けられる怒りも、以前ホワイトさんに向けたものとは違い、ろくに筋通ったものではなく、言動もどこか空回りしている。

彼女は本当に瑠璃なのか？

本来なら有り得ない疑問が沸き起こる。

それでも、俺は彼女を瑠璃と呼び続けた。

呼ぶのをやめれば、本当に彼女は瑠璃ではなくなってしまうような気がしたから。

馬鹿げた考えだとはわかっている。

だが、彼女が瑠璃の笑みを浮かべ、いつもの飄々とした態度に戻った時は、ホツとした。

そして手の中で気を失っているリモーネさんに珍しく少し慌てながら、八当たりだったと、驚かせて悪かったと謝ってきた。

八当たり。

つまり、リモーネさんに怒ったわけではない。

なら、何に対しての八当たりだ？

俺は、さっきの彼女を思い返した。

絶望を抱えた瞳で、自分はまともではないと言った彼女。

瑠璃が情緒不安定になったのは、あの発言があってからじゃないか？

なら、彼女をあんな行動に追い込んだのは――

――俺か？

「なーなー。レモンの騎士ってポジシヨンのイエローだよ？髪の色といい、この残念っぷりといい」

「残念とか言うなよ！可哀相だろ！てかなんでいきなりレンジャー物！？」

「形から入りたがるのが私です」

第十五話 間違いを犯しても、深刻なものであっても、やり直す機会は必ずある

白さんが……空気だ……。

あれ？フラグ立てたいんだよね？……あれ？

そして何故にシリアスぶる。

もっと軽く！もっと気軽に！何故だぁー！ー！ー！！
どうしてこうなった……。

元ネタの紹介

※作中で説明（？）があるものは省きます。

・騎士団長
ナイトリーダー

某禁●目録の登場人物

・スンバラリア星人

ゲーム「学校で●った怖い話」でとあるルートを選ぶと、登場人物の一人の正体がこうなる。

・てめーの敗因は……たったひとつだぜ……D I ●……たったひとつの単純な答えだ……『てめーは おれを怒らせた』
某有名漫画の承●郎のセリフ。

・ル●ーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる。貴様らは死ね！
元某帝国の皇子のセリフ。

・ハゲ散らかってろ！
某銀の侍の漫画に出てくるセリフ。

・粘着系男子の本気を見せてやる
・おニユーのかさぶたペットに食われる
・家の裏でマンボウが死んでろ
家／の／裏／で／マ／ン／ボ／ウ／が／死／ん／で／る／P様の楽
曲「おニユーのかさぶた、ペットに食われる」の歌詞の一部。
(※スラッシュは検索避けです)

・邪気眼

邪気眼とは、選ばれし者が持つという第三の眼である。？チャンネ
ルを原典として生まれた・・・

(ニ●ニコ大百科参照)

第十六話 憤怒と愚行は並んで歩み、後悔が両者のかかを踏む。

そこで悪戯

感想と改善点の指摘をくださったr s k（らすく）さん、ありがとうございました！

パロネタを一場面で多様し過ぎかもしれないというご指摘をいただいたので、今後は慎重に調節していこうと思います。

そして総合P Vが十万超えました！
皆様ありがとうございます！

そしてある日。蘇芳は進学先の学校の説明会に行くようです。

鷹村「（歯磨きながら）鞆は？（持って行かないのかとゆう意味で）」

蘇芳「なんで？」

鷹「上履きとか（しまうのに）……あと（口に水含む）んーんんん？（※訳…教科書は？）」

蘇「終止符？終止符は、」

鷹「（含んでた水噴き出す）……………馬っ鹿野郎w w w w w w w w」

蘇「w w w w w w すまん、何だった？w w」

鷹「教科書だ教科書！終止符ておまWWWW」

蘇「WWWWWW」

ちなみに「終止符？」と聞き返した時、蘇芳は真顔でした。

第十六話 憤怒と愚行は並んで歩み、後悔が両者のかかを踏む。

そこで悪戯

side..大河内瑠璃

さて、そんなこんなで毒殺未遂事件の翌日。

あのあと、結局毒殺犯（未遂）を見付けることはできなかったらしい。

レモンの騎士の話によると、なんでも事件に関わりがあると思える二人のメイドを聞き込みにより見付けたのだが、捕らえようと声を上げると何やら空間に深い闇のような物を広げ、そこに逃げ込んでしまったと言う。

慌てて追いかけようとしたが、二人のメイドも深い闇も跡形もなく消えてしまったらしい。

どこの闇の回廊だよ。

その後も他の騎士団の人と城中を搜索したらしいが、当然のごとく見付からず、現在城内は厳戒体制が敷かれているらしい。

しかも逃亡したメイドが使っていたらしい闇の回廊（仮）は、国最強（笑）と言われる宮廷魔術師ですら心当たりがないとのこと。

マジ使えねー。

まあそれはともかく、毒殺未遂が起こって闇の回廊（仮）で厳戒体制とは言え、やるべきことはやらにゃーとゆうことで、現在私とノアは応接間的なところにいます。

ついでに言うとなんが座っているソファの向かいには国王と王女キンクリが座っている。
サマが座っている。

そしてそのソファの側には多分宰相らしい緑色の髪のおっさん。
謁見の時にも確かいた気がする。

その背後には騎士団長と名も知らぬ騎士団員AとB。
そして私達の座っているソファの後ろには、レモンの騎士と名も知らぬ騎士団員Cが待機。

この面子と初日の謁見で気付いた人もいるとは思いますが、どうやらこの国には王妃がいないらしい。

元々体が弱い人だったらしく、白さんと年子の息子を産み、新しい命と引き換えに息を引き取ったらしい。

いや、体弱いんなら年子でなんて子供生むなよ。

ちなみにその年子の息子（第一王子）は現在、「俺より強い奴と闘ってくるぜ！」とかなんとか言って武者修行に出ているらしい。

なんだ、ただの戦闘狂か。
バトルジャンキー

そのまま城に残っていれば、いい修行相手が現れたものを……。

……あ、ちなみにノアのことだよ？ 私はそんなアホと闘う気なんて

さらっさらないから。

てゆうか、武者修行になんて出ていいのか第一王子。

勉強しろ、勉強。帝王学とか。権力者が駄目駄目だと困るのは庶民なんだぞ。

あと雑学も学んどけ。んで、雑学王になれ。

「雑学王に俺はなる！！」とか叫んだら似合いそうだな、顔も知らぬプリンスよ。

まあ、そんなことは今はどうでもいい。

今は邪心再封印今後に関しての話し合いである。

「さて、こうしてそなた達には来てもらったわけだが……救世主よ、もう体は大丈夫なのか？」

重厚ぶって国王キングが口を開く。

いや、別に重厚ぶってるわけではないのだろうけど、あちこち多数の世界に飛ばされて、いろいろと王族（嘲笑）な部分を目の当たりにしてしまっていると、王族やら権力者のそれらしい行動全てに失笑が込み上げてくる。

だが表情には出さない。

全てはやり取りを円滑にするため。

救世主なんぞ押し付けられた可哀相な（酷い）ノアのため！

私は脇役！

黙って流れに身を任せ……るように見せかけて全力で抵抗するッ！！

「はい。ご心配をおかけして申し訳ありません」

そう答えるノアは心なしか緊張して……いや、心なしかじゃないな、ガチガチに緊張しとるな。

日本には存在しない“王族”と対面する勝手のわからなさど、ある意味未知のものに触れることによる緊張感。

私にもそんな時期がありました。懐かしいなあ……。

そんなノアを見て、キンクリはふっと苦笑した。

これが『権力者を前に緊張する相手に対する満足気な笑み』に見えてしまうとか、私の目は相当腐ってますか。そうですか。

「そう緊張されるな、救世主よ。それより、先日は我が娘が失礼したな。随分と不躰な物言いをしたようだ、申し訳ない」

そう言って、キンクリはノアに頭を下げた。

……ふむ。

私の中でキンクリの株がやや上昇した。

一方、^{キンクリ}国王が頭を下げたことに驚いたのは、私とキンクリ本人以外の全員である（白さん含む）。

「いや、そんな、顔を上げてください！彼女は俺を心配してくれた

んですし、俺が力不足なのがいけなかったんですから。それに、王様が俺みたいな一般人に頭なんか下げるなんて……」

慌てたようにノアが言う。

うーむ、精神面ではびっくりする程理想的な『発展途上の主人公』勇者だな。

もしもこんなお人好しが、被召喚者に対して何とも思わないような腐れた世界に飛ばされていたら……。

そんな『ifの話』もしもがふと脳裏に過ぎり、知らず目を細める。

「いいや、自己満足でしかない心配は、時として相手を傷付ける。そして私が王だからとは言え……いや、王だからこそ、過失は認めなければならぬ。それが身内によるものであるのなら、なおさらのことだ」

ほう。中々話のわかる国王サマじゃないの。

どうやら『もしも』の心配はなさそうだな。まだ油断はできんが。

「あ、あの、私もあれからずっと考えて……確かに私は戦いを知りませんし、考えも甘いです。だから、せめて、できることをしようと思って……それがノアにとって迷惑になるだなんて、本当にごめんなさい」

ノアにとって、ね。

ホント、ノアしか眼中にねーなこの王女サマ（笑）

ま、Love is blind（恋は盲目）とも言うし、口出しはしないでおこうかね。

……恋かどうかはまだわからんがね。

「本人も反省している。申し訳ないとは思っているが、どうかこの子を嫌わないでくれまいか？根は優しい子なのだ」

「そんな、嫌うだなんてとんでもないです！ホワイトさんが優しいのは知ってますし、俺はそもそも怒ってませんし、瑠璃だってもう怒ってませんよ。な、瑠璃！」

「……………。おう、私か」

ノアが先方と勝手に話を進めてくれたので、完全にやり取りの観察及び己の思考にはまっていたため、不意に話を振られて思わず反応が遅れてしまった。

「……聞いてたのか？」

「聞いてた聞いてた。で、私ならノアの言う通りもう怒ってマセンヨー。まあ、白さんが自分の思いやりに吊り合った行動が取れる人間になれるかどうかは、今後の白さん次第だと思うがね」

私の不敬な物言いに、立ちっぱなし組からブワツと殺気が広がる。

と言っても、騎士団員さん方は私の实力を知っているため、殺気を放つだけでそれ以上は何もして来ないが。

「おい貴様！謁見での態度と言い、無礼が過ぎるぞ！身の程をわきまえろ！」

立ちっぱ組で唯一私の実力を知らない、多分宰相らしいおっさんが突っかって来る。

騎士団組はよほど私が怒るのが怖いのか、すっかり殺気を引っ込めて「お前何言っちゃってんの！？お願いこの人怒らせないで！三百円あげるから！！」的な視線を（多分）宰相のおっさんに向けている。

当の（おそらく）宰相のおっさんは、私に対して憤るのに忙しいのか全く気付く様子はないが。

だがまあ、何か言われて黙っているのは性に合わんしな。

私は嘲笑を含ませた笑みを浮かべ、クスクスと声を立てる。

「身の程をわきまえろ？随分とおかしなことをおっしゃるのね。別世界から来た私に、異界の王に膝を屈せと？ならば訊くけど、あなたは女王蜂に対して膝を折ると言うの？」

ゾクッ。

部屋の温度が、三度くらい下がった気がした。

ブワッ。

周りから、冷や汗が噴き出す音が聞こえた気がした。

……おい、せっかく雰囲気盛り上げたのに台無しじゃねえか。

どうやら、ノア、白さん、騎士団長、レモンの騎士あたりにとって、私の口調が変わった時は危険信号だと認識されているようだ。

あながち間違っではないが……ノアよ、そんな冷や汗で顔面が滝になる程の動揺もんかね。
地味に傷付くぞ、それ。

だが、（もしかして）宰相のおっさんはそれにも気付かない。

「国王陛下を蜂と同列に見ているのか！？不敬も大概にしろ！」

「あらあら、私はそんなこと言っていないわよ？それにね、貴方はたかが蜂と仰るのかおっしゃもしれないけれど、蜂の社会にもちゃんとヒエラルキーと言うものはあって、たかが蜂と言えども、王は王なのよ。人間には全く関係なくてもね。つまり私はこう言いたいのだ。『自分と全くの無関係な王に敬意を払うの？』ってね。私はこの国とは、この世界とは全く関係ないところから来た。そんな私がこの国の王に膝を折って、私に何かメリットはあるのかしら？是非とも伺いたいものね」

ゆっくりと、憎たらしい程余裕たっぷりの口調で、かつ有無を言わせないように、一気に言う。

国王の目の前でこんなこと言うのもどうかと思うけど、んなもん知るか。

「なっ……きつ、貴様……！」

なおも食い下がろうとしない（ひょっとしたら）宰相のおっさん。

だが返す言葉が見付からないようで、酸欠の金魚のようにパクパクと口を開閉するのみである。

うむ、いい気味だ。

金とか権力とかくだらない物にすがり付いている人間の信じている物を粉微塵に碎いてやるのは、常に爽快である。

そんなわけで言い返せない（憶測だが）宰相のおっさんを、ニヤニヤとえげつない笑みを浮かべながら眺めていると、キンクリが（ネタ切れだ）宰相のおっさんを制した。

「ビリジャン、もういい。口を挟むな」

「!？ ……し、しかし！」

「いいと言っている。今必要なことは、話に水を差すことではない。これ以上余計な口を利くと言うのであれば、即刻出て行くがいい」

国王キンクリにそう言われ、おっさんは苦い顔で渋々と引き下がった。

おう、中々話のわかる国王サマじゃないの。

とゆうか、おっさんの名前ビリジャンってゆうのか。
心底どうでもいい。

「申し訳なかったな、救世主補佐よ。そなたの言うことも最もだ。無理に我々に敬意を払えとは言わん」

「やー、いっすよ、別に。私もこんな性格だから周囲と衝突しまくりで。突っかかりたくなるのもわかりますってゆうか」

一転して口調の碎けた私に、騎士団組と冷や汗組はホッと胸を撫で下ろし、おっさん（名前認識拒否）は殺気を増した。

ちなみに、何故私の口調に敬語とも思えぬ程度の敬語が混ざったかと言うと、一応キンクリに対して及第点のようなものを与えたからだ。

勝手にだけど。

権威だなんだにこだわらない点は丸。

「救世主補佐よ。……いや、名はルリと言ったか。そなたには感謝している。話はホワイトや騎士団員から聞いたが、王族と言う権威を恐れてか、この子にはあまり面と向かって叱ってやれる人間がないのだ。先日のように、この子の至らない点を厳しく指摘してくれるのは有難い」

「……………あー、そーなの……」

やっぱ甘やかされてたんか、と気の抜けた返事を返す。

てゆうか主人公より先に王サマに名前呼ばれちゃったんだけど、これって脇役としてどうなの。

ひょっとしなくても出番取っちゃってる？（汗）

さっさと次の世界行くつもりだしな。

そもそも、誰かの下に付くって時点でまっぴらごめんだね。

「てゆうか、私のことはもういいんでさっさと邪神についての話を進めましょーや。ノアもせっかくの救世主^{メイン}なのに放置とか可哀相過ぎるっしょ。拗^すねるぞ」

「拗ねないから！誤解を招くような発言はやめろ！」

さっさと話を進めようと、ノアに適当に突っ込ませてやり取りに引き込む。

キンクリはそんな私を見て、ふっと唇を歪めた。

……ああ、謁見の時の笑みや。面白そうな笑みだ。
これは面倒なことになりそうな。

「……面白いな、ルリよ」

「残念だが『面白い』は私にとって褒め言葉じゃないんだ。よってあたりめは……軟体動物の干物はやらん」

「わからないと思って言い直したんだろうけど、嫌な言い方だな。
てゆうか、まだ持ってたのか」

「それがどうゆう物かはわからぬが……褒めていないと言うのであれば、それは済まなかった。だが、私はそなたに興味を惹かれたのだよ。揺るぎないその実力もだが……謁見時の堂々とした態度も、今の王族を王族とも思わぬ態度も、先程ビリジャンに物申した際の

不敵な態度も、全てが同一の人物の振る舞いとはとても思えぬ。かと言って演技をしているような違和感も欠片もない。おそらく、あなたはそれらの振る舞い全てを自分の性格として扱っているのではないか？ある意味究極の演技と言えるのであろうな」

うわー、なんか面倒臭いこと言ってきたよこいつ。

そんな理屈っぽいこと言われても知らんし。

興味を持たれたとか、迷惑以外の何者でもありません千円。

「私はただの性格破綻者だよ。私を下に置きたいってんなら、諦めな。おまいさんじゃ私は扱えんよ。せいぜいテンプレ止まりにしとけ」

「謙遜する割りには手厳しいのだな」

キンクリが実に面白そうな笑みを向けてくる。

それに対しておっさんは今にも沸騰しそうだが。

ちなみにヘッドハンティングは減点対象だからな！

よって敬語もどきは撤回！

「私は干渉されるのは好まんだよ、王・クリムゾン^{キング}。私は常に観賞し、干渉する側でいたいと思っている。……まあ、その割りにはいささか目立ち過ぎたがね。反省はしている。だが後悔はしていない」

そう言って、ひょいと小さく肩をすくめて見せる。

いい加減この話切り上げたいんだよ。
ヘッドハンティングも性格分析もナンセンスだ。

「さっさと話を進めましょーや。こんな話続けても私やそっちの要求なんぞ永久に飲まんし、私の立場はあくまで救世主の補佐^{補佐}ってとこで妥協してくれや」

「そうか……それは残念だ」

残念だ、と言いつつも、キンクリには全く諦めた様子は見られなかった。

フン、じわじわ懐柔できるとでも思い込んでいるのかもしれないが、私の意志は変わらん。
仕事終わったらさっさと出て行こ。

「注目されるのも、英雄だなんだと担ぎ上げられるのも、全部主役^{ノア}でいい。私はあくまで脇役^{補佐}なのだから」

ちなみに、ノアは私が王・クリムゾンと言ったあたりで、うつむきながら必死で笑いを堪えていたとゆう。

第十六話 憤怒と愚行は並んで歩み、後悔が両者のかかを踏む。

そこで悪魔

王様の口調なんてワカラナイヨ。

今回はちよっち真面目（？）なお話。

そして長めです。

まとめ切れなかった……。

そしてようやくタイトルの由来がちよこつと……遅っ!!

ビリジャンⅡビリジアン在意。

よって緑髪のおっさんの名前はビリジャン。

元ネタの紹介

※作中に説明（？）があるものは省きます。

・闇の回廊

某王国の心（英訳）で敵が使用する技（？）の一つ。

これを使えば、光の世界、闇の世界、はざまの世界を自由に行き来できるらしい。

・海賊王に俺はなる！

最早説明不要ですね。

某有名海賊漫画の名ゼリフです。

・三百円あげるから！

某銀の侍の漫画のゼリフ。

第十七話 空想は知識より重要である。知識には限界があるが、想像力があれば

キンクリやおっさんにされた話を要訳してみる。

- ・約千年前封印した邪神が復活しそうである。これは聞いた。
- ・邪神が封印されている場所は、休みながらも馬車で頑張って飛ばせば、王都から二週間弱ぐらいで着くぐらいの距離らしい。
- ・偵察隊とやらは転移魔法でその距離をショートカットしたらしい。
しかし、救世主^{私達}一行は転移魔法で行くことは叶わないらしい。
なんか転移魔法は自分より魔力の高い者を運ぶことができない
とかなんとか。
- その時点で私がアウトだし、レベ上げたノアも正直微妙。
よって馬車での行動は決定事項。
やれやれ、異世界の魔術師は軟弱な。

- ・具体的にどう復活しそうなのかというと、邪神が封印されている場所から、瘴気と呼ばれる魔力の禍々しい版みたいなのが溢れ出していたとのこと。
ちなみに瘴気に触れると、人は発狂し、草木は枯れ、
魔物が凶暴化するとか。
よく無事だったな偵察隊。

- ・肝心のどうやって再封印するのだが、これがいまいちあやふやである。

千年前の救世主君は自分の魔力を剣に込めて邪神にぶっ刺した
とゆうテンプレな封印の仕方をしたらしいのだが、
いかんせん情報が古い。

三十枚程のオブラートに包まれてはいたが、要訳すると自分で
画策してなんとかしてくれとゆうことらしい。
ふざけんなし。

そういった内容の話が、実にもったいぶって、遠まわしに、長々と
話されたわけで、邪神再封印に積極的なノアはともかく、飽きる程
勇者の活動をして来た私は、実際飽きていた。

あーこれはあの世界で似たようなことがあったな、とか、この展開
はしょっちゅう出くわすなウゼエ、とか、何イ！？貴様が北斗●拳
の継承者だとう！？とか、途中からそんなんばっか考えてた。

これ以上あまり目立たないためと、王宮サイドの態度とノアの反応
を観察するため、自重と称して黙って話を聞いているつもりだった
のだが、私に興味を持ったキンクリがやたらと話を振ってきて鬱陶
しいのなんの。

もう手遅れかもしれないが、これ以上頭が回ることを披露して馬鹿
を見る気などさらさらない。

キンクリからの質問や振りは、日本人特有の曖昧な返事で適当に受
け流した。

その度にキンクリは不満そうな顔をし、おっさんは殺気の籠もった
目を向けてきたが。

まあ、そんなわけで。

ノアが真摯な表情で王宮サイドの話に聞き入っている間、私は心底うんざりな顔をしていたのである。

「わかりました。それでは、必要な物はそちらで揃えてもらえらるということですね？」

「うむ、あくまでもこちらは“依頼する側”ということになるからな。できる限りの援助はさせてもらおう」

ノアの問いに、相変わらず重厚ぶって答えるキンクリ。

いや、ぶってるわけではないのだろうけども、認識し直すの面倒だし別に変わらんでしょ。

てゆうか、“依頼する側”とか言っておきながら援助ってーのが気に食わん。

ぶっちゃけ恩着せがましい。

あーもう、交通手段と経費だけもらってさっさと出て行こうかな…。

「ありがとうございます」

「当然のことだ。邪神の再封印にて気を付けることだが、やはり道中の瘴気による影響だろう。魔物の凶暴化により、近隣の町や村に被害が出ているとの報告がある」

経費から武器も買うんだよな……もしくは向こうで用意してくれるか……後者かな。

キンクリも乗り気だから、おそらく結構手の込んだ物を渡してくれることだろう。

国宝級の伝説の剣とかだったら少し興味あるな。

割りとそのゆう物にはしよっちゅう出くわしているわけだけど、もし精霊とか宿ってる武器だったら、少し話しておきたいし。

その場合、精霊は女だな。

ノアが男だから、これはお約束とゆうやつだ。

「魔物の凶暴化のように、目に見える問題であればこちらとしても対処のしようはあるが、原因である瘴気をどうにかできなくば、根本的な解決にはならん。魔物の討伐隊を編成し度々派遣してはいるのだが、全てに手が行き届いているわけではなく、さらに瘴気を浴びた魔物は通常よりも遥かに危険だ。討伐隊も無事ではない。人材不足も如実に現れてきており、今は現状維持だけでも手一杯になりつつある」

あー、お腹空いてきたな……。

人間やめてから……正確には「これもう人間の域超えただろ」と認識してから、三ヶ月は何も食べなくても死にはしなくなったことに気付いたが、空腹という感覚は残っている。

あたりめでも食べようか。

ちなみに、ジョンからもらった『今日のあたりめ』とゆう能力は、一日一杯だけあたりめが出せるらしい。

何その無駄スキル。

だがそれがいい。

「先程の説明でも言ったが、人間が瘴気に触れれば、気を狂わせてしまう。魔力を持つ者であれば魔術によりシールドを張ることができるが、その魔術を使える者が限られているのだ。とても被害を受けた地域に派遣できる程ではない」

それにしても暇だなー。

オリジナル昔話でも考えてるか。

昔々あるところに、お爺さんとお婆さんがいました。

「このままでは、邪神を再封印しても被害が深刻になる……とゆうことですか？」

「そういうことになる。と言っても、既に深刻の域に入りつつあるのだが、な……もちろん、救世主一行には瘴気から身を守る術を持つ者を同行させる」

お爺さんとお婆さんは、お爺さんが山に竹を切りに行き、それで籠を編んで街に売りに行き、生計を立てていました。

ある日お爺さんがいつものように山で竹を切りに行くと、そこには黄金に光輝く――

――伝説の剣が。

「わかりました。その同行する魔術師の方は、どんな人なんですか？」

「その人物なのだが……」

「私です」

おお、これはなんとゆうことぢゃっ！

驚いたお爺さんは剣を手に取り、試しに振ってみると、お爺さんの半径十メートル以内にあった竹は、軒並み斬り倒されました。

斬れる……こいつは斬れるぞ！

伝説の剣を手にしたお爺さんは、竹を取る仕事を放棄すると城下へ向かい、そこで悪さをしていた者達を片っ端から斬り伏せました。

悪い奴らを全て倒したお爺さんは、やがて裏通りの頭ドンとなりました。

「!?!? な……なんでホワイトさんが!?!?」

「私が父にお願いしたんです。私は瘴気を防ぐ魔術が使えますし、少しでもノアの役に立ちたかったので……」

最早怖いものなشتったお爺さんは、それはもう悪事を極めました。

着崩した黒いスーツに派手なシャツ。

襟元や手腕には高そうな貴金属。

そして顔には強面こわもてなサングラス。

アジトでは常に美女を侍らし、外では大勢のSPに囲まれて城下を闊歩かつぽする。

それが今のお爺さんでした。

「そんな、危険過ぎます！中半かな目的じゃないんですよ！？国王も自分の娘が危険に晒されるって言うのに、何故了承したんですか！」

何い！？金が返せんどう！？なら約束通り娘はもらって行くぞ。

そんな！せめて娘だけは……お許しください！

ならん。その娘を連れて行け！

はっ！

いやああああおとつっあん！！

おキヨ！やめてくれ！娘を連れて行かないでくれ！おキヨおおお！！

「説得はしたのだが……この子は一度決めると聞かなくてな。どう説得されようとも、信念は揺るぎないそうだ。全ては救世主ノア、そなたの力になるためだ」と

その辺におしよ、お主。

！？ 誰ぢゃ！？

ふふ……久しぶりじゃのう、お爺さんや。

貴様は………婆さん！？

「そんな……俺のため！？ 駄目ですホワイトさん。いくらなんでも危険過ぎます！」

「いいえ、私の決心は変わりません」

あの時の私は無力じゃった……伝説の剣を片手に闇に染まり行くお爺さんを、止められなかったのじゃ……。

しかし！今はその力を手に入れた！

今こそ、お爺さん！お主の悪行に終止符を打つ時じゃあああ！！

ふん……舐められたもんぢやの。

エクスカリバー

来るが良い。わしのこの約束された勝利の剣で、貴様の肉も、骨も、血管も、神経も、細胞までも、全てを切り裂き、八つ裂きにしてくれるっ！！

八つ裂きになるのは、お主の方じゃぞお爺さん……！

くくっ、一丁前な口を利きおる……！！いざ！

尋常に！

勝負！！

「駄目です。俺は自分の身を守ることに手一杯で、ホワイトさんを守ることはできません。俺は……貴女に危険な目には遭って欲しくない……！」

「ノア……ありがとうございます。ですが、私自身が決めたことです。それに私は、自分の身ぐらい自分で守れます」

……くっ、何故当たらんのだや！

ふふふ、遅い、遅いわお爺さんや！

この力は七つの玉で呼び出した龍から、お爺さんを倒すためだけに得た力！

名付けて『日本全国のお爺さんだけを倒す程度の能力』！

な、何イ！？

闘いはまだ始まったばかりじゃよ、お爺さん！！

「全てをノアに……救世主様にゆだねるのではなく、私は王女としての責務を真っ当しなければなりません。そのために、この力は国民を救うため……そして、ノアのために使いたいです」

「ホワイトさん……」

そこぢゃあっ！！

！！……………ぐうっ……………！！

！ 貴様……わざと避けなかったな……！！？

ふふ……これでいいのじゃよ……これで……。

お爺さんや、これでお主も、今まで悪事を働き、奪って来た命や、無理矢理引き剥がした人達への罪の重さがわかるじゃろうて……

婆さん……そんなことのために、わざわざ……！

ふっ……最期まで……愛しておったよ……お爺……さん……

婆さ————ん！！！！

「……わかりました。そこまで固い決心なら、俺はもう何も言いません。でも、これだけは約束してください。俺が危険だと判断したら、すぐその場から離れること」

「ええ、ノアの足を引っ張りたくはありませんから。その時は大人しく引き下がります」

とでも言うと思ったか馬鹿者めえっ！！

何い！？自爆だ！？？

ふっはははは！！死なば諸共じゃ！死ねいクソ爺い！！

ば……馬鹿なあああああああ！！

「そうしてもらえると助かります。……まだまだ頼りないですけど、精一杯、ホワイトさんのこと守りますから」

「ふふ、期待していますね」

こうして、お婆さんの捨て身の行動によりお爺さんは倒され、城下には平和が取り戻されたのでした。

そしてとある山奥。百二十年に一度しか咲かない、竹の花が咲き乱れていました。

まるで、あの世でようやく再び一緒になれた、年老いたある夫婦を祝福しているかのように……。

（Fin）

「ええ話や……グスッ」

「……お前、今絶対関係ないこと考えてただろ」

ノアの言葉に現実に戻されると、心底胡散臭そうな表情と目が合った。

この感動ストーリーを関係ないとは失礼な。

「おま、言いがかりはよせ。ちゃんと聞いてたぞ?」

「この短い付き合いでの判断だけど、瑠璃が今のやりとりで感動するとは思えない」

「チッ、バレたか。演出のための嘘泣きって発想はなかったのかよ」

「それはそれでどうかと思うけど……で、話は聞いてなかったんだな？」

「だから聞いてたって。白さんがパーティーメンバーに加わったんだろ？」

「なんだ、ちゃんと聞いてたんだ……そうゆうところに抜かりがないのはいいけど、なんだかなあ」

「あの……ルリは何故泣いているのですか？」

突然涙ぐんだ私に驚いたのか、白さんがおろおろしながら訊いてくる。

ふっ、なら話してしんぜよう。この感動の物語を！

「ああ、あるところに一組の老夫婦がいてな……」

「なんと……心を打たれる物語であろうか……」

「くっ……このような奴の話に涙するとは……」

「なんてことだ……これは世界に残る傑作だろう……」

「ああ……爺ちゃんと婆ちゃん最近会ってねえなあ……元気にしてるかなあ……」

「うう……グスッ……いいお話です……私感動しました!」

「どこが！！？なあ、今の話どこに感動要素あった！？なあ！？」

応接間に感動の嵐が（ノア以外に）吹き荒れた正午だった。

第十七話 空想は知識より重要である。知識には限界があるが、想像力があれば

元ネタの紹介

・北斗●拳

説明不要かもしれませんがね。

某世紀末な漫画の技です。

・七つの玉で呼び出した龍

こちらも説明不要かもしれませんがね。

某有名漫画です。龍玉（↑英訳）です。

r s k（らすく）さんからご指摘いただきました。

・約束された勝利の剣
エクスカリバー

「F a t e」というゲームが元ネタだそうで。

作者はこのゲームをヒロインの名前で認識していたo r z

・〴〵程度の能力

某有名弾幕ゲーの能力の名前の最後には、必ずこれが付きます。
私としたことが、書き忘れとは……。

r s k（らすく）さん、ありがとうございました！

第十八話 自信は過信に陥りやすい。その驕りが油断を生む。驕り「鼻からメロ

感想をくださったコーラルさん、アクセルモブターンさん、そして感想と元ネタをご指摘をくださったrsk（らすく）さん、ありがとうございました！

皆様の有難いお言葉を読んでいる時は、沢庵、柴漬け、胡瓜、茄子、蕪、梅干しなど種々雑多な漬物に囲まれて白米を食べている時程の至福です。ムツシャムツシャ。

（※至福の度合いがわかりにくいかもしれないが、作者は塩っぱい物が好物である。ちなみにマイフェイバリットは生タラコ）

突然ですが、作者は安●奈美恵さんの「H I D E & a m p, S E E K」という曲が好きです。

数少ない、好きなメジャー歌手の曲の一つです（基本作者はボ●ロしか聴きません。例外はあれど。最近のメジャーは何故恋愛曲ばかりなんだ。例外はあれど。作者はそもそも『恋愛』というジャンルが大層不得意なんだ。例外はあれど）。

小説の作業用BGMに某動画サイトで検索しようとしたところ、安

●さんの漢字を「室」しか覚えていないことに気が付きました。

これで好きと言っていいものかどうか、かなり微妙でした。まる。

第十八話 自信は過信に陥りやすい。その驕りが油断を生む。驕り「鼻からメロ

「一つ訊きたい、王・クリムゾン」
キング

私は目の前の男に問いかける。

ちなみに、ここは応接間と国王キンクリの自室を繋ぐ廊下の真ん中らへんからちよつと応接間寄りの位置にある曲がり角である。

あのあと、自分の部屋に戻ると言うノアに「便所お花を摘みに行ってくる」と言
って別れ、某メイド長の『時を操る程度の能力』を使って、自室に
戻るらしいキンクリを先回りして待ち伏せたのである。

ノアに言ったセリフの地の文章とふりがなの差が酷いことに関して
は、ノータッチでよろしく。

ちなみに、キンクリの横とゆうか斜め後ろには（多分ってゆうかも
う）宰相（で確定でいいよね？）のおっさんが、突然進行方向に現
れた私に対して、驚愕の表情を浮かべている。

キンクリの方はというと、最初こそ驚きはしたものの、予想外のこ
とをかましてくる私が興味深いのか、すぐにどこか面白そうな表
情に変わった。

……ああ、こいつ絶対面倒臭え。

キンクリの表情を見て、反射的にそう思う。

経験則からして、基本的に私に興味を持つ人間は、私にとって厄介な人間でしかない。

人間というものは、一度興味を持つと中々諦めてはくれないものだ。そして興味を持てば、もちろんその対象のことを知りたいと思うだろう。

その対象のことを知るために、個人差はあれどあらゆる手を尽くし、最終的には愚かにも「手に入りたい」とまで思うようになるのだ。

キンクリにも言ったが、私は干渉を受けることは嫌いなのである。

「手に入れ」られる気は毛等もないし、私を「手に入れ」ようと差し伸ばされる手を払い除けるのも、煩^{わずら}わしいことこの上ない。

登場の仕方を変えた方がよかったかな……とも思ったが後の祭り。後悔とは後で悔やむから後悔なのである。

まあ、形から入ることを好しとする私としては、最初から『普通に追いかける』って選択肢はないんだけどね！

例え私の中の『これ以上関わると面倒なことに巻き込まれる警報』がビンビンだったとしてもね！

「……何かね？」

応接間で別れたはずの私がどうやって先回りして待ち伏せしたのかということには突っ込まず、キンクリは「わっふるわっふる」とでも言わんばかりのオーラを隠さずに先を促す。

いや、普通の人の目には『どこか面白そうな含み笑いを浮かべている国王』が映るのだろうが、私にしてみりゃこんな奴「わっふる」オーラで充分だ。

するとあーら不思議。

何か企んでそうなニヒルな王様が、エロ展開待ちのネラーに早変わり。

はっはっは、ざまあw w w w w w w

「さっきの話で、あんたはノアに注意するべきことを一つ言わなかっただろう」

ノアと話す時とは違い、王族相手には大層尊大であろう態度で口を開く。

まあ、随分と今さらな描写dゲフンゲフン。

その場の状況や話す相手、内容によって口調が変わるのは、私の形から入りがる性質と、トリップ先で自分を利用しようとする可能性がある人間に対していかに自分の実像をボカすか試行錯誤を重ねた結果による、ある種の副作用のようなものだ。

極力相手に自分を見誤らせるよう演技に演技を重ねた結果、ちょっとやさつとではボロを出したり、創り上げた仮面が外れるようなことがない程にまでになった。

しかしその反動か、そういった演技がいない状況での口調や振る

舞いから、一貫性が欠けてしまったのだ。

今までに見せた複数の口調や振る舞いから、「一体どれが本当の君なんだ」と問われれば、私は答えられずに首を捻るだろう。

キンクリは「究極の演技」だとか何とか大層なことを言っていたが、その代償は『素の消失』という、結構でかいものになった。

思えば「利用されたくない」と足掻き始めた時から、『人間である大河内瑠璃』の崩壊は始まってしまったのかもしれない。

……とか、それっぽいことを言ってみる。

「さて、何のことであろう」

「もしそれを本気で言っているのだとしたら、一国王としてろくな危機管理能力を持ってないな」

私を試すつもりなのか含み笑いを浮かべて白を切るキンクリを、バツサリと斬り落とす。

貴様ごときが私を試せると思うなよ。

「貴様いい加減にしろ！陛下が咎めずにいるからといい気になりおって！神聖なる王族に対しそのような口を利くなど、卑しい身の程を知れ！」

「権威やら血統やらにしがみ付いて吠え立てるしか能がないなら、

ご機嫌取りに尻尾振る腐敗した貴族相手にでもふんぞり返ってろ。
ちやほやされて崇められたいなら、あんたにはそれがお似合いだ」

「貴様……！どこまでも舐めた真似を！」

このままだと血管切れて漫画みたいに血が噴き出すんじゃないかと思っ
思うぐらいにこめかみに青筋を浮き上がらせたおっさんは、キンクリ国王の前だ
というにも関わらず、腰に差してした護身用の剣を抜いて私に突
突き付けた。

おお、ちょ、この人座敷廊（違うけど）で刀（西洋剣だけど）抜
いたよ。しかも殿（国王だけど）の前で。

あつ、キンクリの野郎止める気ねえな！？

ニヨニヨしながら後ろに下がるな！

この場にいれば恐らく止めるであろうノアや白さんがいないため、
せいぜい「さて、お手並み拝見と行こうかwww」とか思ってるん
だろ。

ウゼエ。キンクリの株大暴落である。

ふんだ！あんたの見たがっている私の実力なんぞ、毛等も見せる気
はないわ！

よって、何が起こったのかわからないくらい即効で終わらせる。

そんなわけで再び『時を操る程度の能力』を使用。

そしておっさんの剣を奪う。

はい、終わり。

そこ、手抜きとか言うんじゃない。

「あらあら、こんな剣で私を斬ろうとするなんて……随分舐められたものね」

こんな剣つつつても、見た感じ一級品だな。

それでも私を倒すにはこと足りんから、まあ間違ったことは言っていない。

刃に指を這わせながら意趣返しのもりで似たようなセリフを吐いてやると、キンクリとおっさんは私の手に剣があることに目を見張った。

「……!!?!? いつの間に……!!?!?」

「たった今に決まってんだろ、他にいつやるんだよ。口でも力付くでも止められない癖に止めようとすんな、鬱陶しい。私やキンクリそっちに話があんだよ。すっこんでろ」

てゆうかこのおっさん、さっきからセリフが月並み以下でちっとも面白味がない。

オリジナリティ出せオリジナリティ。

したらもう少しはまともに取り合ってやるというのに。

「な、き、貴様……！」

「しつけえよ。シレンシオ」

杖がなかったので、代わりに立てた人差し指をそれっぽく向けて呪文を唱える。

するとおっさんはテレビの音声のみを消したように、口は動いたまま声のみが消え、そのことに驚愕して慌てて喉を押さえる。

やれやれ、これでしばらくは静かになるだろ。

「さて、このアホのせいで余計な時間食ったから簡潔に言う。あんた、毒殺未遂犯のことに關して、ノアに何も言わなかったろ？」

横でおっさんが「アホ!?」という形に口を動かしたが、魔法がかかっているため声にはならなかった。

キンクリは私の言ったことに対して、無言で反応する。

無言は肯定と取って話を続けるぞ。

「一々あんたの反応見るのも面倒だから、一気に言うぞ。まずな、毒殺未遂が起こった状況からおかしいんだよ。ここは王宮だし、王族やら貴族やらに暗殺を企む輩がいること自体はおかしくない。王女である白さんが狙われたとして、全く不思議はないよ。けどな、あの場にはノアもいたんだ」

あの場にいたのは、白さん、ノア、森さん、そして私。

紅茶を飲んでいたのは、森さん以外の三人。

「毒が入っていたのはシュガーポット。仮に白さんを毒殺の対象に狙って、砂糖に毒を盛ったとする。毒殺犯が白さんは紅茶に砂糖を入れる人だと知っていたとしてもおかしくない。でもな、私はともかくノアが紅茶に砂糖を入れて飲むかどうかは知りようがない。なんてったって、ここに来て二日目に寝込んでしまったんだから」

ちなみに、ノアはあの時「ホーニツヒって誰だよ!」と言う叫びと共に目を覚ました。

どんな夢見てたんだよ。

「それってつまり、白さんだけじゃなくノアも毒入りの砂糖を使って死ぬ可能性があるってことだよな? 毒殺なんて企むような輩が、それを考えないはずがない。で、言わずもがなノアは救世主だ。せっかく邪神の復活を止めて世界を救ってくれる救世主様が現れたのに、そいつが死んでしまったらどうする? 困るだろ? だがしかし、毒殺犯は救世主も殺しかねない方法で毒殺を実行した……それってつまり、救世主が死んでも構わなかったってことになるよな?」

あの場に私がいたことが、毒殺犯にとって最大の誤算だったろうな。服毒程度じゃ死なん上、シュガーポット粉々にして二人の服毒を阻止したわけだし。

「狙いは最初から救世主……いや、あの場で紅茶を飲んでいた全員か。王族、もしくは救世主が毒殺なんてされればどうなる? そう、重要人物の損失により、邪神再封印の計画がストップされる。つまり毒殺犯は邪神の再封印をやめさせたい人物。ついでに言うと、い

っそ復活してしまえと思っている」

そこまで一気に言って、私は一呼吸する。

キンクリの表情を伺うと、今までの人を食ったような含み笑いはすっかりなりを潜め、ただただ無表情だけを浮かべている。

自分を品定めするようなその笑みを奪ってやったことに、私は満足気に唇を歪める。

「邪神崇拝者いるんじゃないの？この国」

第十八話 自信は過信に陥りやすい。その驕りが油断を生む。驕り「鼻からメロ

主人公の口調がコロコロ変わるのには理由があります、と書いてから苦節十六話。

ようやく理由が書けました。

とゆうか、こんな推理展開しか書けない作者でごめんなさい……。

元ネタの紹介

- ・時を操る程度の能力

某弾幕ゲーの某メイド長の能力。

時を止めたり遅めたり早めたりできるそうです。

- ・わっふるわっふる

某匿名掲示板などでエロ系の描写の続きを期待、要求する用語として使われる言葉。

- ・シレンシオ

ハリー・ポッターシリーズに出て来る、相手を黙らせる……とゆうか、声を出させなくする呪文。

本当は呪文の詠唱を止めたりするのに使うのに……orz

第十九話 的確な弾丸よりも鋭い弁舌のほうが強い。

作者がネ●ロや四●谷

さて、地道に執筆活動が続けていますが、作者は八日から学校が始まります。

となりますと、更新の頻度が少なからず落ちることが予想されます。毎度更新を楽しみにされている方、真に申し訳ありません。

ともあれ、活動の方は変わらず続けさせていただきますので、暇潰しの合間にでも覗いていただければ幸いです。

そしてお気に入り件数がついに500件に！
皆様ありがとうございます！

※追記

マリナさんからご指摘いただきました。

作中に水の科学式の表記があるのですが、パソコンの機種によってはきちんと表記されないかもしれません。

「H?O」の表記が「エイチツーオー」と読めない方、「H2O」と表記されています。

マリナさん、ご指摘ありがとうございました。

第十九話 的確な弾丸よりも鋭い弁舌のほうが強い。

作者がネ●ロや四●谷

「邪神崇拝者いるんじゃないの？この国」

私の言葉に、キンクリは何も言わない。

無表情の瞳に薄っすら怒りのような見えるが、それは私に対する怒りか、それともそれらに対する怒りか。

「でもそれだけじゃ、ノアに言わなかった理由にはならんよな。邪神の復活を願う頭のイカレた輩がいるからついでに倒してくれ、つて言や済む話なのに、あんたはあえてその事実を伏せた」

今まで飛んできた世界にも、魔王やら邪神やら破壊神を崇拝している組織はいたし、それらの討伐を頼まれたことも数多くある。

なら、この国王もそうしてよかったはずだ。

「一つ思い当たることがあるんだよな。一つの組織を潰すとなると、その組織が何を考えて、何をして、何をしようとしていたのか、知ることになるんだよ。余程の馬鹿でない限りはな」

そんなことよりお腹が空いてきました。

誰か私にNa（ナトリウム）をくれないか（by作者）。

「あの正義感溢れる救世主^{ノア}のことだ。何も調べずに立ち去るような真似はせんだろ。……つまりさ、邪神崇拜……今は便宜上邪教とでも言おうか。邪教と王家って、何かしら裏で繋がってるんじゃない？」

ナトリウムだけじゃバランス悪いから、ついでにK（カリウム）もおくれ（b y 作者）。

「邪教信者の貴族になんらかの形で支援受けてるとか、邪教の祭典^{それ}に王様として見逃せない記述があるとか。大々的に邪教を潰せない理由があるんじゃないかなーって。で、それをノアには知られたくない、と。前者の理由なんて最悪だもんね。王様が賄賂を認めてるってことだし」

あとH？O（水）があると嬉しい。

NaとKとH？O（漬物と米とお茶）があれば生きて行ける気がする（b y 作者）。

「……何を根拠に」

キンクリが這うような低い声と共に、視線だけで人を殺せそうな眼光を向けてくる。

どうやらビンゴのようだ。

え？なんか煩惱が混じってた？ハハハナンノコトヤーラ。

「根拠？七割は経験から推測、一割は経験からの勘。残り二割は内

緒だ。私にも独自の情報入手ルートがあるんでね」

実は、ノア昏睡状態につき城の中を探索中な時に、『地下の閉鎖された秘密の書庫』的ないかにもな場所を見付け、そこで邪神崇拜に関する書籍をいくつも見付けたのである。

えっなんで邪神再封印を依頼するような王家にこんな本があんの、と、私はその場に置かれていた邪神関係の本を全て読み漁った。

そして、今回の事件と国王の言動が、私に邪教と王家の關係に確信を持たせたというわけだ。

まあ、教えるつもりは一ミリもありはしないが。

「……ま、私はそんなことどうでもいいんだ。この国が腐ってようが何しようがね。私は警告をするためにここで待ってたんだ」

私の言葉に、キンクリが無言で眉を跳ね上げる。

「どんなに邪教徒から支援受けてようが、祭典に無視できないような内容が書かれていようが、邪神に復活されちゃ困るのは事実なんだろう？だから再封印終わった後、大ブーイング物の邪教徒には、邪神再封印なんて勝手なことやったのは身元も知れぬ異邦人だって言っ、て、ノアに面倒全部押し付けて、そいつら納得させるために冤罪着せて逆賊として処刑とか、」

そこまで言って一息つくとおっさんから取り上げた剣を軽い動作で、とん、と床に突き立てる。

再度深く息を吸い、相手がしつかり危機感を抱く程度^{いだ}の殺気を込め

た視線で、目の前の男を睨み付ける。

ちなみに殺気を込められるだけ込めてしまうと、比喻ではなく視線で人が殺せてしまうため、ちゃんと調整する。

「するつもりなら、お前らが一体何を敵に回したのか思い知らせてやる」

剣を相手の喉下に突き付けるような安い脅しはしない。

殺気を向けられた国王は、目の前に佇む女が、武器など使わずとも自分を葬り去ることなど容易いのだと、理解しているだろう。

「わざわざ封印し直した邪神を解放して、邪教と王家の関係と例の祭典とやらを世界中にバラ撒いてやんよ。できないなんて思うなよ。なんなら祭典の内容を改竄かいざんしてから撒いてやろうか。『邪神様は王家の娘を生贄に求めている』とかな」

正直世界中ってのはハッキリだ。

さすがにそこまでしている暇はないだろう。

だが国王は自分の娘を危険に晒すような発言に気を取られ、幸いにも気付いたようすはなかった。

「ただの脅しだと思うか？こちらには自力で帰る手段がないから、そんなことをすれば自分の身も滅ぼすことになる。ならやるはずがないって？舐めんなよ」

ぐっ、と睨むために細めていた目を見開き、相手を見下すように顎を上げる。

締めセリフを言うべく、救世主補佐は口を開いた。

「神だろうが世界を隔てる壁だろうが、ノアを害する物は全て俺が狩る」

『エフェクト』などではなく、ドス黒いオーラと化した殺気が一帯の空間に満ちる。

それでも、目の前の男は圧されながらも耐えていた。

冷や汗を浮かべ、蒼白な顔色を浮かべながらも、気を失うことも逃げ出すこともしなかった。

もちろん、それは調節しているからなのだが、脇にいる宰相はどうに白目を向いて気絶しているため、この男も伊達に国王をやっていないということだろう。

「……………」

潮時か。

私は場を支配していた殺気を解く。

「話は以上だよ。ま、私の話を取り越し苦労だといいいんだけどね」

キンクリの返事も待たず、私はさっさと踵を返す。

さすがにちよつとやり過ぎた。

これ以上絡まれても面倒だしな。

ああ。そうだ、これだけは言っとなかないとな。

「言ったでしょう？ 貴方じゃ、私は扱えないと」

不敵な笑みとセツトで捨てゼリフはしっかり残す。

形から入りたがるのが私ですから。

「はい。そんなわけで、シリアストーンは以上で終了にございます。
現在、我々は王宮の地下へ来ております」

「……誰に向かって話してるんだ？」

ノアが怪訝そうに視線を向けてくるが、私がどうゆう人間か理解したのか、その表情にはやや諦めが混ざっている。

「レポーターは私、大河内ラピスズリと、森本ノイでお送りします。見てください！地上の煌びやかな内装とは打って変わったシンブルな黒い石壁！私はこれを見た瞬間、思わずラ●ユタを連想致しました」

「何その名前！俺ほとんど変わってないか！？とゆうか瑠璃の名前ゴツいなおい！」

「果たして、この先で我々を待ち受けるものは！？そして、この先に伝説の剣はあるのでしょうか！？」

「いや、王様があるって言って連れて来てるんだからそりゃあるだろ！？それに待ち受けるも何も伝説の剣って言ってるわけだし！」

レポートだけなのなんだ。ちゃんとした説明をしよう。

キンクリを散々脅してからおよそ一時間後。

ノアが使う予定の伝説（笑）の剣を取りに、キンクリに連れられてノアと共に王宮の地下に来ました。以上。

本当は国王キンクリと救世主ノアしか入っちゃいけない、結界を張った神聖な領域らしいが、キンクリを一睨みして同行を許可させた。

ふん。随分と安い神聖領域だな。神聖つつーなら死守しろよ。

ちなみに、当のキンクリは固い表情で私達の前を歩いている。

自分を脅した人間に背を向けるなんて国王にあるまじき行為だと思うが、ノアに対して下手な真似をしなければ私から手は出さないということを理解しているのだろう。

それでも得体の知れない相手を視線から外すのは充分怖いだろうに。国王としての自負か、それとも己のプライドか。

まあ、どうだっていいけども。

それにしても、また中二めいたセリフを吐いてしまったんだぜ。

こんな現代で言えば「頭沸いてんの？」と思われてしまうようなセリフが平気で言えるのは、異世界トリップの数少ないメリットの一つだと思うんだ。うん。

中二とゆうのは一つのジャンルなんだ。エンターテイメントなんだ！

皆さんも異世界トリップした際には試してみてください。

『一度は言ってみたい中二なセリフ』が堂々と言えるのは癖になるぞ。

ただ、これでノアが女で私が男だったら完璧だったのにな。惜しいことをした。

そんなことを考えていると、私達は通路の突き当たりまでやって来た。

一見、行き止まりに見えるが、そうじゃないんだろうね。

「この先に、五百年前見事魔王を滅ぼした勇者が使用した、精霊を宿すと言う伝説の剣が保管されている」

ちなみに今キンクリが言ったように、この世界には救世主の他にも勇者とかいたらしい。

なんでも、約五百年前に強大過ぎる程強大な魔力を持った者が現れ、魔物を率いて世界征服？とゆうか国家滅亡を企んだらしく、それを勇者が伝説の剣片手にはっ倒しに行ったらしい。

勇者は無事魔王を倒し、そして伝説へ……。

なんともテンプレな話である。

変わったところと言えば、魔王がただ魔力が高いだけのただの人間だってところだろうか。

てゆうか忙しいな、この世界。

さて、それはともかく。今は剣だ、剣。

「あの、ここって行き止まりですよね？」

「この場所は、歴代の王に伝わる特殊な魔法具によってのみ、開かれるのだ」

まあ、そんなところだろうと思いました。

てゆうか、いよいよ持って●ピュタだろこれ。

壁に魔法具らしき青い石がはめ込まれてるのが見えるけど、どう見ても飛●石です。本当に（ry

私がそんなことを考えているとは露知らず、ノアが緊張気味に声をかけてきた。

「勇者が使った伝説の剣か……一体どんな物なんだろう」

「エエ〜〜クスカァ〜リバァ〜〜」

「やめろよ！声真似までするなよ！地味に似てるんだよ！想像しただろ！」

「精霊が宿ってると聞いて」

「宿ってるってゆうかそのものだろ！俺伝説の剣があんな得体の知れない見た目してたら全力で引くわ！」

得体の知れないとは失礼な。

結構人気なんだぞエクスカリバー。

そんなやり取りをしていると、キンクリがコホンと一つ咳払いをした。

「……では、この空間を開放するが……準備は良いか、救世主ノアよ」

「あっ、はい！」

慌てたようにノアが返事をする、キンクリは頷いて左手の甲を飛
●石へと向けた。

代々伝わる魔法具とやらはその指輪ですか。よくあるよくある。

どうやら開放するのに数秒かかるようなので、私は『二次元力』か
らどれと言うわけでもなく透視能力を引っ張り出してきて、壁の向
こうを一足先に見てみることにした。

ちなみに、私にかかれれば魔力で空間が捻じ曲がっていようが、ちゃ
んと見たいもんが見れる。

え？フライング？別に私は飛べるけど、それが何か？

……おお、見えてきた見えてきた。

そこはどこぞの森のように木々が生い茂っており、青々とした緑は
紛^{まが}い物などではなく本物のそれである。

やはり魔力で空間が捻じ曲げられているのか、地下であるにも関わ
らず天井からはさんさんと木漏れ日が差し込み、どこか非現実的な
空間を彩る。

そして中央には石造りの台座のようなものがあり、その上には選ば
れし者のみが抜くことができると言わんばかりに輝く剣。^{ツルギ}

こっ……これは――……!!

「ゼ●^{ゼルデン}ダの伝説!？」

「ゼ●^{ゼルデン}ダの伝説!!？」

「イエス!ゼ●^{ゼルデン}ダの伝説!!」

「あっ……ゼ●^{ゼルデン}ダの伝説!!」

なんとゆうことだ。

想像を絶する光景に思わず声を上げると、一足遅れてその光景を目にしたノアも、木霊するように私と同じ言葉を繰り返す。

言わずともわかるだろう。そう、私達の眼前に現れたのは――

――どこのマ●ターソードだよと言いたくなるような姿で鎮座する、伝説の剣だった。

瑠璃ちゃんが『一人称が「俺」モード』になる時は、憎悪を感じるレベルで本気で怒っている時か、特定の状況で精神が不安定になっている時だと思っています。

なんとゆう厨設定（＾p＾）

『擬似多重人格』とか自分で決めておきながら、実は上手い設定考えてなかったんだorz

瑠璃ちゃんがキンクリにした警告は、あくまで警告です。

キンクリがノアにあんなことをするのが確実だったわけではなく、あくまで瑠璃ちゃんの張った予防線です。

果たして、キンクリの真意はいかに。

元ネタの紹介

・そして伝説へ

ド●クエ3のサブタイトルが元ネタです。

・エクスカリバー

こちらは以前の『約束された（ry』ではなく、某魂食い（英訳）のキャラクターのことです。

エクスカリバーさんです。

・マ●ターソード

ゼ●ダの伝説に出てくる伝説の勇者が使用していた退魔の剣。

第二十話 私の耳は貝の殻から海の響きを懐かしむ。……あれ、でも貝殻から海

「シリアスが多過ぎる気がする」

ある日、作者はこう思い立った。

それは作者が手持ちのライトノベル（生●会の一存シリーズ）を読んだあと、某動画サイトで、グラフィックとBGMが良くて気になってプレイ動画を見てみたらストーリーがびっくりする程電波&説教だらけだったゲーム（これは名前を伏せます）のプレイ動画を見た時だった。

元々この小説は前者のライトノベルのようなテンポのいいコメディを書きたくて始めた物のはず。

いくら「中二なことを平然と口にする主人公」だとしても、いささかいらん説教（笑）が多いのではないか。

このままでは読者の方の期待に関係なく話を進めてしまう。これでは作者オ●ニーではないか。

とかなんとか考えて悶々としていたら、タイミング良く（？）あきさんからごもつともなご指摘をいただきました。

あきさん、ご指摘ありがとうございます。

そんなわけでシリアスと説教（笑）を必要最低限目指して今後はカ

ットします。

説教だらけで見ててつらくなる展開は今後は避けたいと思います。

第二十話 私の耳は貝の殻から海の響きを懐かしむ。……あれ、でも貝殻から海

目の前の光景に思わず言葉足らずになって、ノアと「ゼ●^{ゼルデン}ダの伝説！」を連呼しまくっていると、キンクリがコホンと咳払いをした。

「救世主ノアよ、その剣^{ウナギ}を抜くのだ。精霊と精神^{こころ}を交^まわし、その力を手にすることができるのであれば、そなたはその剣^{こころ}を抜くことができるだろう」

精神^{こころ}を“躲^{かわ}す”だったりしてな。

精霊の精神^{こころ}を某弾幕ゲーのごとく、ひたすら躲し続けるノア。

精霊「どうして避けるんですか！」

ノア「坊やだからさ！」

……なんとゆう言葉のドッジボールWWW

ノアはこの光景の神々しさ（まあ、私にとっちゃ大したことないが）に、ゴクリ、と唾を飲み込み、ゆっくりと伝説^{マスターソード}の剣に近付いて行った。

そして、慎重に、実にスローモーに剣^{ウナギ}に手を伸ばす。

さすがにこの状況で茶化すのは可哀相だからな。
珍しく黙って見てやる。

いや、やっぱ茶化そう（1. 2秒）

私は気付かれないように、ノアに近付く。

ゆっくりと伸ばされた手が、まさに剣に触れようとした。

「ドゥン（エラー音）」

「ギャ――――！！！！」

ノアが絶叫しながら飛び上がる。

よっぽど集中してたんだな。

「ばばばば、ばっ、ちょ、おまっ」

「あばばば？」

「違う！！」

「はいはい、びっくりしたのね。悪かったよ。さっさと拔きな」

「誰のせいだよ……」

ぶつくさ文句を言いながらも、今ので緊張が解けたのか、今度はな
んの躊躇いもなく剣の柄を^{つか}むんと掴む。

「……………！」

その途端、ノアはびくりと身を震わせ、それっきり動かなくなった。

お？

「ノアの中で何かが弾けた……」

耳元で囁いてみたが、結果は反応なし。

どうやら精霊の精神世界みたいなところに行ったようだ。

うむ。よろしいよろしい。

……だが、そうなるとちとつまらんなあ。

別にやろうと思えば相手の精神世界に入り込むことなんて造作もな
いことだが、ノアにも多少は『異世界の救世主』を楽しませてやら
ねば。

ただちょっと待ち時間が退屈でなのある。

精霊との対談がどれぐらいかかるのかわからないし。

魔法具の精霊一人(?) 説き伏せるのに、丸三日かかった経験もあるしなあ……。

キンクリと話す気は毛等もないし。

ノアは重要な突っ込み要因であった。

そんなわけで暇潰し開始。

ショートコント、『こんな精霊は嫌だ』。

精「……誰だお前は!」

ノ「私は野生の少女の見方、spaid(ry……あれ、このネタすでにやった気がする」

精「ネタ被りは駄目だぞ。で、なんの用?」

ノ「君が……伝説の剣に宿る精霊か?」

精「伝説? 何それ、今時伝説はなくね? w w w テラワロス w w w w」

ノ「俗っぽ! 何この精霊超俗っぽ!」

精「精霊が俗っぽくて何が悪い！俺は他人のイメージになんか惑わされねえ！」

ノ「一見いいこと言ってるように聞えるけど！」

精「で、あんたもここに來たってことは、どうせ俺の力が必要になったんだろ？」

ノ「あ、ああ。力を貸してくれるか？」

精「どちらかというと大反対だな」

ノ「なんでだよ！世界の危機なんだぞ！？」

精「働いたら負けかなと思っている」

ノ「お前はニートか！！」

精「俺は……二度と外には出ない……！あの苦しみと屈辱にまみれた日々に戻るくらいなら、ここで錆び果ててやる……！」

ノ「な……ここまで言うこいつの過去に一体何が……」

精「『教師「はい、二人一組になってー」』」

ノ「ボッチか！！てゆうか鉤括弧被せ過ぎだろ！」
かきかっこ

精「俺は……もう二度と戻りたくない！一人寂しく便所で飯を食う……あの日々には！……どうせ……俺の周りには、いつも誰もい

ない……！」

ノ「……いるだろ」

精「いるわけないだろ！どこにいるってんだよ！」

ノ「俺がいる」

精「！」

ノ「俺が側にいる。二人組み組めって言われたら、俺がお前と組んでやる。それなら、もうお前は一人じゃないだろ？」

精「お前……」

ノ「だから行こう。俺の周りの人達は、誰もお前を仲間はずれにしないさ」

精「………べつ、別にあんたを信用したわけじゃないんだからねっ！」

ノ「それでもいいさ。お前が救われるんならな」

精「………」

ノ「ほら……来いよ」

精「……うつ……うわあああああん！！寂しかった！寂しかったよお！」

ノ「よしよし、もう大丈夫だ……お前は俺が守ってやる」

精「……うう……グスッ……約束、だよ？破っちゃ、やだよ……？」

ノ「わかってるさ。だから、安心しろ」

精「……うん……ありがとう」

ノ「You're welcome」

「……ええ話や……」

「俺は瑠璃の感動のツボが全くわからないよ！！」

「あたし、そんなんじゃないもん！！」

私が感動に打ち震えていると、いつの間にか精霊との交信を終えたらしいノアの突っ込みと、可愛らしいソプラノボイスに抗議を喰らった。

むう、感動の余韻をブチ壊しやがって。

「なんだよー、人の感動にケチつけおってからに」

「なんで今この話を感動って言えるんだよ！なんだこの話！すでにシ

「オートコントですらないし！」

「違うもん！あたしそんなじゃないもん！ずっと眠ってただけで、べっ別に友達いないわけじゃ……」

「凶星かよ。てゆうか、この娘が剣の精霊か。」

ノアの横には、フリフリヒラヒラな白いワンピースを着た、十二歳ぐらいの青いロングヘアーの少女が浮いていた。ちなみに、体の向こう側が透けて見える。

私は浮いてる娘っ子から、ノアへと視線を移す。

「で？ノアよ。言葉のモツヂボールは終わったのか？」

「ドッジボールですらないとか！ちゃんと会話したよ！？言葉のキヤッチボールしたよ！？」

「……見たところ、ちゃんと剣は抜けてるな。成功したのか、何よりだ」

「あ、ああ。正直途中で瑠璃に対する突っ込みで、それどころじゃなくなっただけど……」

「で、この娘が吾郎か」

「モツヂボールから離れろ！！マリンをあんな禍々しい物と一緒にすんな！見てわかるだろ、精霊だ精霊！！」

突っ込みお疲れ様なノアの横で、精霊の娘っ子が実に複雑な表情で

「ゴロウって何……」と呟いている。

とゆうか、この娘っ子はマリンと言うのか。
髪青いしな。マリンブルーってか？

「とりあえず、その精霊の娘っ子はノアに力を貸してくれるってことでもいいんだよね？」

「娘っ子じゃないもん！マリンだもん！」

むー、と、頬を膨らませる娘っ子。

なんか可愛い。頬っぺた両手で挟んで「ぷしゅー」ってやりたい。

「わかったよ、海の子」

「漁村の子供みたいなあだ名だな……」

「で？力を貸してくれんのか、否か」

ノアを無視して再度そう尋ねる。

あだ名の捻りがなくなってきた？気のせいだ。

「当たり前じゃん！あたしはノアとケーヤクしたんだもん。ずっとノアと一緒にいるの！」

海の子は両手を腰に当て、得意気のない胸を張る。

お姉さんは……貧乳もちゃんと需要はあると思うよ？

「お前……今すごく失礼なこと考えなかったか？」

「ソナナコトナイヨ」

「何そのめっちゃ不自然な返答」

「そんなことより、私は他に言いたいことがある」

「え？何だ？」

私の言葉が予想外だったのか、ノアは目を瞬たせて首を傾げる。

「……仲間が増えたな」

肩の力を抜いた、極自然体な笑みを浮かべてそう口にする。

ノアはそんな私を見て驚いた顔をしたが、やがて、私と同じように笑みを浮かべた。

「そうだな……」

「やったねノアちゃん！」

「やめろよ！！お前それが言いたかったただけだろ！！」

そんなこんなあって、海の子は剣の中に戻って行った。

なんでも、外界に体现化するのは大層疲れるらしい。

だろうなー。でなきゃわざわざ精神世界的なところに招く必要ないし。

消え際に、ノアにわからないように牽制するような視線（のつもりなんだろうな……全く迫力なかったけど）で睨まれたのだが、これは早くもフラグが立ったと考えていいんだろうな？

「……無事剣^{（しるし）}を抜く事ができたようだな。では、地上に戻るとしよう」

そう言って、キンクリは踵を返す。

こいつはもう私達のやり取りに対して、完璧スルーする方針で決定したらしい。

それにはあえて反応せず、私は堂々と、ノアはなんとも微妙な顔で、封印の間（仮）を後にする。

私達が地下の石の床を踏みしめると、封印の間（仮）は再び石の壁の中に閉ざされた。

やれやれ、これで今日のイベントは全部終了だな。

「時にノアよ」

「今度は何……」

ややうんざりした声で振り返るノア。

……うん。これだけのことをされながら、ちゃんと返事をしてくれる君は偉いよ。

だが容赦しないぞ。私は言いたい事は全部言うからな！

「そんな装備で大丈夫か？」

元ネタとはかけ離れた、ニヤニヤとえげつない笑みを浮かべて言うてみた。

ノアはそんな私を見て、（　　）。とゆう表情でしばらく固まった。

まあ、何を言っただとは思っただろうな。

現段階じゃ、海の子が宿ったその剣が“一番いい装備”なわけだ。

「……………一番いいのを頼む」

ノアはたっぷりの沈黙を挟んだ末、死亡フラグだけは回避したいと思ったのか、溜息混じりにそんな言葉を吐き出した。

「……………と、言えとでも……………」

「おっしや任せろ」

「え、ちょ、マジでできるのか！？いや、待て、今のはただの振りに対する返答とゆうか……………うわあマジだ！『一番いい装備』だこれ！じゃなくて！いいのかよこれ！この世界の伝説の装備の面目丸潰れだろ！可哀相なこととしてやるなよ！」

「ちなみに、ちゃんと脱衣プレイ仕様だ」

「いらねえ———！！！！」

第二十話 私の耳は貝の殻から海の響きを懐かしむ。……あれ、でも貝殻から海

今回はちよつとネタを詰め込み過ぎたような。

精霊の娘さんの名前は、まんまマリンブルーからです。

元ネタの紹介

・坊やだからさ

ガ●ダムの赤い彗星の人のセリフ。

・言葉のドッジボール

「言葉のキャッチボール」の派生語。

・あばばばばば

芥川龍之介の短編「あばばば」に登場するセリフ。

雑貨屋の女主人が赤さんをあやしている時のセリフです。

これだけ見るとなんてホラーなセリフ……へへ；

・○○の中で何かが弾けた：

ペ●ソナ3で、コミュが発生するかコミュレベルが上がった時に、主人公の頭の中に流れるセリフ（？）

○○には主人公の名前が入ります。

・どちらかと言うと大反対だな

ブロント語のひとつ。

ブロント語とは、2ちゃんねるのネットゲ実況板等に現れた名無し、通称「ブロント（ブロントさん）」が使用したと言われる、独特の

文章構成で会話するネットスラングの一種である。

（『ニコニコ大百科』参照）

・働いたら負けかなと思っている

某ニュース番組で24歳ニートの男性の発言より。

・モツヂボール

某日和なギャグマンガに出てくるスポーツ（?）。

ここでは説明しきれないので、知りたい人は各自で調べることをおすすめする。

・吾郎

モツヂボールで使用するボール（?）の一種。
人面球で全く弾まない。

・やったねたえちゃん！

「コ●ちゃん」という漫画に出てくるセリフ。
みんなのトラウマ。

・そんな装備で大丈夫か？

・一番いいのを頼む。

某ビニ傘天使と某書記官のやり取り。
有名ですよね。

第二十一話 神々は無気力な願いには耳を傾けない。 だから私は気力全開で神

良い点悪い点共にご指摘くださったたぬきさん、感想をくださった地海月さん、ありがとうございます！

感想やご指摘をいただくのはどれもとても有難いですが、ストレー
トに「笑った」「続きが楽しみ」と書かれているのが、実は一番嬉
しいかもしれませんね。
とりあえずのた打ち回ろう。ビタンビタン。

そして、シリアスを入れるべき……ですか……（。▽。；）
前回あんな宣言をしたあとだけでも……せ、説教じみなければ書
いても大丈夫だろうか（汗

第二十一話 神々は無気力な願いには耳を傾けない。

だから私は気力全開で神

突然目の前で光が弾け、私は思わず片手で目を覆った。

なんだ。一体何が起こった？

徐々に目を焼いていた光が和らぎ、私はそっと手の陰から様子を窺う。

指の隙間から見えたのは、ふわふわと胞子のような光を纏った、純白の少年の姿だった。

295

「やっと会えました……」

少年は、ほわっと効果音が付きそうな笑顔を浮かべる。

……………え、誰？

「……………え、誰？」

「ええええええ、酷いですよ！僕です！」

いや、僕ですとか言われても。マジで誰だお前。

思わず地の文とセリフが重複しちゃったじゃないか。

私は目の前の少年に全く心当たりがなかった。

そして少年は、驚くべき事実を口にする。

「僕はあなたに救^{たす}けられた、シュガーポットの精霊です」

……………。

「……………ナンダッテー!？」

驚愕の事実! 少年は私が粉々にしたシュガーポットの精だった! ?

「あの日、まだ自我すら曖昧だった僕は、突然何者かに吹き飛ばされ、粉々に砕け散りました。このままではシュガーポットとしての使命を果たせず、破棄されてしまうのだろうと覚悟した時……僕は暖かな力に包まれました。すると見る間に砕けた体は元に戻り、曖昧だった自我すらその強力な力によって確固たるものへと変化したのです」

.....。

.....。

「.....oh.....」

あまりに突拍子のない出来事に、脳内のキャパシティがオーバーキルを喰らった。

とゆうか、君を粉々にした何者かは私なんですけど。

「僕はあなたに恩返しをしたいんです……僕を救ってくれた、他でもないあなたに」

シュガーポットの精は、うるうるした瞳で私を見つめる。

私は混乱している。

今だかつてない程混乱している。

だが混乱するばかりではどうにもならない。

私は眉間の皺をぐりぐりと押し伸ばしながら、口を開く。

「……恩返しって、具体的には？」

「はい！あなたはこれから自分の紅茶に砂糖を入れる必要がありますま

せん！僕が自動的にあなたの紅茶に砂糖を入れます！」

「何それ超微妙」

「えええええええ！？」

えええええええ、じゃねえよ！！

お前本当にそれが恩返しになると思ってたのかよ！

「てゆうか、私どっちゃかって言うとかムシロ派だし」

私がそう言うと、シュガーポットの精は「がーん！！」と言ってうな垂れた。

今自分で「がーん！」って言ったよな？

こいつ今自分で「がーん！」って言ったよな？

「……………そ……………んな……………」

シュガーポットの精は、うつむいたまま何やらぶつぶつと呟きだした。

おや？

「……………信じてたのに……………信じてたのに……………ガムシロップなんかに浮気だなんてえええええっ！！！」

絶叫するシュガーポットの精。

いや、浮気とか！元からガムシロの方が好きだったし！

とゆうか信じる要素が今までのどこにあった！？

「あなたを殺してっ……………僕も死ぬ！！！」

ヤンデレ発言キタ—————！！

そして『ゴゴゴゴゴゴ』とゆう効果音と共に、頭上に光のような輝く魔力を収縮させるシュガーポットの精。

超☆展☆開☆

「全くわけがわからないよ……」

本当にわけがわからないよ……何故私はこんなことに巻き込まれて
いるんだ。

「だが……私に刃を向けると言うのであれば、容赦はしない」

そして『ギョオオオオ』とゆう効果音と共に、右手に闇のような
禍々しい魔力を凝縮させる私。

「来い、精霊……貴様の信念、貫いてみよ!!」

「信じていた人に裏切られた気持ち……あなたにわかるか!!」

俺達の戦いは、まだ始まったばかり!

「……………とゆう夢を見たんだ」

「夢かよ! てか何その夢!」

横から鋭い突っ込みが入られる。

「こんな夢を見た要因と思われるのは、おそらくシュガーポットを粉々にした時、心の中で『シュガーポット君』という呼び方をしていたせいで、無意識に脳内で擬人化した姿を創り上げていたせいだろうな」

「知らないよ！君が脳内でシュガーポットをなんて呼んでいたかなんて！」

ちなみに、今私がいるところは、提供された自分の部屋ではない。

ならノアの部屋かと言うとそうゆうわけでもなく、昨日の応接間でも地下でもなければ廊下でもない。

そもそもここは城の中ですらなく、ついでに言えば城ではないどころか――

さらには、今私に突っ込みを入れているのもノアではないわけで。

「それはともかく……………会いたかったよジョー————ン！！」

言いながら、感極まって私は目の前のシルエットにタックルをかます。

「ちよ、危なっ！いきなり飛びつかないでよ！」

私の山をも貫くタックルを受け止めるという驚愕の耐久性を見せつけながら、ジョンが慌てたように言う。

「あ、ごめん」

「咄嗟に固められたからよかったようなものの……危うく突き抜けるところだったじゃない」

突き抜けるんだ、この体。

密着して間近で見たからわかったが、ジョンの体は無数のアルファベットのような文字が固まってできていた。

ジョンは情報体系の神なのか？

確かにこの体は注意しないと突き抜けそうだ。

「……それで、一体どうしたの？いくら『世界を渡る能力』を渡したとはいえ、神ワールド的などころには来れないようにしたはずだけど」

オリハルコンの塊すら砕く私の抱擁をもともせず、あやすように私の背中をポンポンと叩くジョン。

やべえ、惚れそうだぜ。

「ああ、あのね？今日ノアに……こっちの救世主にね？えーと………なんやかんやあって『そんな装備で大丈夫か？』って訊いたの」

「大体予想はつくけど何があった」

「そしたら、ふと『そーいやエ●シャダイ買ったかったなあ……発売前に死んじゃったから、もう買えないんだよなあ。ハードもテレ

「じも電気もないからあってもできないけど……やりたかったなあ」
って思ってた

「うん」

「そんなことを考えたら、無性に二次元そうゆう物が恋しくなってね？それで、『もしかなくてもジョンならなんとかできるかもしれない』って思ってた」

「『かもしれない』って言いながら『もしかしなくても』なんだ。確定なんだ」

「それで、『ジョンに届けこの思い！届かなかったらヌツ殺すぞ！ケツから内臓引きずり出して、それで縛って魚の餌にしてやる！』って念じながら寝たの」

「エグい！！なんて殺気に溢れたお願いごとなの！」

「そしたらここ来れた。一瞬泣きながら私の腕を掴んで全力疾走するにーさんの幻覚が見えたけど」

「……それ幻覚じゃなくて、現実だよ」

苦笑を浮かべながら「あいつも厄介過ぎる子を敵に回したねえ」と呟くジョン。

私は改めてジョンをギュッと抱き締め直し、そのまま重心を上を持ち上げる。

「でもまた会えたねっジョン！もう会えないと思ってたから、私す

つごく嬉しい！会いたかったよ！」

「うん、それはありがとう。でも無邪気に喜びながら私を抱え上げるのはやめようね」

「だって嬉しいんだもん！あとでおにーさんにありがとうってしなきゃ」

「嬉しいのは何よりだが、君なんか最初に会った時とキャラ違うくない？そんな愁傷なキャラじゃなかったよね？」

「細けえことはいいんだよ！！」（A A 略）」

「……………さいですか」

「で、具体的にはどうして欲しいの？」

思いつ切り抱き締め過ぎたのか、心なしか少々腰周りが細くなったように見えるジョンが言う。

……少しばかり申し訳なくなった。

ちなみに、今私達は向き合いながら見えない床に座っている。

「うん、あのね？とりあえず、私が買い続けてた漫画、ラノベ、D
VDの新作、それから欲しいゲームとかが発売されたら、手に入る
ようにして欲しいんだよね。それから、ネットが繋げるようにして
欲しい。それから、漫画やラノベの新作情報も知りたいから、ア
メイトとかのカタログも定期的に欲しい」

『世界を渡る能力』と『二次元力』を好きにできるジョンなら、で
きないことはないだろう。

ちなみに、テレビやらゲーム機やらパソコンは練成で出す予定であ
る。

「うーん、そうだねえ……」

ところが、以外にもジョンは考え込んでいるようだった。

顔はないが、あるとすればきつと困ったような表情を浮かべている
ことだろう。

「……え、もしかしてできない？」

「いや、できないことはない……けど」

「けど、何？」

どうも先程から歯切れが悪い。

どうしたんだ、一体。

「あのね、私はこうゆう個人的なお願いはおいそれほいと聞けないんだよ。なまじ私が神の中でもかなり特殊な部類に入るだけにね。私に会える人自体少ないし。それに、私の管轄下にある世界の住民ならまだしも、君は管轄外だし」

なん……だと……!?

「そんな……っ!」

私は絶句した。

ジョンなら……ジョンは私を裏切らないと思っていたのに!!

こいつも所詮……私をいように使ってきた神達と変わらないのか
……!!

「落ち着け。話は最後まで聞きなさい」

絶望に震える私を、ジョンは制する。

「おいそれほいと確かに聞けないけど、それならおいそれほいと聞かなければいいんだ」

「……日本語破綻宣言をした方がいいんじゃない?」

「まあ要は、よく考えて害がなさそうだと判断したら、お願い聞けるってこと。君の願いはただの趣味に関するお願いだし、多分あ

げても大丈夫だと思う」

なんだ……なら最初からそう言えよ。

「大丈夫なら、なんでそんなこと言ったんよ……」

「うん、そこに繋がるんだけどね？大丈夫だと判断したにせよ、通常なら簡単には聞けないわけだし、神にお願い事をするわけだから、相応の対価が必要なのわけ。以前私が君にあげた能力は、今までの功績とお詫びってことで対価なしだったけど、今回は違うからね。周囲への影響力は少ない内容とは言え、世界をまたぐわけだし……」

私は、ジョンが何を言いたいのかわかってきた。

「私には、対価になるものがないってことか」

「そうゆうこと。対価の基準はC●AMPのツ●サと似たような感じで考えてくれて構わないと思う。で、これくらいのお願いだったら物でもある程度融通が利くんだけど、異世界に飛ばされた君には私物がない。さらに言うと、死んで異世界に飛ばされた君は、関係性やら人の記憶やらを対価にするには微妙過ぎる。……となると今君が持ってるのは、その人間離れした能力と、肉体か。私としては一度あげたものを取り上げるようなことはしたくないし、これっばっかりのお願いで手足もぐような可哀相な真似はしたくない……とゆうか、再生能力あるから君の手足ってあんまり価値ないんだよね」

価値ないって言われた……orz

まあ、事実だけど。

「なるほど、それは面倒な……ちなみに参考までに聞くけど、今まで対価払って願い事を叶えた人いたの？」

「友達の魔王が」

「想定外!？」

「行動時間のほとんどと世界への影響力を引き換えに、異世界から後継者喚^よんだよ」

「……その自己犠牲精神……他の召喚者に見習って欲しいもんだ」

その友人の魔王さんの潔さに、ゴクリと喉を鳴らす。

「でも困ったな………あ、そうだ。この人間諦めた能力使って、何か手伝うのとかってどうよ？つまり、対価は行動と時間」

正直、神を手伝うたって何すりゃいいかわからんけどな。

私の提案に、ジョンは「ふむ」と頷く。

「いいかもね、それ……うん、そうだ、そうしよう。それじゃ瑠璃ちゃん、今度私の休暇^{バカンス}に付き合ってよ」

……仕事の手伝いする気満々だったんだけど、まさかの休暇^{バカンス}ですか。思いもよらない発言が出てきました。

「神にも休暇^{バカンス}ってあるの？」

「いや、たまに仕事に飽きて勝手に遊びに行くだけだけど」

「勝手に行くの！？……仕事溜まらない？」

「私神には時間とゆう概念がないから無問題」
モーマンタイ

「ふーん……」

ちよつと驚きだったが、何にせよこれでオタクライフが復活するのであれば、有難いことこの上ない。

「で？その休暇とやらはいつ？」

「それは追々連絡するよ。さっきも言った通り、仕事に飽き次第だし。君のお願いに関しては、元の世界に戻ったら亜空間に欲しい物が放り込まれるようにしとくからさ」

「りょーかい。ありがとね」

笑顔でお礼を言って、私は再びジョンを抱き締める。

「ジョン……私は、必ず帰ってくる……新たな力を手に入れて、必ず……！」

「……ここを第二の故郷にしたいなら、オススメしないよ？」

「えー（ろ、）」

「えー、って君ね^^；……やれやれ。まだ二回しか会ってないってのに、ここまで私に懐いてくる子は始めてだよ。大体は初対

面時にドン引きされるからね……とゆうか、この私を突っ込みに回させる君が規格外なのかねえ」

楽しそうに、そしてどこか嬉しそうに、ジョンがくつくつと声を立てて笑う。

規格外と言われたが、事実なので否定しない。

私はジョンから体を離し、今度は胡坐に組まれた真っ黒い足に突っ伏す。

「……私はジョン好きだよ。他の奴らがおかしいんだ」

いや、むしろ私みたいなのが懐くような神ヒトだから引かれるのか？

果てしなく同類臭がするしな……そんな気がしてきた。

「ジョンは、私の言ったネタをちゃんとわかってくれるじゃない。それに、本当は私とは関係なかったのに、ちゃんと責任持ってお願ひした能力くれたし、プレゼントくれたり、何かと気にかけてくれたりとかしてくれたじゃない………他の神みたいに、私を好き勝手使わないしさ」

ふー、と息を吐いて目を閉じる。

なんとなく感傷的な気分になって、口を開いた。

「友達になってくれよー、ジョン。今の私は、何も、持っていないよ」

多分私は、無意識に気を張り続けていたんだと思う。

私を殺したにーさんをあそこまでボコツたのは、もちろん相手の好き勝手っぷりに怒ったからだだったけど……やっぱりあの世界は、私にとって『帰る場所』だった。

今はそれがない。

私を知る人間も、私の知る常識もどこにもない。

普通の人だったら、この足場のない状況に落ち込んだり、取り乱したり、絶望したりするだろう。

でもそれはあくまで『普通の人』の話であり、自分には該当しないと思っていた。

今でもそう思ってるし、そもそも『普通の人』のように振舞うことは、自分のプライドが許さなかった。

「君も充分人間だと思うけど……いや、これは禁句かな。君は自分が人間じゃない方が楽かい？」

「さーね。でも、何でもかんでも『お揃い』じゃなきゃ嫌だってゆう人間どもには、嫌気が差すよ」

「そう。でも、ここには君と私しかいないよ。……君が泣いたって、誰も見ないよ」

「泣かねーよ。そんな人間だけじみたこと、誰がするか」

「泣くのは人間だけじゃないよ。悪魔だって泣くさ」

「……………確かに、私は悪魔かもね」

『悪魔』だとか『化け物』だとかゆう言葉は、もう言われ慣れ過ぎてなんとも思わない。

ゆっくりと瞼を上げると、字列でできた足と、その下を走る無数の紙が目映る。

私は仰向けに転がって、黒い顔を見上げた。

「でも、私は泣かないよ。このくらいで泣くような、そうゆう生き物じゃないよ、私は」

「……………」

随分と、哀しい物言いをしたかもしれない。

でも今の私は、その判別すらできない。

ジョンは黙って、真っ黒の手を私の瞳に被せた。

「……………そっか……………もう休みなよ。泣きたくないなら、そのまま寝ちゃなさい」

思いつ切り気を抜いて弱音を吐いたせいかな、確かに少し疲れた気が

する。

私は、ジョンの言葉に甘えることにした。

「おやすみ、ジョン」

「おやすみ、瑠璃ちゃん」

私の面目は、最後まで乾いたままだった。

第二十一話 神々は無気力な願いには耳を傾けない。 だから私は気力全開で神

説教臭くないよう、しっとり系で攻めてみましたが、今回ちょっと長くなり過ぎました。

そしてジョンにはデレる瑠璃ちゃん。

自分でも思うのですが、この二人(?)はよく似ています。相手に無茶振りするところとか、Sいところとか、心構えみたいなところとかが。

(この小説では、ジョンはまだそうゆうところは見せておりませんが)

一般人には甘えられない瑠璃ちゃんにとって、波長の合うジョンは貴重な存在なのでしょう。

でも恋愛には発展しないので悪しからず。

元ネタの紹介

・全くわけがわからないよ
某魔法少女アニメのセリフ。
ま●マギです。

第二十二話 力を伴わない文化は、明日にも死滅する文化となるであろう。オタ

再び感想をくださった地海月さん、感想とご指摘をくださったさきさん、tyuioさん、ゆっくりできないよ！さん、ありがとうございます！

この小説を読んでくださっている皆様、いつも本当にありがとうございます。

作者は幸せ者です。

第二十二話 力を伴わない文化は、明日にも死滅する文化となるであろう。オタ

「誰がドライアイじゃあ――――！！！！」

「何が！！？」

絶叫しながら飛び起きると、すぐ横で素っ頓狂な声が上がった。

うん？と思って視線を向けると、そこには見慣れた救世主殿の姿があった。

「……………なんでいんの？」

ここは私の（あてがわれた）部屋のはずなんだが。

起こしにきてくれたメイドさん、とかならともかく、何故目が覚めて真っ先に言葉を交わす相手がノアなんだろう。

……ハッ！？ Σ（。；）こいつ、まさか…………！？

「ノアに限っては……そんなことしなれと思ってたのに……！」

「なんの話だよ！何考えたのかは知らないけど、確実に濡れ衣だと思っ！」

「あの誠実なノアが……まさかこんなことをするなんて……！信じられない！」

「だから濡れ衣だって！何もしてないから！誤解だから！」

「そうね……ノアも男の子だもんね……お母さん、どうして気付いてあげられなかったのかしら」

「誰が息子だよ！！だから何もしてないって言ってるだろ！」

「……ごめんなさい、ノア。お母さん、あなたを甘く見ていたみたいね。まさか、あなたが寝込みを襲うなんて……自分より強い相手を殺してさらなる高みを目指すのは、おとし漢として当然のことだもの」

「どうしてそうなった……!?」

「……で、起床時間になっても一行に起きる気配がない私を、救世主サマが直々に起こしにきてクダサツタってわけ？へー、ほー、ふーん」

「なんでそんなに棘のある言い方なんだよ……まあいいか。瑠璃って、朝弱い方なのか？」

声かけても揺すっても起きなかったんだけど、とノアが続ける。

……………うーむ？

以前言ったと思うが、私は携帯のバイブレーションでも起きられる人間である。

それが、呼びかけで目が覚めないとはどういったことだろうか。ましてや、揺すられても起きないなど……戦場では命取りにも程がある。ガッデム。

別段、揺すられても起きない程疲労することはしてないしな。

思い当たることと言えば、ジョンのところへ行ってたことぐらいだが……時間とゆう概念がないと言ってたが、そうゆうことか。そうゆうことなのか、ジョンよ。

どうせ時間の流れがズレまくるなら、早朝に起こしてくれた方がま

だよかった。

「……神とは、常に理不尽であるものなのだな」

「いきなり意味深だな！結局質問に答えてないし！」

突っ込むノアを例によって無視しつつ、ベッドから起き上がる。

思いつ切り背筋を伸ばし、片手で肩をほぐしながらバキバキと首を回す。

ちなみに、バキバキ音は鳴っているが、別段肩が凝っているわけではない。

『エフェクト能力』で音を付けているだけである。

「……女の子の仕草としてはどうかと思うぞ」

ノアが呆れたように言うが、呆れたのはこっちの方だ。

こいつはまだ私にそんなもんを要求していたのか。

「私に『女の子』を要求するのはどうかと思うぞ」

「いや、瑠璃は見た目可愛いんだから、もっと振る舞いをなんとか……って、何首振ってんの。回すどころかも激しくヘッドバンして
るよ？なんか怖いくらいの速さで首バキバキ言ってるんだけど！？」

「眠いんだよ……^{変な}時間の流れが違う寝方したせいで」

「それで目え覚ましてるのか！？……って、今度は首が有り得ない

動きしてるんだけど!?! 明らかにネジのようにキリキリ首が回ってるんだけど!?!」

「関節外してるからな。首くらい回るさ」

「いやいやいや、関節ってか背骨イってるよな!?! てゆうか首捻じれてグロイことになってるから! 直せよ!」

「(ギュルルルルルルルルルン)」

「チョ●Qか!?! お前の首はチョ●Qなのか!?! とゆうか何故首回した!?!」

首が止まって視界が元に戻り、ゴキんと骨をはめる。

ふー、やれやれ。

ノアとのやり取りでいくらか目が覚めた。

「……この一連の行動が瑠璃の照れ隠しに過ぎないことを、この時のノアはまだ知らなかった」

「なんだそのナレーション……照れ隠しなのか?」

「まあ、嘘だけど」

「だよなー」

「当たり前だ。でも『可愛い』はやめて欲しいというのが本音。あんま気分いいくない」

可愛いだの美人だのその他美辞麗句を下心見え見えの顔で並べ立て、自分の物にすることしか考えていないような奴らせいで、容姿に関しての褒め言葉は、私にとってほとんど褒め言葉としての役割を担わなくなった。

「え、そうなのか？」

「うん、そー。正直どんな反応すりゃいいかわかんないし」

普通の婦女子であれば、容姿を褒められれば喜ぶなり恥らうなりの反応を見せるのだろうが、生憎容姿を褒められても嬉しくもなんともない私としては、「で？」としか返事のしようがない。

純粹に、悪意なく言ってくれる人には悪いんだけどなー。

まあ、この話はさておきに。

「今、何時？」

「もうすぐ五の彩さい」

もうすぐ五の彩と言うと……えーと、元の世界で大体朝の九時ぐらいか？

この世界は一日十時間カウントで、単位は『彩』と呼ぶらしい。

ついでに言うところの時計は針時計ではなく、時間によって色が変わる円盤状の魔法具である。

色によって時間を見るらしく、例えば五の彩は緑。

ちなみに一の彩は赤。そして零の彩という表記は存在しない。

別の世界に飛ばされる度に、その世界の一般常識を覚え直さなければならぬわけだが、本音を言わせてもらえば面倒意外の何者でもない。

ノアはあっさり順応してるな。

ホント、こいつの人としての適応能力はすげえよ。

「メイドさん困ってたぞ、起こそうと声かけても『お前らにトリッパ』の悲しみの何がわかるってんだよ！』とか『封印がとけられた！』とかわけのわからないこと言っ、全然起きてくれないって」

……寝言で何言っ、私。

いや、まてよ？ むしろ……。

「……ノアよ。私には、長年頭を悩ませていたわけでもない謎があったわけなんだが」

「そうか。長年頭を悩ませていたわけでもない謎か」

……なんかこいつ、順応してきたな。つまらん。

「そいつが今解けた。人間をやめた私は、一体何になったのかと。人でも何者でもない私は、一体何者なのかと」

「え？ なんだ、意外と真面目な……」

「なんと！ 私はブロントさんだったのだ！！」

「と思った結果がこれだよ!! 誰ブロントさんって!」

「ブロントさんとは

- ・謙虚なナイトで大人気
- ・メイン盾で不意だまが得意
- ・光属性のリアルモンク（不良界の伝説）
- ・忍者と侍とカイが嫌い
- ・ズタズタにするのが好き
- ・モテる
- ・想像を絶する悲しみに襲われている

『ブロントさん名言集』より抜粋」

「マジで誰え————!!?」

意外にも、ノアはブロントさんを知らなかった。

今まで結構私の振ったネタに食い付いてこれてたから、知っててもおかしくはないと思ったんだけどなあ……。

「まあ、嘘だけど」

「でしょうねえ!!」

「……さて。私はそろそろ」

「あ、着替えるのか? なら俺は部屋の外に……」

「いや、ジャ●プ読む」

「なんでだよ!! 今読むなよ! ……いや、なんであるんだよジャン●!」

「いやーだ——! 読むの! SET DANCEと銀●と ONE PIECEとバク●ン読むのおー!」

「駄々こねるなよ! 今日出発だっていうのに寝坊したのはそっちが悪いんだろ! あと、だからなんであるんだよ!!!」

「発売前に死んだから読むの諦めてたんだよ! この幸せを噛み締めさせろYO!」

「瑠璃が噛み締めるのはあたりめだけで充分だ! いいから早く仕度しろ!」

「くそう、ノアのくせに上手いことを! お断りだ!」

「なんだよノアのくせにつて! 襟から物理的に有り得ないサイズの雑誌を出すな!」

「ヤンプ読み終わったらW●opieでも漁ってSK●T DANCEと●魂とB●EACH見るんだよ! そのあと2●hで保守してたスレ覗いて、そのあとニ●動行って見溜めてた実況とボ●ラン見に行くんだあああああ!」

「落ち着け——!!! どうしたんだ一体! 今までこんなことなかっただろ!」

「だって……だって……！異世界でオタクライフとか、神展開にも程があるよ！？」

「安っ！神展開安っ！」

「私は異世界でオタク道を極める！！そう決めた！今決めた！」

「決めんな！！いいから仕度しろよ！時間なくなるだろ！」

「ノア、君はこの優先順位とゆうものがわかってるのか！この場で優先すべきなのは邪神再封印なんかじゃない……一刻も早く文化的な生活を取り戻すことだろう！？」

「甘えんなあ————！！！」

私とノアの応酬は、騒ぎを不安に思ったメイドさんが様子を見に来るまで続きましたとさ。

結局ジャ●プは読めませんでした。ぐっすし。

第二十二話 力を伴わない文化は、明日にも死滅する文化となるであろう。オタ

特に展開も何もないターン。

こうゆうのって、閑話扱いにした方がいいのでしょうか？

そして、珍しく一般常識の設定をちゃんと考えた気がする。

とゆうか、First world に来てから十八話も投稿してる
ってのに、未だに旅に出てませんorz

元ネタの紹介

- ・お前らにブロントの悲しみの何がわかるってんだよ
 - ・ 封印がとけられた！
- ブロント語。

・ ゆっくりした結果がこれだよ!!!
ゆっくりしていったね!!! の派生語。
某動画サイトで、ゆっくりしていったね!!! 関連の動画でゆっくり出来ないときに使う。

・ブロントさん

その昔2ch ネットゲ実況板（通称FF11板）に降臨した現人神。
その類まれなる言語センスと常識を超越した思考回路で一躍人気者に。

（「ブロントさん名言集」より）

第二十三話

チューリップは魂のない花だが、バラと百合は魂……とゆうか、

感想をくださった佐山まりるさん、ありがとうございました！

「私は今日ものた打ちます。」と、作者は言う。

……のた打ち回るって英語でなんて言うんだろう。

第二十三話

チューリップは魂のない花だが、バラと百合は魂……とゆうか、

「指を鳴らせば花が出る。両手を合わせりや鳩が出る」

そう言って指を弾くと、「ポン」というファンシーな音と共に花が舞う。

両手を筒状に組めば、適当に捕まえて仕込んでおいた鳩（もどき）が現れる。

「はわ……すごいです!」

それを白さんが子供ののようなキラキラした瞳で見つめている。

……てか、白さんて「はわー」とか言うようなキャラだったわけ……?

ちなみに、今我々は邪神再封印への旅の道中である。

てゆうか、馬車中だ。

メンバーは、ノア、私、白さん、レモンの騎士の四人。

レモンの騎士は御者をやっていて、他三人は後ろでのんびりと。

……え？ 出発時のことを詳しく？

えー、面倒いなあ。

そこそこ派手なパレードみたいなことやった。

観衆の前でノアがキンクリに「必ず邪神を鎮めます」とか言っ
て誓った。

そこそこ派手に送り出された。

以上。

……大事なところ端折るな^{はしよ}って？

いいだろ別に！！

うんざりなんだよ何度こんなことやってると思っ
てんだ！

大体、お見送りなんてどこも大して変わんないし！

つーか王サマのお話とか選手（？）宣誓とか毎度毎
度どの世界も長えんだよ！話が長いのは校長先生と作者の父親だけで充分だ！
てゆうか邪神復活の影響で人手とか財政とかヤバイだろうに、無理に
派手にしようとすんなって！もっと節約しろ！「もっ
たいない」は世界共通語にもなった偉大な言葉なんだぞ！
大体召喚側^{お前ら}いつもいつ（大幅に脱線したため割愛）

（※お見送りイベントがどこも大して変わらないという発言は、全
くの事実無根でありますので以下略 by 作者）

……まあ、それはそうとして。

ひたすら花や鳩（もどき）や紙吹雪を生産する私に、ノアが複雑そ

うな顔を向けてくる。

「普通なら『おー』とか言うところなんだろうけど……なんか瑠璃がやると凄さが半減する」

「よせよ、照れるだろ」

「褒めてないから」

私は現れた花の一つを、ク●リス姫に対するル●ンよろしく白さんに差し出す。

「どーぞ、姫さん（王女だけど）」

「え、よろしいのですか？ありがとうございます」

嬉しそうに花を受け取る白さん。

渡した花からずるずる万国国旗を引っ張り出すのは、お約束だよね。

「わ、わっ、何か出てきました！」

「タネも仕掛けもありますよ」

「……………うん、そりゃあるだろうな！危うくスルーしそうになっただけど！」

反対側にも花を出してから万国国旗を白さんに渡し、わっさわっさと散らばった花をまとめて束にする。

ここが馬車じゃなきゃ、花瓶にでも挿すんだがね。

この手のパフォーマンスは、異世界で時たまやる。

魔法のような超常現象のない世界は元より、今回のようなファンタジー世界でも、実は結構受けがよかったりする。

魔法があるのに、何故受けるかと言うと……。

「とゆうか、この世界には魔法があるのに、なんでそんなに驚くんですか？」

「私達の魔術は、無から生命を生み出すことはできないのです。花や鳥は命ですから」

「ああ、なるほど……」

……とゆうわけだ。

いいタイミングで質問を振ってくれたノアには、ご褒美としてお姉さんがイベントフラグを立てさせてやろう。

私は手渡した花に夢中になっている白さんにわからないよう、そっとノアに耳打ちする。

「ノアよ」

「どうかしたのか？声なんて潜めて」

「この花束の中から似合うと思うもん一本抜いて、白さんの髪に挿してやれ」

「……………えっ?」

何故だかポカン（・ㇿ・）とした顔をするノア。

なんなんだ。今のセリフのどこにポカン（・ㇿ・）とする要素があった。

「何呆けてんの。早くしんしゃい」

「ああ、いや……瑠璃がそんなことを言うとは思わなくて」

「淑女を喜ばせるのは紳士の義務だろうが。さっさと白さん喜ばしてこい」

「あ、ああ……」

ほい、と花束を差し出すと、ノアは数拍空中に彷徨わせた後、一本の赤い花を引き抜いた。

「なんか、瑠璃にこうゆうこと言われると、何か裏があるんじゃないかと……」

ノアに対する白さんの好感度を上げようっていう裏はあるけど。

「失礼な。一級フラグ解体師の実力を信じろ」

「その発言から一体何をどう信じろと!?!」

「何言ってるんだ。どうすりゃフラグ解体できるかわかってんだから、

どうすりゃ解体せずに済むかもわかるんだよ。ある程度」

「な、なるほど……いやいやいや、納得しないからな？どの道果てしなく心配だからな！？」

そんなやり取りをしていると、いつの間にか白さんが不思議そうな目でこちらを見つめていた。

私は肘でチヨイチヨイとノアの脇腹を突付く。

「ほれほれ、ちゃっちゃと渡しチャイナ服」

「いきなりどうしたそのオヤジギャグ」

「いいから、早くしろっての！大丈夫だよ！イケメンに花渡されて怒る女はいねえよ！」

「キレながら後押しするなよ！恥ずかしかったのか！自分で言っておきながら！」

ノアはぶつくさ文句を言いながらも、白さんの髪に先程抜いた花を挿した。

予想通りとゆうか、お約束通り驚く白さん。

「えっ、これは……？」

「いえ、その……これは溜……」

私がやれと言ったことをバラそうとしたノアを、一睨みして黙らせ

る。

やれやれ、全く。

バラしたら格好付かねえだろが。

「……ホワイトさんに、似合うと思って」

ノアは若干引きつった顔になりつつ、そう言う。

白さんはと言うと、そんなノアの表情には気付かず、一瞬キョトンとしたあと、ポポポポーンと頬を染めた。

え？効果音がおかしい？そんなの気のせいだよ。

「あっ……ありがとうございます」

「え、ああ、いえ……」

そんな白さんを見て、つられたのか照れたのか惚れたのか、ノアも少し赤面する。

うむうむ、いい感じだ。実に順調。若いねー、青春だね。

ちなみに、ノアが選んだのはクリスマスローズという花だ。

その名の通り、十二月から咲き始める。

……それにしても、随分季節関係なく出したようだ。

私の手の中の花束はクリスマスローズの他に、チューリップや桔梗、水蘭、カトレアなど、良く言えば四季折々、悪く言えば種々雑多な

花達でまとめられている。

鳩（もどき）と違って、花は仕込みなし……つまりリアルに魔力で出したからな。

あんまり出す花細かく考えてなかったから、こうなったんだろう。

まあ、気付く人はいないだろうし、気付かれたところで困りはしないが。

それはそうとして、私はいい雰囲気の二人の邪魔をしないため、花束を持ってそっと席を外す。

え？全力で邪魔すると思った？

フツ、まだまだだな。

私は二人がくっ付いた暁には全力で茶化すつもりだからな！今茶化しても面白くないもんな！

そんなわけで、御者をしているレモンの騎士の隣へテレポート。

「よいせ」

「うおっふ！？びっくりした！」

変な声と共に盛大にビビるレモンの騎士。

こいつはこいつでいいキャラしてるよね。

「おっすおっす」

「おっすおっす、じゃないっすよ！いきなり現れたら驚きますって！」

「いいじゃないの。暇でしょ？」

「暇じゃないっすよ、御者やってんですから……てか、なんスカその花束。王女殿下と救世主様は？」

「いい雰囲気だったから置いてきた」

「へえ、意外っスね。補佐様、結構そうゆうの空気読まなそうなの」

「知ってるか？草木の茎や蔓って案外丈夫なんだぜ。編み込めば簡単に人を吊るせるぐらいに」

「すみませんっした」

即座に謝るレモンの騎士。

どうやら以前吊るし上げたのが効いているらしい。

あれは正直悪いことをしたと思ってるんだがね。

それでも、私のキャラを理解しているのか、騎士団長を相手に行っている時よりも大分態度が砕けている。

「まあそれはそうとして。最初に物資の補給と休憩ができる街まで、どれくらいかかる？」

「馬車で早くて二日ってとこっスねー。行商みたいに荷物たくさん乗せてる馬車とかだと、もうちょっとかかると思いますけど」

「ふむ……この辺の魔物と盗賊の出現率は？」

「王都に近いんで、盗賊は少ないですけど……油断はできませんね。王都から離れる程増えてきますし。魔物に関しては、森とか洞窟とか強力な魔物が潜むような場所から遠いんで、遭遇したとしてもこの人数なら充分倒せると思いますよ」

「なるほどな。レモンの騎士って、サバイバル経験ある？」

「何！？レモンの騎士って！？」

「おっと、今更かよ……面倒な」

「今更！？てことは結構前からそう呼んでたんスカ！？」

「んなこたどーでもよかんべさ。で、経験あんの？ないの？」

「……その、差バ威張る？ってのがわかりません」

「凄い当て字だな。てか、サバイバルが通じんのか……あれだよ、人が生きてくのに必要な物が無い状態で生きていくってゆうか……ようはあれだ、野宿したり野生動物狩ってきたりそれで飯作ったり、そういう生活したことあるのかって」

「ああ、ありますよ？騎士団の演習とかで」

「おう、そうか。ならよかった、ノアや白さんには期待できないだ

ろうしな」

「そりゃあ殿下にそんな生活させられませんからね。救世主様は知りませんけど……補佐様はそうゆう経験あるんスか？」

「まー、いろんなことやって生きてきたからね。それぐらいはあるよ」

適当にボカして話を進める。

本来なら「様付けとか気持ち悪いからやめろ。マジやめろ」と言っているところだが、「補佐様」という響きが気に入ったので、あえて訂正していない。

「んじゃまあ、野宿だなんだに関しては私らがリードしてくつてことで。レモンの騎士、料理できる？」

「またレモンの騎士って……まあ、できますよ。宿舍、一人部屋ですし」

「ああ……そういや、レモンの騎士っていくつ？」

「……………。二十一っスけど」

「マジか。大した実力だな、その歳で騎士団のナンバー4で騎士団最速とか」

「あれ、知ってたんスか。騎士団長にでも聞きました？」

「そんなところだ」

本当は『見抜く能力』で視たわけだが、言う気はない。

毒殺未遂犯を逃した時、騎士団長が「お前から逃れるとなると、相手は相当の手練だな」と言っていたのが引っかり、視てみたのだから……この騎士、思いつ切りいじられなキャラに反してかなりの実力者だった。

「てか、そんだけ実力あるんじゃ、レモンの騎士モテるんでない？性格も親しみやすいし、顔も悪くないし」

「えー？………そんなもんっスカね？」

「おま、ホント残念だなあ……モッテモテとまでは言わんけど、振る舞いと巡り合わせがよければ、自分のことを好いてくれる女性の一人ぐらい割りとは簡単に出来るぞ」

「そーっスカねえ………てか、今残念って言った！？今俺残念って言われた！？」

「実際そうだろ。てゆうか、あんたの反応見て思ったんだけど、基本的に女性にキャーキャー言われるのは団長や他のイケメン団員とかで、あんた自身にはそうゆうアプローチがない上、あったとしても他の女性陣のせいで霞んで気が付いてないとか、そんなんじゃないのか？」

「……………」

私に指摘に、黙り込むレモンの騎士。

どうやら心当たりがあるらしい。

「その反応を見ると、フツたな？ しかも無意識に」

「……………ウガー！」

「あーあ、ホントに残念なヤツめ……」

手綱を握ったまま撃沈するレモンの騎士。

器用なヤツだ。

「大丈夫だ、いくらでも出会いはあるさ！ 応援してるよ！」

「補佐様……！」

「『後ろの人』が！」

「嬉しくねえ——！！！！」

そんなこんなで、邪神再封印の旅がスタートしました。

第二十三話

チューリップは魂のない花だが、バラと百合は魂……とゆうか、

ノアと白さんのフラグ立てて、レモンの騎士とちよっとお喋り。

元ネタの紹介

・「私は今日も転がります。」と、少女は言う

現／実／逃／避／Pことw／o／w／a／k／a様の楽曲「ローリンガール」の歌詞の一部。

(※スラッシュは検索避けです)

・ポポポポーン

皆さんご存知のあのCMです。

さすがに最近はまだ見ませんね。

第二十四話 私は生かされている。野の草と同じである。路傍の小石とも同じで

またもや感想をくださった地海月さん、そしてタカヤさん、ありがとうございました！

そして総合評価ポイントが2000点を超えました。皆さん、いつもありがとうございますm（　　）m

更新が遅くなって申し訳ありませんでした。ちよつと忙しかったり、五月病発症したりしてました。

そんなわけでどうも、授業で黒板に書かれた『七三一部隊』を『ヒミ部隊』と読んだ作者です。

蘇芳「（仏壇のパイナップル見ながら）パイナップル大分熟れてきたね」

鷹村「あ、本当だ。パイナポー大分熟れてきた」

蘇「……………。お前さ、子供の頃『アップル』を『アポー』て発音してたよなw」

鷹「w w w w w耳から入った発音をそのまま口に出すタイプだったんだw w」

蘇「先生が『はい、りんごは英語でなんて言うかな？』って言って、

周りが『アップル!』『アップル!』って言ってる中で、一人だけ『アポウ（無駄に発音良く）』ってw w w w怖えよw w w w」

鷹「w w w w w w w w w w（爆）」

※7／29 歌詞の無断掲載に関して公式様よりご注意を受けましたので、作中で主人公が歌っている箇所をカットさせていただきました。

内容自体を変更しようかとも思いましたが、出来れば内容は変えたくありませんでしたので、中途半端ではありますがこのような処置を取らせていただきます。

大変、申し訳ありませんでした。

第二十四話　私は生かされている。野の草と同じである。路傍の小石とも同じで

出発一日目は、特に何かに出くわすこともなく野営の準備に取りかかる時間となった。

変わったことと言えば、レモンの騎士と話を終えて戻ってみたら、ノアが白さんに対してタメ口を利くようになっていたことぐらいだ。

フラグ建設は非常に順調である。

「それじゃあ、分担して進めましょうか。一応訊きますけど、救世主様は野営の経験はおありで？」

「……家族とや学校行事で何度かキャンプに行ったことはありますが、本格的なのは始めてなので、リモーネさんに指示をお願いします」

若干視線を泳がせながら、ノアが言う。

レモンの騎士もそんな反応をされることに關しては諦めたらしく、死んだ魚のような目で指示を出し始める。

白さんと言うと、レモンの騎士が王女サマに働かせるわけにはいかないと思ったのか、今のところ放置されている。

「リモーネ」

しかし、白さんはそれを気にした様子もなく、とゆうか妙にキラッキラした目で、レモンの騎士に声をかける。

「とてもよくお似合いですよ」

「……………」

トドメを刺されたレモンの騎士は、その場で真っ白に燃え尽きた。

立ったまま魂が抜けてるが、なんとも器用なヤツだ。

現在、レモンの騎士の頭には、色取り取りの花で作られた花輪が乗せられている。

ああ、もちろん私の仕業だ（ドヤ）

あのあと暇を持て余した私は、『二次元力』で遠くを見てたらいつの間にか自分の背中が見えてたり、レモンの騎士を弄り倒したりして遊んでいたのだが、ずっと花束を握っていた手が汗ばんで鬱陶しくなってきたため、暇に任せてそのまま花輪を作り始めたのだ。

そんで完成したそれをレモンの騎士に乗つけた。

当然のごとく拒否られたが、「私の魔力を粗末にするな」と脅し…失礼。もとい説得し、ついでに魔力で私が飽きるまで外せないように固定した。

その時点でなんか涙目だった。

しかしまあ白さんも言っていたが……あれだ、女子特有おなごの特殊な『可愛いフィルター』などでは断じてなく、ガチで似合う。

レモンの騎士は割りとスッキリした顔立ちをしており、その時点で『男十花Ⅱ：なんだコレ』という方程式は成り立たない。

……とゆうか、こいつ隠れ女顔だ。今気付いた。可愛い系より美人系の女顔だから気付かなんだ。
あとで女装させよう（確定）。

私が出した花達は比較的色の濃い物が多く、それがやや赤みが差す黄色とは違った混じり気のないレモン色の髪に映えること映えること。

それにレモンの騎士、髪長いしな。

肩甲骨の中間地点ぐらいの髪の長さに植物の冠被ってる姿は、なんかギリシャ神話にでも出てきそうなシルエットだった。
首から下は鎧だけど。

ついでに言うと、前述したように花輪を作ったのは私なわけで。

それはもう気合を入れた。暇に任せて入れに入れまくった。

そしてでき上がったのは、一見普通の花輪に見えるだろうが、それは配色、花の大きさ、バランス、頭部に合わせたサイズ、葉の位置まで完璧に計算して作られた、玄人が見ればグウの音も出なくなるような代物である（なんの玄人だよ）。

………え？白さんやノアの外見説明した時との表現の差が酷い？

これから外見に関して弄りまくる気満々なので、念入りに描写させていただきました（笑）

「まあ、落ち込むなレモンの騎士よ。似合ってるぞ」

「……嬉しくないっス」

完全に意気消沈しておられる。

メンタル弱えーなー。

女装させたり

これからもっと面白可笑しいこととかするつもりなのに、精神持たんど（酷い）。

「……で、それはそうとして。私が食料になるもの採ったり狩ったりして、ノアが薪集めで、レモンの騎士が焚き火とか野営の準備するためここに残って、白さんもここで待機と」

私が口に出して確認すると、全員が頷いて返してくる。

ちなみに、野営の場所はそこそこ川から近いところを陣取ったため、水汲みは後回しでおkとゆうことに。

「てゆうか、私食えるものと食えないもの見分け付かないってゆうか、知らないんだけど」

「ああ、そう言えばそうでしたね。それじゃあ、補佐様はとりあえず、」

「あ、大丈夫だったわ。毒あるやつ取って来ても上手いこと調理できる」

「マジっスか」

「……毎度毎度思っただけど、どこでそうゆうスキル見に付けてくるんだよ」

「人間やめる過程で？」

「過程とかあったのか……とゆうか何故疑問系」

トリッパー生活というのは、常に死と隣り合わせ、常に涙で明日が見えない状態である。

人気のない森の中とかに放り出されたりした日にゃあ、とにかく人に会うまでそこにあるもので生きていかなきゃならない。

しかし別の世界に飛ばされたばかりでは何が食われて何が食べれないのかわかるはずもなく。

かと言ってうっかり毒のあるもんなんか食べば死ぬわけで。

実際何度も死にかけたしな。

たまたま人が通りかかって助けてもらったり、自力で解毒魔法をかけたりでなんとか今生き長らえているが……一番最初に毒物か否かを見分ける基本的な術を授けてくれた現地民に感謝だ。

まあ、今はもう毒とか効かない身体になったから関係ないけど。

「あー、そうだノア。薪集めるにしても、木は切るなよ。使えそうなのが落ちてなくて止むを得ない場合でも、細い枝程度にしとけ。まあ、お前に関しては心配はないと思うが」

レモンの騎士が言った通り、この辺りに森はない。

しかし、慰め程度に木々は転々と生えているし、背の低い林なんかもある。

少ない資源で野営を強いられる旅の人間は他にも多くいるだろうと予想されたため、なるべく木々は節約した方がいだろうと踏んだ。

「わかってるよ。一晩しか使わないのに、資源の無駄だしな」

「あと、迷ったこと^{困ったこと}に負えない事態^{があったら}に見舞われたら、空に向かって大声で私の名を呼ぶのだ。私はいつでも、君の元に駆けつけるぞ」

「何その子供向けヒーロー番組みたいなセリフ」

「何かあったら呼べよ。お前は俺が守るから………とか言った方がよかったか」

「普通逆だろそれ！男の俺が言われても嬉しくないから！惨めなだけだから！」

「居残り組も同じね。なんかあったら呼びんさい」

「「はい」」

「二人共なんの疑問も抱かずに返事してるし！突っ込みは！？離れ

とても聞こえるのかとか呼んでも間に合うのか、とかに關しての突っ込みは!？」

「ルリですから」

「補佐様ですから」

「俺よりも格段に早く順応してる!？」

「てゆうか、君はあれだけ私の實力を見といてまだ順応してなかったのかね」

「くっ……否定できない!」

「異世界なんだから、もっと物事を柔軟に捉えないとな。常識から何から違うんだから」

「あ、ああ………いやいやいや!瑠璃は俺がいた世界の住人だよな!？俺が驚いてるのは違わないはずの常識に關してだからな!？むしろこの世界には順応してるからな!？」

「だから私をまともな人間と思うなかれとあれ程（ry）」

「（※東●ボーカルアレンジ『風神青年』を熱唱）」

そんなわけで、現在私は今晚のおかずを求めて爆走中。

いや、爆走ってゆうか、若干浮いてるんだけどね？

いいじゃない。久々の外なんだもの（隠し通路からこっそり城下町に様子見に行ったことは省く）。

「（※東●ボーカルアレンジ『風神青年』を熱唱）」

ノリノリで『風神青年』を歌いながらギュンギュンスピードを上げてみると、前方に草地に紛れるような色の小動物が三匹程群れているのを確認。

まだ向こうは私に気付いていないようだが、この距離なら一瞬で近づける。

「（※東●ボーカルアレンジ『風神青年』を熱唱）」

よし、今晚のおかずは君達に決めた。

私は即座に捕獲方法を組み立てる。

……まあ、組み立てる程複雑なものでもないんだけど。

「（※東●ボーカルアレンジ『風神青年』を熱唱）」

私はマスタースパークを……じゃない、そんなもん撃ったら獲物が食えたもんじゃなくなる。ここら一帯も焼け野原になる。

そんなわけで、私は右手で拳を作って振り被る。

「————ツスパァーキイイイイイイイイイイing!!!」

ドッカアアアアアアン!!! という派手な破壊音が周囲に響く。

なんの音かというと、私が小動物の真横の地面を殴り付けた音だ。

弾け飛ぶ大地。小動物は気絶。

私は目を回している小動物（多分兎みたいなポジションだと思う）を手早く一まとめに縛り上げると、亜空間に放り込む。

「さて、一応メインディッシュは確保できたが……これだけじゃちと物足りないな」

他に何か確保しようにも、肉ばかりではキツイだろう。かと言って、木の実を取れる程木なんて生えていないし、木の実をつけていない木がほとんどである。

どうすつかねー。

「そうだ、野草採ろう」

草なら普通に生えてるし、少し採ったぐらいじゃなんの問題もないだろう。

丁度今の状況で活用できそうな能力を思い出し、私は『二次元力』から某魔人探偵に出てくる呪術師の所持していた『全ての植物を味方にできる』能力を引っ張り出し、先程とは違い地面に足を付けて辺りをうろつき始めた。

「ただいマンボウ」

「おかえりなさい、ルリ」

「おかえりなさい補佐様。……なんスかその挨拶」

大量の野草と、事前に亜空間から出して戻る直前に殺しておいた小動物達を持って戻ってみると、ノアはまだ戻っていなかった。

焚き火の場所の確保だとか、その他野営の準備はすでに整っていた。

「おや、ノアはまだかいね」

「多分、薪が中々集まらないんだと思いますよ。木い少ないっすから」

「だろうなあ」

まあ、あの實力なら特に危険はないだろう。
迷ったら呼べと言ってあるし。

白さんは少々不安気な顔をしているが。

「で、これって食える？ いっちゃん最初に見つけたやつ狩ってきたんだけど」

言いながら、手に下げた草色の小動物をレモンの騎士に見せる。

「ああ、ソートですね。大丈夫っすよ、食べれます」

「ソートってゆうのか、コレ」

「ええ。草食の大人しい奴で、騎士団の演習の時も食べたんですよ」

「ほうほう……で、味は？」

「普通に上手かったっすよ。城下でも少なくともありますが、売られてないこともないですから」

「へえ」

マイナーっちゃマイナーなようだったが、普通に食用なのかコレ。とりあえず、三匹共首を落として適当に木にぶら下げて血抜きをする。

一応白さんには後ろを向いといてもらったが。

「……ノア、早く帰って来ないかねえ」

特にすることもなかったため、三人で適当に雑談をしながらノアを待った。

その後、中々帰って来ないなと思いつながら待っていたら、大声で名前を呼ばれたのですっ飛んで行った。

ノアは見事に迷子になっていた。

第二十四話 私は生かされている。野の草と同じである。路傍の小石とも同じで

なんでこんなに進行遅いかなぁと思ったら、First word
ldってチュートリアルみたいなもんなんですね。

瑠璃ちゃんがどんな力を使うだとか、どんな思考回路してるだとか。

その割には余計な話が多いですが（笑）

ソート↓ソウト↓草兎

と言うことで、瑠璃ちゃんが捕まえてきた小動物は、草色の兎みたいな生き物なのでこんな名前に。

誰かネーミングセンスをくれ……orz

元ネタの紹介

※作中で説明（？）があるものは省きます。

・風神青年

東方ボーカルアレンジの一つ。

原曲…風神少女

サークル…A.C.I.D C.L.U.B / あぶえぬ
すたーと！（すしーver）

作詞…n.a.g.a.r.e

（※ドットは検索避けです）

※7/29 歌詞をカットさせていただきました。

・マスタースパーク

某普通の魔法使いの技。

レーザーが出る。

・ たいマンボウ
最早説明不要。

ポポポポーンです。

・ で、味は？

某ゲームのコードネームが蛇の人のセリフ。

第二十五話 確かに世の中は不公平だ。美人や美青年がいる一方で、あなたが

感想をくださった長月チャカさん、からげんきさん、h a k iさん、いろいろとネタの提供をしてくださった地海月さん、ありがとうございました！

今回も更新が遅くなって申し訳ありません。

学校とバイトで普通に忙しいです。はい。

こんな作品ですが、今後暇潰し程度に読んでいただけると有難いです。

※7／29 歌詞の無断掲載に関して公式様よりご注意を受けましたので、作中で主人公が歌っている箇所をカットさせていただきますました。

内容自体を変更しようかとも思いましたが、出来れば内容は変えたくありませんでしたので、中途半端ではありますがこのような処置を取らせていただきます。

大変、申し訳ありませんでした。

第二十五話 確かに世の中は不公平だ。美人や美青年がいる一方で、あなたが

空どころか空間その物が闇に包まれたかのような夜の世界。

その中で唯一の灯火を囲んで、それぞれが思い思いの瞑想に身をゆだねる。

「（※平●進の『パレード』を熱唱）」

暗闇で生命を呼び寄せる炎は儚げに揺らめき、まるで自分がこの世界で独りきりになってしまったかのような錯覚さえもたらす。

風の肌触り。大地の感触。草の香り。全てが酷く無機質に思えた。

「（※平●進の『パレード』を熱唱）」

それでも、誰一人として“言葉”を発することはない。

初めての旅の夜は、一行に共通の思いを芽生えさせたようだった。

「(※平●進の『パレード』のサビを熱唱)」

「「焚き火囲んで怪しげな歌歌うなよ(歌わないでください)！
なんの儀式だよ(ですか)！」」

そんなわけで。

焚き火の火でソートの肉が焼けるのを待つ間暇だったので、適当に歌ってたら他三人に総突っ込みをいただきました。はい。

ちえっ、せっかくサビに入ったところだったのに。

……いや、サビまでよく耐えたというべきか？

前奏や間奏の、あの何言ってるかわからんとこまできっちり歌ったしな。

「なんだよー、せっかく人が気持ちよく歌ってたのにー」

「いや、ホント何あの曲。あそこまで不安定な曲が存在することが驚きなんだけど」

「知らんのか。平●進氏の『パレード』だぞ。『パプリカ』って映画知らん？」

「……いや、知らない。とゆうか、何故今それを歌った」

「状況に合わせてチョイスしてみた」

「どんな状況！？あんなこのまま夜が明けないんじゃないかと思うような曲をチョイスするって今どんな状況！？」

「世界崩壊阻止への門出。過酷な旅路での成長。最悪最凶の敵。不愉快な仲間達。救世主はこの戦いで一体何を得的のか——って感じの状況」

「いや、絶対そんな歌詞じゃなかっただろ！そんな胸躍り心が弾むような曲じゃなかっただろ！」

「ちよ、ノア混乱し過ぎて逆になってる。『心躍り胸が弾む』な？」

「てゆうか一つおかしくなかったっすか！？何『不愉快な仲間達』って！俺達不愉快なの！？愉快じゃなくて！？」

まあ、そんなこんなやってるうちに無事夕飯が完成した。

ちなみに今晚の献立は、焼いて味付けした草兎の肉と、煮詰めて灰汁抜きした野草のスープと、保存性を考えられているためめっちゃ固いからスープに浸して食べるパンの三品である。

ちなみに総突っ込み以降一言も声を発さなかった白さんは、私の歌

でドン引きしてました。

そんなに引くこともないだろうに……私はあの人の曲大好きなんだが。

「……さて、それじゃあ食べようか」

「お残しは許しまへんでー!!」

「なんでそのネタを持ってきた! お前が作ったわけじゃないだろ!」

「そーいや白さんは毒味とかしない食事は初めてだったりする?」

「無視!?!」

ノアがなにやら騒いでいるのが例のごとくスルーする。

これもパターン化して来たな。

ちなみに、夕飯を作ったのはレモンの騎士（七割）とノア（三割）である。

ノアが率先して手伝いたいと言ったのと、特に毒のある食材を扱うわけでもなかったため、私の出番はなかった。

そして暇を持て余した私は、白さんとボーッと待ちながらあの歌を歌い、今に至る。

「そう言われれば、そうですね。いつも毒味された物を食べていたので……こういった食事は始めてです」

「そーかそーか。よおけ味わって食べんさいね? おかわりもあるけ

えね、遠慮せんでええよ？」

「お前は世話好きの親戚のおばちゃんか。あとどこの方言だそれ」

「私さ、可愛い姪っ子が欲しかったんだよね。おばちゃんって言うてくっ付いてくる、可愛い姪っ子が」

「『娘』じゃなくて『姪っ子』なところに子育て面倒オーラが出てると言うかなんと言いますか」

「てゆうか、瑠璃は『おばちゃん』って呼ばれたのか？普通女性嫌がるものだと思うってたけど」

「あれだよ、簡単に言うて隠居後の幸せみたいなもんが欲しいんだよ。自分の役目は終わって、あとは巢立って子供達を見送ってやればいい。そんな生活に憧れんこともない」

「……なんか、苦労してるんだな」

「お前さんが気にするこっちゃーないさ。まあそれとは別としても、歳を取ってくのはいいことだと思うよ？自分が積み重なって成熟されてく感覚とゆうかさ。白さんあたりそうゆうのわからん？」

「うーん、そうですね……私にはまだよくわかりませんが、でも、この国を支えるためにたくさん勉強して、そしてそれが報われるのは、確かにとても喜ばしいことだと思います」

「だっしょー。ま、私はまだまだ隠居する気はないけどな。とりあえずご飯食べましょーよ、冷めちゃうよ」

「誰のせいで話が発展したと……もういいや、いただきます」

「いただきますーす」

ノアと揃ってご飯の前で両手を合わせると、白さんとレモンの騎士がキョトンとした顔でこちらを見ていた。

……ああ、これも通過儀礼だな。

「……それは、そちらの世界のお祈りですか？」

「え？ ああ、いや、こちらの……っていうより、俺達の国の、かな。それに、お祈りというより挨拶だよ。食事を作ってくれた人や、食材を作ってくれた人達、それから自分達の血肉になってくれる食べ物に感謝するんだ」

「そうなのですか……素晴らしい思想を持った国なのですね」

ノアの説明に、白さんは素直に感心している。

うん、こうゆう文化の違いや元の世界に関する説明も主役の役目だよね。

別にちまちました説明ぐらい脇役私がしたっていいじゃないと思うかもしれないが、ところがどっこい、こうゆうのは主役が話しをするから印象に残るし、会話も弾むのだ。

モブがいくら説明したところで、基本的に「へー、そーなんだー」程度である。

補正ってすごいね。能力補正とはまた別の。

「てことは、俺は今お二人に感謝されたってことですか？」

「そうゆうこったね。あと私はノアにも感謝したことになる」

「なるほどー……なんか照れますね」

まあ、正直現代で飯食う度に一々そんなこと考える人も少なくなっただけだが、それは見も蓋もないから伏せておこう。

「あの、ノアの世界のこと、お話していただけませんか？」

目を輝かせながら言う白さん。

ほらー言った通りじゃん。話弾むしフラグ立つじゃん。

白さんも相変わらず『ノアの』ゆうしさー。

ホントもーやんなっちゃうぜ。

……いや、別にヒガミじゃないよ？構ってもらえないから悔しいわけじゃないよ？

自分が『主役』だった時から「説明フラグうぜー」と思ってたし。

「いいよ。じゃあまず、世界って言っても広いから、俺達がいた国から話そうか。俺達がいたのは日本ってゆう小さな島国で……」

律儀かつ丁寧な、我等が祖国について説明するノア。

白さんは身を乗り出すようにして、時折相槌を打ったり質問したりしながら聞いている。

どうやら二人の空間ができ上がってしまったているようなので、私は特に会話に割り込まずに黙々とめっちゃ固いパンをちぎっている。レモンの騎士も空気を読んだのか、興味深そうな表情を浮かべてはいたが、口出しはしなかった。単に白さんの身分に遠慮しただけかも知らんが。

とゆうか、なんかノアの口調普段と違うね？

私を相手にしている時より遥かに口調が柔らかいんだが……まあ散々茶化してきたし、当然と言えば当然か。

とりあえず、会話を他人に任せてしまおうと暇だな。

口を挟まずも興味津々に聞いているレモンの騎士に話を振るのも酷くてもんだし。

もきゅもきゅと水分を含んだめっちゃ固いパンを咀嚼する。

いや、スープに浸して水分を含ませたから別にもう固くはないんだけど、もう『めっちゃ固いパン』が固有名詞みたいなことになっているから別にいいよね？

「……それで、今では技術も文化も世界的に認められているんだ。具体的に話そうとすると説明が果てしなく長くなるけど、いい国だよ」

「素敵なところなんですね。私も行ってみたいです」

「機会あれば案内するよ。ここにはない物がたくさんあるから」

「本当ですか？約束ですよ！」

「うん、約束する。……いつになるかは、わからないけど」

「いくらでも待ちますよ。ふふ、楽しみにしてますね」

「ああ、俺も今から楽しみだ」

無邪気に笑う白さんに、笑顔を浮かべながらもどこか寂しそうなノア。

多分、無理だってわかってんだろうな。てゆうか無理だろ、JK。

……てゆうか、私スープに砂糖なんて入れたっけ？

スープに浸したためっちゃ固いパンが、なんだか甘く感じるよ。

私の夢の産物だと思ってたんだが、シュガーポットの精は実在したんだろうか。

「……やっぱり、その……故郷が恋しいですか……？」

ノアの表情に気付いたらしい白さんが、心配気に尋ねる。

心配そうな表情＋上目遣いとは、いいコンボです。

「まあ……恋しくないと言えば嘘になるかな。一応生まれ育った場所なんだし」

「そう、ですよね……ごめんなさい、私達が喚び出してしまったば

かりに」

「ホワイトさんが謝ることはないよ。実際、困ってたんだろ？」

「ですが……」

「いいって。それに、俺はこれでも感謝してるんだ」

「えっ？」

「三年くらい前に……まあ、ちょっと落ち込むことがあってさ。未だにその傷が癒え切ってない。ずっと、何で俺は生きてるんだろうって思い続けて、何の目的もなくただ生きてた」

「……………」

「でも、ここには俺にしかできないことがある。過去に捕らわれてきた俺だけど、これをきっかけに、ちゃんと前を向いて進めそうな気がするんだ」

「ノア……」

「だから、君には感謝してるんだよホワイトさん。この先、きっと危険な旅になるだろうけど……ホワイトさんは、できる限り俺が守るからさ」

「そ、そんな……わっ私は王女として当然のことをしただけで……」

「それでもいいんだ。ありがとう、ホワイトさん」

「……／／（ポッ）」

「他所^{よそ}でやれお前ら」

感動のフラグイベントをバツサリと斬り捨てる。

もう駄目だ。口の中が落雁^{らくがん}よりも甘い。

なんだこのテンプレも砂糖もベタベタな会話。

今まで、ノアと白さんのフラグ建設現場には極力立ち会わないようにしていたが、それには「二人を邪魔しないため」という理由の他に、もう一つ重大な理由^{わけ}があった。

まあ、もうわかんと思うが、私は恋愛だのなんだのが大層苦手なのだ。

トリップ先で散々甘ったるいセリフを吐かれてきたため、最早そういったセリフに拒絶反応を示す程だ。

それに、今までの散々な体験から、少女漫画みたいな甘い恋愛は夢のまた夢どころか宇宙人の所業だと思っている。

恋愛自体が苦手だから「リア充爆発しろ」とかとはあまり思わないけど、こうも見せ付けられると嫉妬とは別の理由で「爆発しろ」と

思ってしまう。

「なんスカ補佐様、もしかして嫉妬っスカー？」

「ちえいやっ」

「ごふうっ！」

茶化しに入ったレモンの騎士の下顎にデコピンを喰らわす。

「パァン！！」と小気味いい音がしてレモンの騎士が後方に昏倒するが、まあ大事には至らないだろう。

ふん、身の程知らずめ。

「嫉妬ってなんのことだ？」

おおっと、こっちはまさかの反応だ。

単に私が嫉妬するはずがないと思ってるだけなのに、もしや白さんの恋慕気持にも気付いてないんじゃないかな。

「なんでもない。それよか、食事に集中しなさいよ。横でイチャつかれちゃ碌に料理も味わえないわ」

「は？別にイチャついてなんてないだろ。なあ、ホワイトさん？」

まさかの朴念仁でした。

哀れ白さん。

「自覚なしかよ……まあいいや。刺される前に改めろよ、この色男」

「……なんか、色男って言ってる割にはすごくけな貶されてる気がするんだけど」

「実際貶してる。………まったく、これだから鈍感系の主役はブツブツ」

「何言ってるかはわからないけど、口で『ブツブツ』って言うなよ……」

これも私が恋愛だのが苦手な理由の一つだ。

なんだってハーレムや逆ハー物の主人公達はああも鈍感なんだ、気付かないんだ。

私も何度か逆ハー的な展開に陥ったことがあるが、漫画やら小説やらで主人公が何故気付かないのか、全く理解できない。

だってあいつら露骨過ぎるんだよ！

顔合わせる度真っ赤になったり、会う度人の容姿を無駄に詩的に褒めてきたり、権力者特有のワガママっぷりで独占しようとしてきたり、聞えるような独り言で「僕だけを見てよ……」とか呟いたり。

全部スルーして来ましたけどね！ええ、もちろん！

つまりこんだけ露骨にアツピールされてるのに、なんで主人公達は気付かないのかってことですよ！

気付けよ！まだっるこしいわ！

……話が大きく反れたが、ともかく、白さんと言ひ海の子といいノアは絶対ハーレム属性を持っている。

そして、例に漏れずこいつも鈍感である、と。

……今後もこんなまだるっこしいやり取りを見せ付けられるのかと、考えるだけで辟易とする。

「……………不幸だ……………」

「どうしたんだ、某幻想殺みたいなセリフ吐いて」

「そうゆうお前はさっきから全力で白さんの幻想ブツ殺してるけどな」

「何が！？え、何ホワイトさんの幻想って！俺が悪いの！？これ俺が悪いの！？」

「あー、ジョンが恋しいぜ……………」

「またもや無視！？そして誰！？」

こうして、夜は更けていく。

第二十五話 確かに世の中は不公平だ。美人や美青年がいる一方で、あなたが

ホントに、なんでハーレム属性持ちの主人公ってあんなに鈍感なんでしょうね。

元ネタの紹介

※作中で説明(?)があるものは省きます。

・『パレード』について

作中で一応説明(?)がありましたが、アーティスト名に伏字をしてしまったので。

正確には平／沢／進さん（スラッシュは検索避け）です。
個人的に好きな曲なので、よければ聴いてみてください。

※7／29 歌詞をカットしました。

・お残しは許しまへんぞー！！

割りと有名ですよ。

某忍術学園の食堂の方の口癖。

第二十六話 去ってく女は追わない主義だ。髪も同じさ。……………チクシヨウ、

ご指摘をくださったk e i y aさん、感想をくださった啄木鳥さん、元ネタのご指摘と感想をくださった悠さん、ありがとうございます！

サブタイトルの長さは賛否両論なようですが、とりあえず今まで通りにサブタイを付けさせていただきます。

正直、作者も自分で長いとは思っているのですが、今まで通りの付け方で短くするにはどうしたらいいのやら^^;

一応善処してはみますが、付け方自体を変えるつもりはありませんので、悪しからず。

第二十六話 去ってく女は追わない主義だ。髪も同じさ。……………チクシヨウ、

そして、特に何事もなく最初の街に到着。

レモンの騎士が言った通り、魔物にも盗賊にも特に遭遇することなく、実に順調な道中となりました。はい。

ちえー、さっさとノアの初戦闘と洒落込みたかったのによー。

模擬戦はやったけど、実践は初めてだからな。

初めての実践って、結構主役にとってキーポイントですかんね。

まあ、それはそうとして。

街の入り口っぽいゲートっぽいところには、甲冑っぽいもんを着た警備兵っぽいのが二名程いるっぽい。

そして『っぽい』ばかり言ってるっぽい私。

馬車の御者席に座ったレモンの騎士が、懐から直径七〜八cm程の鎖に繋がれた金の円盤状の物体を取り出し、警備兵に見えるようにかざす。

円盤には何やら直線やら曲線やらが入り乱れたレリーフが彫られていた。

……ああ、これはあれかな。

「見ての通り王Z「この紋所が目に入らぬかあっ!!」補佐様!？」

横で前触れもなく叫んだ私に、レモンの騎士が突っ込みの代わりだと言わんばかりに声を上げる。

ちなみに、この道中で私は御者をやっているレモンの騎士の隣が定位置となった。

ノアと白さん
お二人さんの邪魔したくないし、横でイチャつかれんのかマジたまらんからな！まったく！

「すまん、言いたかったただだから。続けてくれ」

「あなた本当に奇行のタイミングがわかりませんよね！」

奇行とは失礼な。

ガイアが私に、もっと輝けと囁いているのだよ。

ガイアがそう言うのだもの。仕方ないね。

「あー、もう……………失礼した。見ての通り王族の者だ。話は通っていると思うが、通行の許可を貰いたい」

おお、ちゃんと喋ると騎士って感じるね。

あ、ちなみに言っとくけど、花輪はとうの昔に外させましたよ。

二日も着けっぱなしだとさすがに飽きるし。

その後、なんやかんや簡単な手続きをして、割とすんなり街に入ることができた。

とりあえずちゃんと王族を名乗ったってことは、邪教に対してノアを邪神再封印の責任とゆうか首謀者を押し付けて王族は無関係を装

うとか、そうゆうつもりはないらしい。

キンクリを脅したのは取り越し苦労だったかもしれないが、まあ予防線は張っとくに越したことはないな。

「なー、レモンの騎士よ」

「……なんスカ」

「そんな嫌そうな顔をしてくれるな。さっき警備兵っぽいのに紋所見せて王族だったの明かしてたけど、今後も王族だったことはオーブンにしてくわけ？」

「モンドコロってなんスカ……いや、そうゆうつもりはないっす。王族だったことで、いろいろ危険な目に遭う可能性ありますから。今は街に入るのに身分を証明する物が必要だったんで王章出ししましたけど、基本的に身分は隠すようにとの国王陛下からの仰せおおですんで」

「それを聞いて安心した。身分オープンにして王族特権で好き勝手やれとか言われてたら私や……まあ、別にどうもしないが」

「どうもしないんスカ」

「とりあえず身分を隠すようには言っただろうが、馬車二日分の距離すっ飛んでってわざわざキンクリ殴りにいくのも面倒だし」

「……突っ込むところが三つくらいあるような気がするんですけど、とりあえずキンクリって陛下のことっスカ」

「そうだお。王・クリムゾンの略な」
キング

「あれ、意外とまともな呼び方なんスね」

……いや、本当は全然まともなあってゆうか、真面目な呼び方じゃないんだけど。

「で。とりあえず、まずは宿屋へGOってことでok？」

横目でそれとなく街並みを眺めながら問う。

さすがに王都に近いってだけあって、かなり活気に溢れてんのな。

「そうですね。確か馬車を預けられる宿がありましたから、そこへ行きましょう」

「おう。この街来たことあるんだ？」

「ええ、以前この街で無差別殺人が起きてまして。中々犯人が捕まらなかったんで、俺達騎士団が呼び出されたんですよ」

「ふーん」

その後、特に迷うこともなくあっさり宿屋に着くことができた。

無差別殺人とやらは割りと最近の出来事だったのかな？

レモンの騎士の手綱捌きに躊躇いはなかったようだし。

件の宿屋は、小奇麗な外装の店だった。
くだん

裏には馬車を駐車するスペースがあり、馬を預けておくための馬舎

も完備している。

「おー、中々いいところでない。旅の商人やらお偉いのご用達かい？」

「そっすねー……ちょっと待っててください」

レモンの騎士は馬車を邪魔にならないところに止めると、御者席から降りて店内に入って行った。

まあ、いきなり断りもなしに駐車スペースに止めるわけにもいかんわな。

大人しく待つかね。

「瑠璃」

名前を呼ばれて振り向くと、ノアが馬車の荷台（でいいのか？）から御者席へ顔を覗かせていた。

ちなみにノアだけだ。白さんは見えない。

「壁—ω・—　チラッ」

「何が言いたいのかはわかったから、そのジェスチャーをやめろ。

……リモーネさん、店の中入っていったのか？」

「うん。お店の人と話つけてくるって」

「……いや、間違っていないんだろうけど、なんかそれだとクレームつけに行ってるみたいだな」

「細かいこと気にしてつとハゲンぞ」

「ハゲないから！まだ十代！俺まだ十代！！」

「……一つ話をしよう。あるところに、それはそれは美しい髪を持った青年がいたんだ。青年は、その髪が大層自慢だった。いつもその美しい髪のお陰で、周囲から持てはやされていた」

「出だしからしてフラグだろその話！その人確実にハゲるだろ！それで周囲に相手にされなくなって落ち込むんだろ！」

「青年は、自分の髪の毛達にもつと輝けと口やかましく言うんだ。髪の毛達は頑張つて輝いたんだが、いくら綺麗になっても褒められるのは青年ばかり。しかも青年はいくら褒められても満足しないでもっと輝けと髪の毛達に言うんだ」

「まさかのファンタジー展開！？てゆうかそれ確実に髪の毛達に愛想つかされるだろ！それでハゲるのかよ！」

「そんな青年に髪の毛達は言うんだ。『ナヌイ！？わしらの輝きが足りんじゃとおう！？この美の女神ヴィーナスでさえ嫉妬した我が実力！見くびってもらっては困るのう、若造よ！』と」

「髪の毛まさかのキャラ！！？」

「一斉に不平を唱えだす髪の毛達に、青年は唇を噛み締めた。『…：わかってる。わかってるさ、お前達の実力の凄さは！でも駄目なんだ、このままじゃ…：このままじゃ、両親の仇である悪の組織《奪猛罪》には勝てないんだ！！』」

「そして瑠璃お約束の超展開！！てか組織名！両親ハゲで死んだの！？」

「『おヌシ、まだあの事件のことを……いや、すまんかった……わしらの力が足りんのは、百も承知なんじゃ。だが、わしらも一度は華々しく活躍し、かつて《戦天使の兜》バード・キューティクルの名を欲しいままにした存在。己のプライドが……歳による力の減退を認められなかったのじゃ……」

「ネーミングセンス！そして髪の毛パネェ！！」

「『いいんだ……ごめん、俺ばかりつらいみたいな言い方して。お前達だってつらいのに、俺は……』」

『気にすんな若造！おヌシの親仇は、必ずやわしらの力で打ちのめしてみせようぞ！』

『そうだそうだー！』『元気だせ大将ー！』『皆あんたの味方だぞー！』」

「増えた！？いや、髪の毛達だから元からか！」

「『皆……ありがとう！俺、諦めない……絶対に、絶対に仇を取る！だから皆、俺に力を貸してくれ！』」

『当たり前じゃろがい！わしらはおヌシと一心同体！運命共同体じゃ！』

『ははは、そうだったな……行くぞ、皆！』『（一斉に）おう！』」

「無駄に感動的だなチクショおー！！」

「こうして、青年は髪の毛達に支えられ、周りからは変な人だと思われつつ、悪の組織《奪猛罪》のアジトを目指した」

「そりゃそうだろうな！端から見りゃ独り言だよ！」

「そして、なんやかんやで《奪猛罪》の幹部へ」

「面倒臭くなったのか！そうなんだろう！」

「『ついに辿り着いた……両親の仇……！』」

『フッフ、よくぞここまで辿り着いたな……えーと……名前わかんね！若者でいいや！』」

「ブチ壊しだあ——！！確かに名前出てきてなかったけど！」

「『覚悟しろ《奪猛罪》の幹部！俺はお前に容赦はしない！』」

『フン……愚かだな。私の顔に見覚えはないか？』

『な……どうゆうことだ……！？』」

「そしてフラグ——！！どうせ死んだはずの父親かなんかだろ！」

「『あなたは………ウォン老師！！？』」

「誰え————！！？」

「『ウォン老師……あなたは確か、増えるわかめちゃんお腹の中で十倍に膨れて死んだはずじゃ……！？』」

「ウォン老師どんな死に方してんの！？」

「『あれは私がでっち上げた嘘だ、名も覚えていない弟子の一人よ』」

「弟子の名前ぐらい覚えといてやれよ！」

「『尊敬に値する人物だったあなたが、何故《奪猛罪》に……！？』」

『尊敬に値する……か。私はそのような人間ではないのだよ。欲にまみれ……金に溺れ……ただ力で他者を蹂躪することだけを考えた生きていた……』」

「な、なんかいきなりマジな展開に……」

「『そんな時だった！《奪猛罪》はそんな私の目の前に現れ、全てを奪い、私を地に捻じ伏せた！……私は思った。これこそが、真の力なのだ！私のこの力など、技術など！ゴミ同然に過ぎなかったのだと……！』」

「……………（ドキドキ）」

「『ウォン老師……あなたは変わってしまった。俺があなたに教わったことは、そんなことじゃなかった！』」

『甘いな、若者よ……私は変わったのだ。《奪猛罪》によって与えられた真の力よって……！見よ我が力！【超絶後k——】』」

「宿屋の主人に話つけてきましたよー」

「「タイミング悪っ!!」」

ちなみにこの騒ぎの中、白さんは馬車の中で熟睡してたそうなの。

どうりで出てこないと思った……

……え、ハゲ？なんの話？

第二十六話 去ってく女は追わない主義だ。髪も同じさ。……………チクシヨウ、

今回は短めです。

本当はちゃんと宿屋に入るつもりだったんですが、脱線し過ぎました……orz

元ネタの紹介

※作中で説明(?)があるものは省きます。

・この紋所が目に入らぬか
有名どころです。

水戸の將軍様のお付きの人のセリフです。

・ガイアが俺に、もっと輝けと囁いている
某メنز雑誌のキャッチコピーの一つ。

・ウオン老師

某助っ人団で話にだけ出てくる人物。
変なゲームのレパトリーがパない。

第二十七話 「普通の人」と言われるより、「変人」と呼ばれたい。「変人」は

またもや感想をくださった啄木鳥さん、ありがとうございました！

どうも皆さん！

あまりにも暑くて一日でカリカリ梅を一袋空けた作者です！

皆も熱中症と塩分過多には気をつけようね！！

さくしゃさんのやくそくだよ！！

第二十七話 「普通の人」と言われるより、「変人」と呼ばれたい。「変人」は

私達は馬車を駐車スペースに移動させ、馬を馬舎に繋いでから宿屋に入った。

「……正直、この出だしは捻りがなさ過ぎてぶっちゃけ不本意だ」

「なんの話だよ」

「ノヤ……ノアの気にすることじゃにゃいよ」

「前触れなくも噛むなよ……言い直しても結局噛んでるし」

「かみまみた」

特に意味のないやり取りも、最早お約束である。

ちなみにこちらの宿屋、『グリーンピース』とゆうらしい。

……なんで豆?と思ったが、単に直訳して『緑のやすらぎ』みたいな意味の看板のようだ。

どうゆう翻訳だ、言語自動翻訳機能よ。直訳過ぎるだろ。

宿屋の入り口にあるカウンターでは——おそらく、宿屋の主人であ

ろう——人のよさそうなおじさんが、私達を迎えてくれた。

レモンの騎士がさっき話をつけてきたのはこの人か。

「いらっしやいませ。四名様でよろしいでしょうか」

ああ、そうだ。

言い忘れてたけど、一応私らは変装はして来てるんだよね。

レモンの騎士はここに来たことあるって言ってたけど、今は騎士団の物とは違う鎧を見に付けてるから、ただの旅の剣士にしか見えな
いと思う。

あと、騎士団って結構人数いるし多分顔は覚えてないだろう、と
うのはレモンの騎士の談。

ちなみに、特に鎧とか見に付ける物がなかったため、私含む残り三
人は『ただの旅人』ルックです。

……べ、別に後付けとか、たった今考えたとかそんなじゃないん
だからねっ！本当に言い忘れてただけなんだからねっ！

まあそんなわけで、宿屋の主人にはこっちの身元は割れてないと思
う。

てか、そう信じたい。

「ああ。二泊で頼む」

「一人部屋と二人部屋、共に空いておりますが、いかがいたします
か？」

「では一人部屋を……」

「待て待て」

レモンの騎士によって率先して進められていた会話に割り込むと、怪訝そうな視線が向けられた。

「どうかしましたか？」

さすがに人前とあって「補佐様」とは呼ばないらしい。

「二人部屋二つつ頼もーや。そっちのが安いでしょうに」

「しかし……」

言い淀むレモンの騎士。

ああ、白さんに二人部屋になんか泊まらせられないってか？

やれやれ、まったく。

こうして旅に出たからには、いつまでも王族気分じゃいられんだろうによ。

「お金はなるたけ節約せい。余裕ぶっこいて使っていると足りなくなつた時後悔するよ」

ねえ？とノアの方へ視線を振ると、こうゆう場の判断は慣れていないのか、曖昧な生返事を返された

ちっ、使えん奴め。

「……あの、私は二人部屋でも構いませんよ？」

結局、白さんの鶴の一声により、レモンの騎士は渋々ながら二人部屋を二つ頼んだ。

「二人部屋を二部屋で、青金貨三枚と赤金貨二枚になります。お食事は料金には含まれませんので、一階の食堂か外の料理店をご利用ください」

王都にいた頃こっそり城下に出てわかったが、この世界の通過は黄金貨、青金貨、赤金貨、緑金貨の四種類で、一番価値が高いのが黄金貨、一番価値が低いのが緑金貨らしい。

緑金貨は大体一枚十円くらいで、百枚分で一つ上の赤金貨一枚と同じ価値になるとのこと。青金貨も百枚で黄金貨になり、赤金貨だけが十枚で青金貨になる。

となると、それぞれの金貨が日本円でいくらになるか計算できるが、そこは日本とは物価がいろいろ異なるため、あまりアテにしない方がいい。

おやつ用の果物が緑金貨三枚とか、日本で果物一個三十円とか有り得んでしょ。

そんなわけで。

レモンの騎士が主人に必要な金貨を払い、部屋の鍵ももらったので、さっさと荷物を置きに行くことにした。

ちなみに、部屋は二階だった。

「さて、部屋割りに関しては……言う必要ないか」

「そっスねー」

「まあ、このメンバーだしな……瑠璃、お前ホワイトさんに変なことをするなよ？」

「しねーよ。私は変人だが、変態ではない！（キリッ）」

「どうゆう主張だよ！どの道変なことには変わらないだろう！」

「ちっちっち。残念ながら、変人と変態は大きく異なる。そりゃあ私は美少女の類の生き物は好きだが、そもそも美少女に関してはゴータッチ派ではなくノータッチ派だしな」

「その発言が既に変態の域なんじゃないのか！？てか何、ゴータッチ派とか！」

「とりあえず、白さんには別にへんなことしないぞ。あんなことやこんなことやそんなことはするつもりだが」

「もう変態以外の何者でもないだろう！！一文字変えたところで不安なのは微塵も変わらないから！」

「心外だな。一緒に寝ることや、一緒に着替えることや、夜中こっそり起きて寝顔眺めたりすることのどこが変態なんだ」

「……………ホワイトさん、何かあったら俺のところに来ていいからな？」

「てゆうか、最後のは普通に変態じゃないんスか」

「え、あの……ノアと一緒に部屋ではないのですか？」

「「うおい」「」

部屋にそれぞれ荷物を片付けたあと、下の食堂でご飯を食べようという話になった。

ちなみに今はお昼時。

二日ぶりのNOTサバイバル料理である。

男性陣と合流すると、ノアが胡散臭げな視線を向けてきた。

「……何もしてないだろうな？」

「してねーって！私は年中発情期の兎か！」

「そうじゃない。無茶振りとか悪戯とかして困らすなよって言うんだよ」

「大丈夫だ。私はノアみたいな天性の突っ込みや、レモンの騎士みたくないじられキャラにしかあーゆーことはせんよ」

「俺……いじられキャラなんスカ……」

「天性の突っ込みってなんだよ……」

レモンの騎士とノアががつくりとうなだれるのを完全にスルーして食堂に向かう。

一階に下りて行くと、ざわざわと人の声が聞こえてきた。

……ん？

「……なんか、騒がしいな」

ノアが私の思ったことを代弁してくれた。

食堂は一階のカウンターとゆうかフロント（と言っているのか）と扉一枚隔てた場所にあり、ちよつと大声を出せばフロントに丸聞こえなのである。

まるで隠そうともしない怒号は、先程受け付けをしてもらっていた時には聞こえなかったはずだ。

これはもしかや……。

「……………フラグか？」

「え？何か言ったか？」

「うんにゃ。なんもないよ」

私の予想が正しければ、イベントフラグが一本立った、ということだ。

つまり、面倒事の予感。

私は一応、いつでも能力を発動できるようにしておく。

一瞬目配せをされたので頷いてみせると、ノアはなるべく音を立てないよう、そっとフロントと食堂を隔てる扉を開いた。

「おい、ねーちゃんよお！オレの一張羅汚してくれやがって、どうしてくれんだよ！」

「も、申し訳ございません！」

……………。

よし、状況の確認をしよう☆

？なんか怒鳴り散らしてる服に液体の染みが付いたチンピラがいる。

？平謝りしてる店員らしきおねーちゃんがいる。

？床に散乱する割れたグラスと飲み物らしき液体。

以上。

……とりあえず、予想の範囲内の状況であることは察しがつく。

幸い、どうやらチンピラは怒鳴るのに夢中でこちらには気付いてないようだ。

それをいいことに、私は啞然とする他三名を尻目に、扉の近くの席に座る男性客にそっと耳打ちする。

「ねえ、これはどうゆう事態なのよ」

「……ああ、オーカーの奴のいつもの嫌がらせでさ。飲み物運んでる娘さんの足引つけたまではいいけど、転んだ娘さんの持ってた飲み物があいつの服にかかったんだ。……まったく、自業自得もいいとこだってのに、迷惑な奴だよ」

苦々しげに、男性客は囁き返す。

……ふむ。

とりあえず、律儀にも説明してくれた男性客のお陰で、いくつか情報が入ってきた。

？チンピラはオーカーとか言うらしい。

『いつもの』って言われるくらいだから、結構悪いことばっかりしてるっぽい。

？おねーちゃんは実際店員らしい。

んで、文面からして宿屋の主人の娘っぽい。

てゆうか、娘の一大事にご主人は何してんだよ。なんでいないんだよ。

……まあ、とりあえずこの場で重要なことは、あのチンピラが非常に不快であるということと、ここでおねーちゃんを助けて恩を売つとけば、多少のサービスを期待できるかもしれないということだ。

なら話は早い。あのチンピラをとっちめる。

もちろん、ノアに華を持たせて、だ。

ノアのハーレム属性があれば、助けられたおねーちゃんは確実にノアに惚れる。

さすれば、期待以上のサービスを受けられるかもしれない。

「……ノア。私が相手の注意をそらす。その隙を突いておねーちゃん避難させてから、チンピラを捻じ伏せろ。白さんは部屋の端っこにいな。レモンの騎士はいざって時に白さん守る。OK？」

そんな私の下心も知らず、指示された三人は神妙な顔を頷く。

「……気を付けろよ」

「言われんでもヘマはせんよ。任せんさい」

緊張した顔のノアに、につ、と笑って見せる。

「……わかった。任せる。……あと、ふざけて●魂みたいなことはするなよ？あの……なんだっけ、四天王編の最初の方の。あの、『今肩叩いたアレで全身の骨が粉々にー！』とかなんとか言うやつ」

……土壇場で随分と具体的な忠告をしてくださる。

まあ、実際私はそうゆう類のことはやりかねんからな。

「わーかったよ。銀●みたいなことはしないよ。それに、ふざけてとは心外だな。私はいつでも全力だ」

「余計質悪いわ！」

チンピラに気付かれることを考慮してか、ノアが小声で怒鳴るとゆう器用な真似をこなす。

「ま、お互い役割を果たしましょーや。……じゃ、行ってくる」

返事も待たず、私はてってとチンピラとおねーちゃんのところへ歩みよる。

「ちよいとあんた！こんな人が大勢いるところで何しとるね！そがな大声で、おなごにゃ優しくせんといけんよ！」

（だからどこの方言だよ!!）

なんかノアの思念を拾ったような気がするが、無視だ、無視。

「んだとテメエ！邪魔すんじゃないねえ!!」

案の定怒ったチンピラは、一応私は女性だということにも関わらず、躊躇いなく拳を振り上げた。

そして私はその場から一步も動かず、甘んじてその拳を左頬に受け

――

ゴトリ

――首が、固い音を立てて床に転がり落ちた。

一体、誰が予想できたであろうか。

少女がガラの悪い男に殴られ、その首が転がり落ちるなどと。

あまりのことに、誰も状況に着いて行けず、ただ恐怖と驚愕に目を見開いている。

一瞬で静まり返った食堂で、私は切断面から吹き出る血で服を汚しながら床に落ちた自分の首を拾い上げ、その顔をチンピラの方へ向けた。

「おいてめぐるあ。てめーのせいで血で服が汚れちゃったじゃねーか。どうしてくれる。ファツキン」

「●魂どころの話じゃねえ――――！！！！」

絶叫と共にノアにドロップキックをもらった。

「なんだよ！銀●みたいなことはしてないじゃんよ！」

「●魂以前の問題だろ！！何が『血で服が汚れちゃったじゃねーか』だ！！シヨッキングにも程があるわ！！」

なんか涙目で訴えられた。

私はア●レちゃんよろしく生首を小脇に抱え、「んちゃ！」のポーズを取る。

「注意はそれただろ！？」

「それたどころか大注目だよ！！」

軽くパニックっているらしいノアに全力で反論されるが、このまま口論に発展しても仕方ない。

どうやら今ので役割のことは完全に頭から吹き飛んだようで、仕方なく私はチンピラの方へ振り返る。

「で！あんたのせいで服が汚れたっつってんの！弁償しろ弁償！！」

そう言って、腕と脇腹の間からギロツと睨みつける。

チンピラはたっぷりの間をおいてから、ぶわっと滝のような冷や汗

を全身から噴き出した。

「うわああああ化け物だあああああ————！！！」

そうして、脱兎のごとく逃げるチンピラ。

……ふう、やれやれ。

これで奴はこの店には二度と寄り付かないだろう。

やることも終わったことだし、私は形だけ指パッチンして、『エフエクト能力』でボワンと煙のようなエフェクトを出す。

「……はい、皆さんご安心を。今のは幻術です。わたくし、幻覚術を生業といたします奇術師でございまして。咄嗟のこととは言え、驚かせてしまい、申し訳ございません」

煙が晴れると、そこにいたのはいつもとなんら変わらない私。

首もくつついてるし、切断面から噴き出し床に赤い水溜りを作っていた血はどこにも見あたらない。服も綺麗さっぱりだ。

何をやったのかと言うと、『エフェクト能力』で煙幕を張ったあと、『超回復能力』で首をくっつけ、服の血や床の血溜まりは血液中の魔力に働きかけて蒸発させた。

普通に幻術使った方が遥かに楽だろうって？

手品や幻に見せかけて実はリアルにやるのが楽しんだろが。

切断マジックとかリアルに切断してくっつけてたら面白いじゃん。

とりあえず嘘八百でその場を沈め、プンスカとノアに向き直る。

「もー、言った通りにしてくんなきゃ困るじゃん」

「できるか――――！！！！」

宿屋『グリーンピース』では、この日少女の首が二度舞ったとゆう。

第二十七話 「普通の人」と言われるより、「変人」と呼ばれたい。「変人」は

……なんかグロい話になってすみません。
きつと、暑さのせいです。そうに違いない。

この世界の流通貨幣は、緑金貨が十円、赤金貨が千円、青金貨が一
万円、黄金貨が百万円となっております。
作中にもある通り、物価はいろいろと違うのですが、一応おさらい
ということ。

一般常識を考えるのは、何気に変です。
瑠璃ちゃんはこのあといろんな世界を渡るので、なるべく他の世界
と被らせたくないのです。

オーカー＝黄土の意。

つまり、作中には出てきませんでしたが、チンピラの髪の色は黄土
色です。

元ネタの紹介

※作中で説明(?)があるものは省きます。

・かみまみた

ラノベの某物語に出てくるセリフ。

「かみました」が言えず、さらに噛む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0420r/>

観賞者で干渉者

2011年8月16日16時12分発行